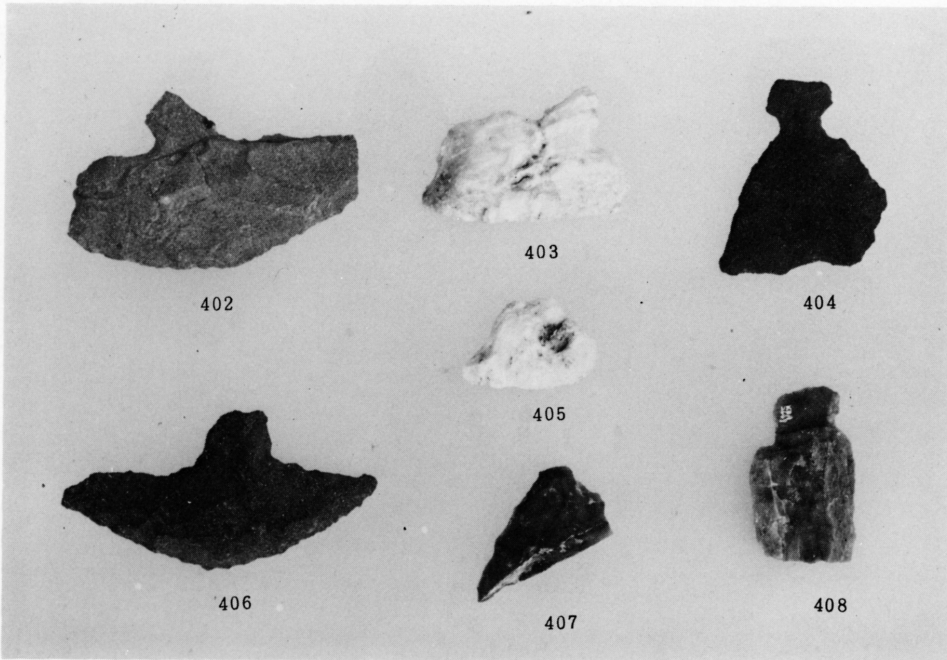
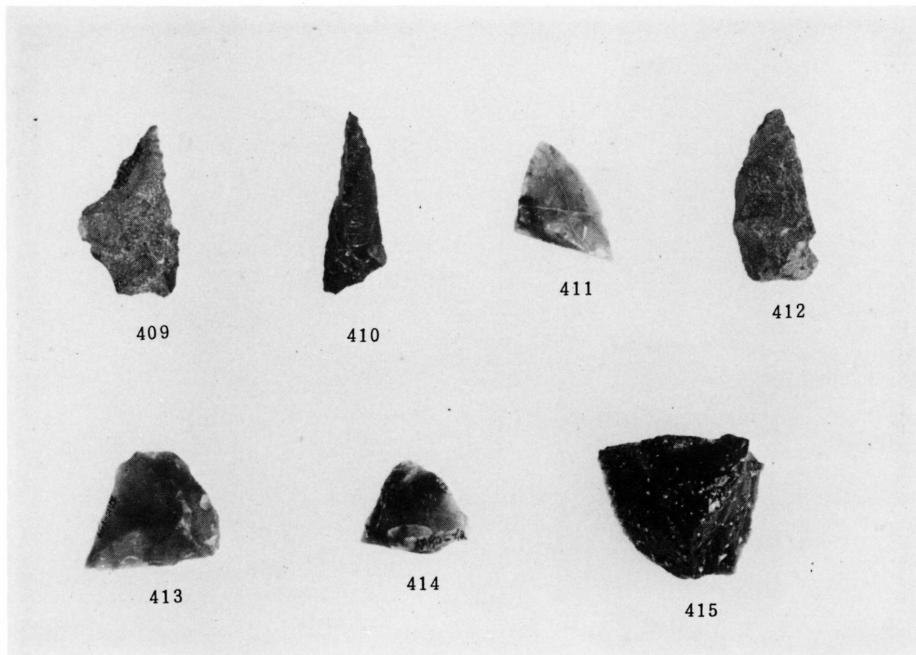


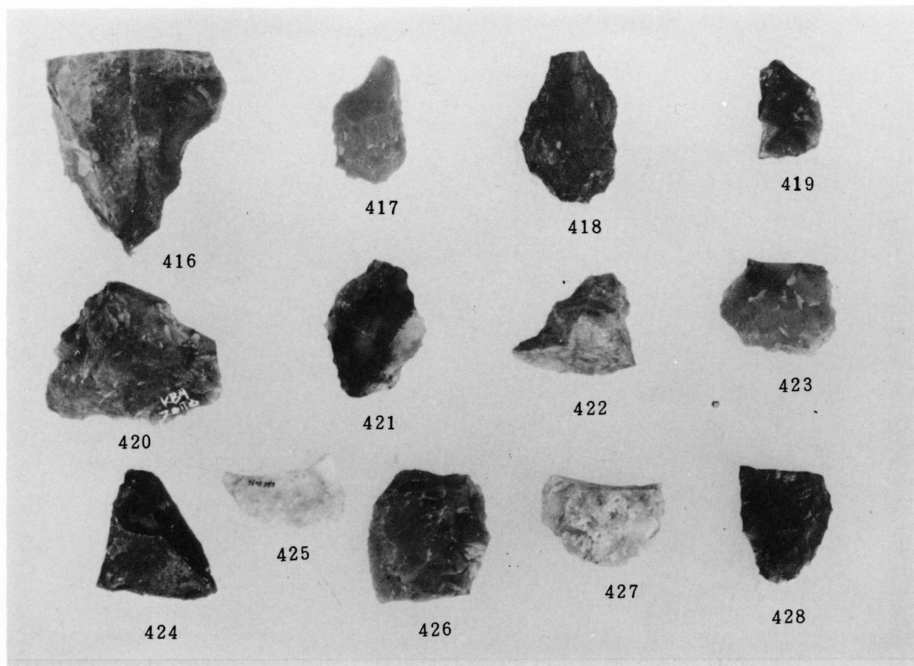
1. 磨製石斧



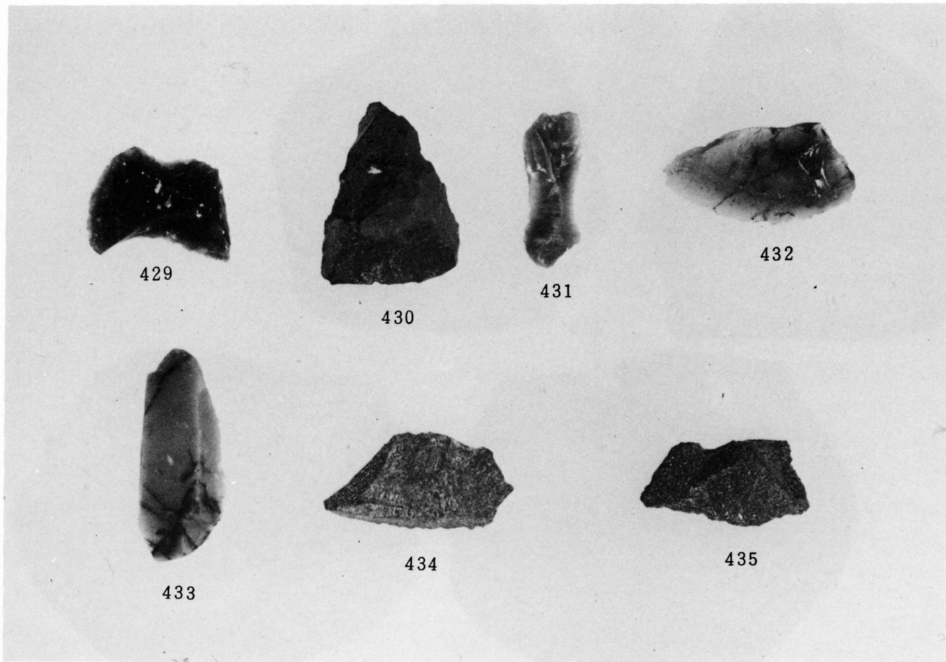
2. 石匙



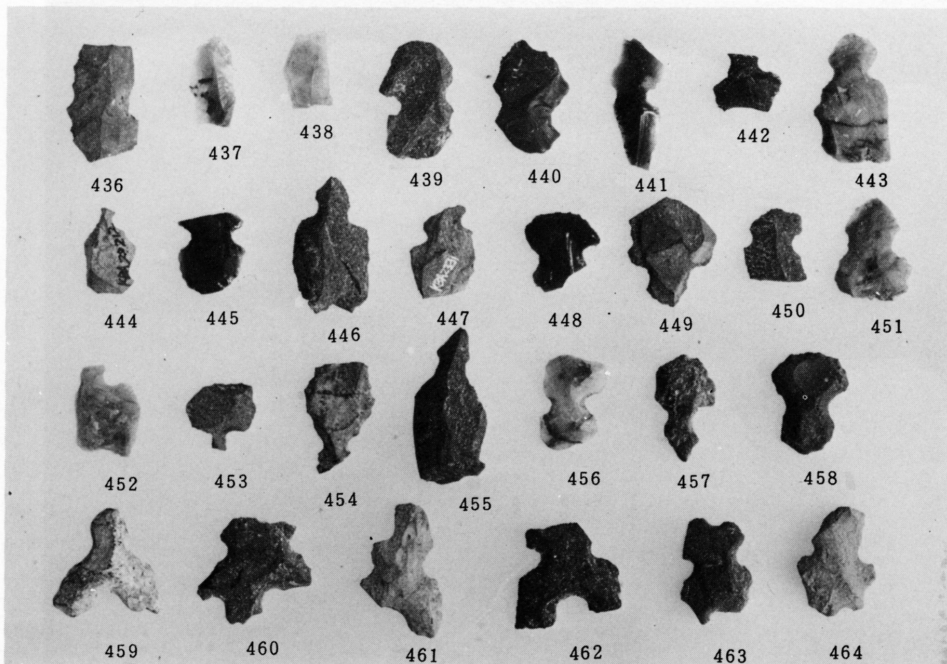
1. 石錘・石槍・石核



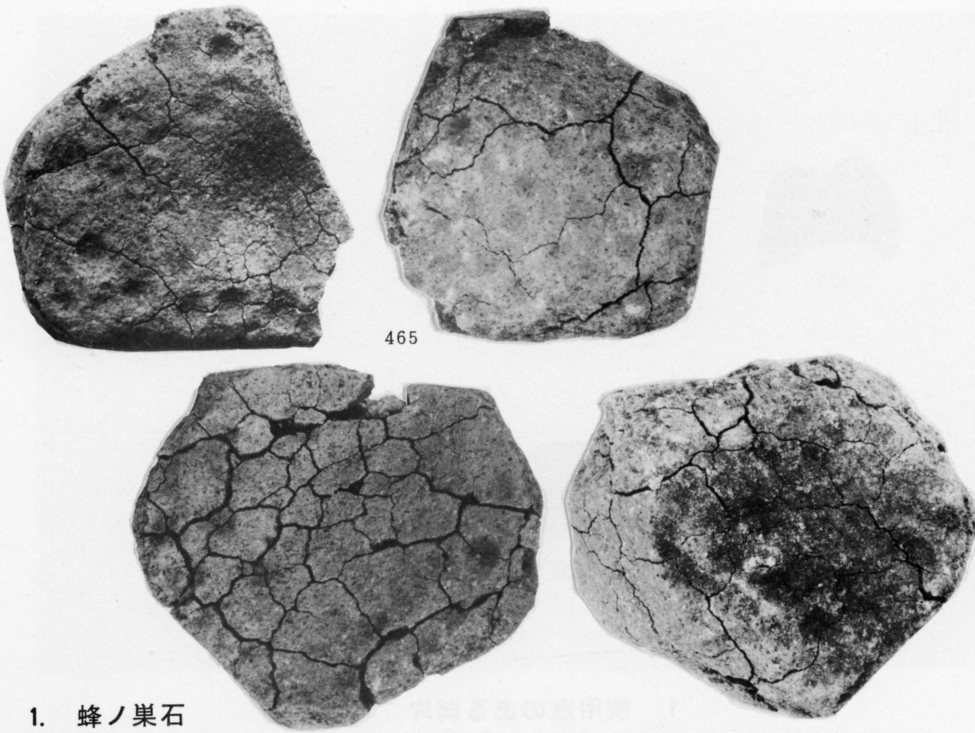
2. 加工痕のある剥片



1. 使用痕のある剥片



2. 剥片・つまみ形石器・抉り入れ石器



1. 蜂ノ巣石



2. 磨石・凹石



1. 弥生式土器口縁部



2. 弥生式土器底部



1. 道路迹



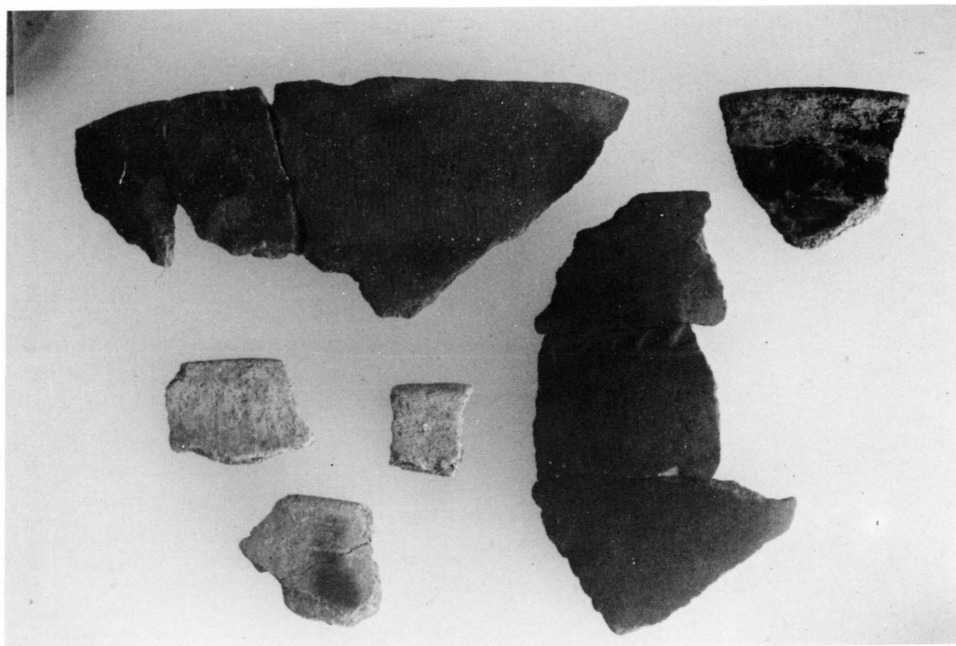
2. 土坑



1. 溝状遺構



2. 土師器皿出土状態

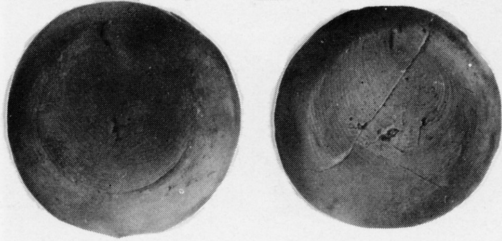
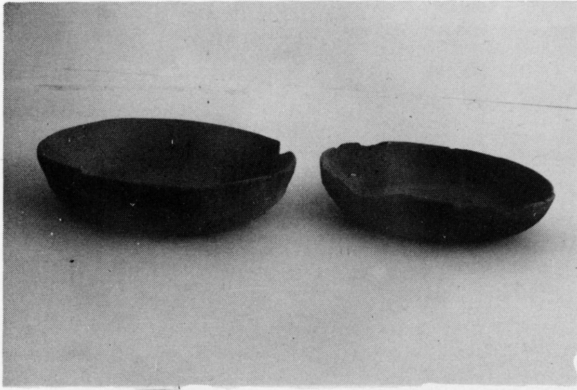


1. 古墳時代の土器

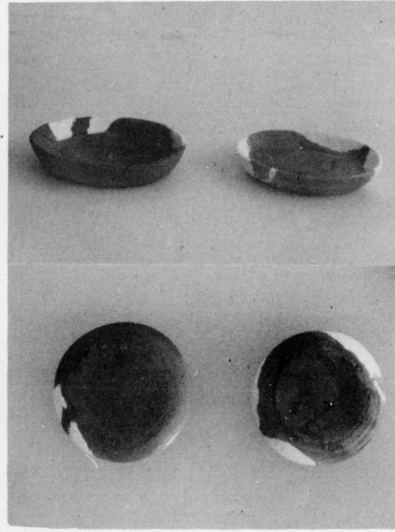


2. 古墳時代の土器

2-1112



1. 土師器皿

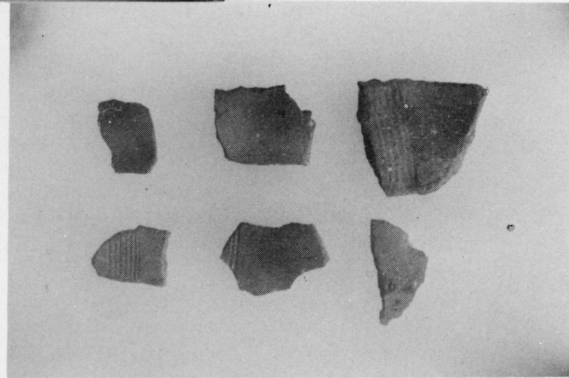


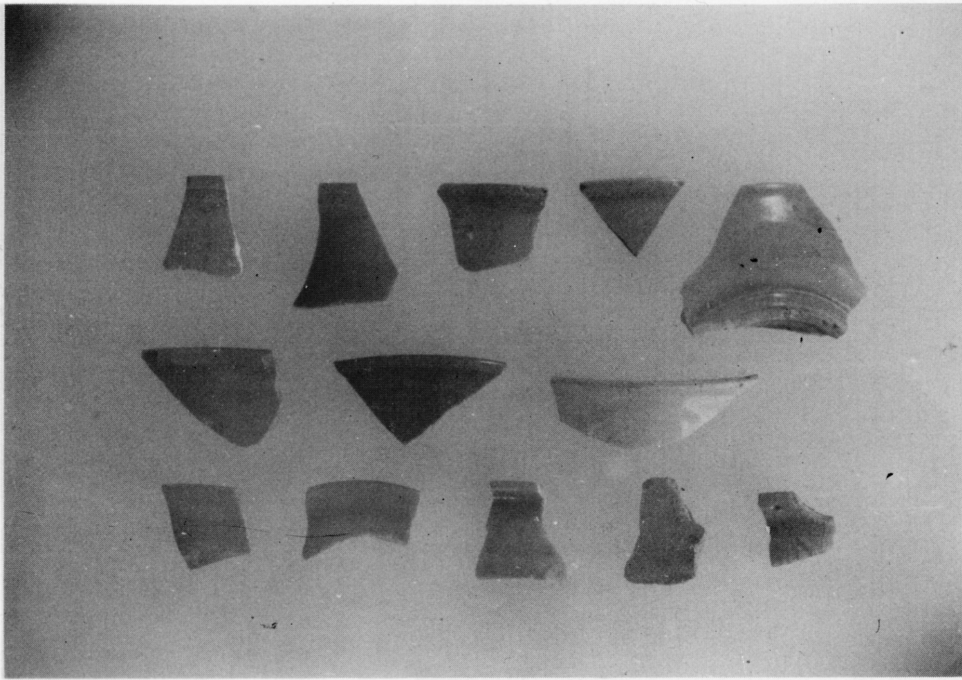
2. 土師器皿



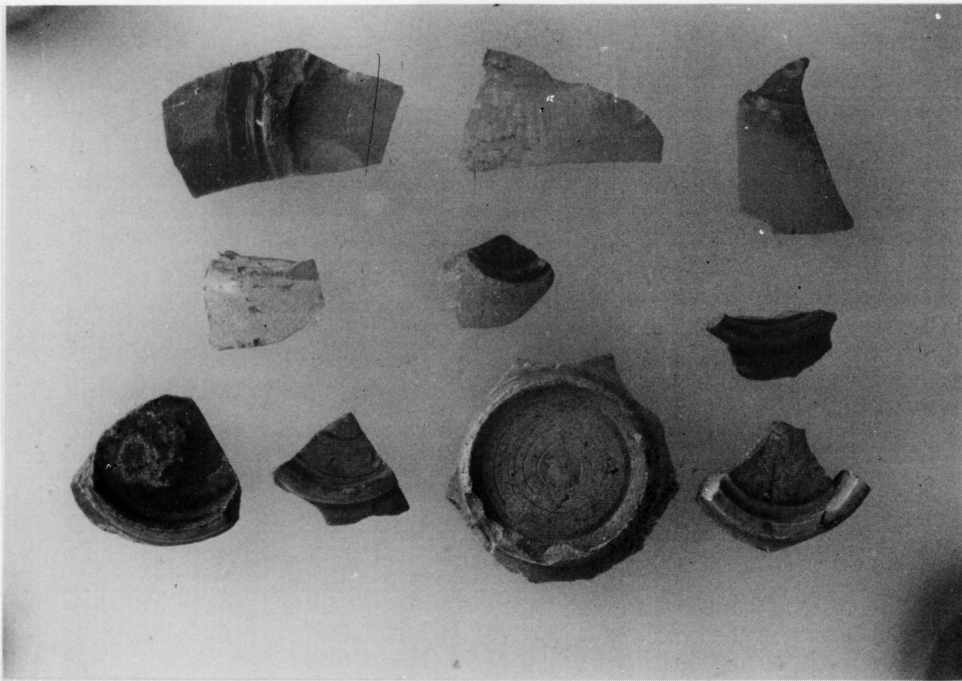
3. 青 磁

4. 陶 器

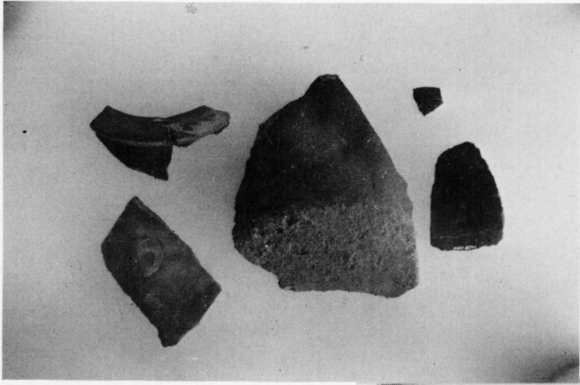




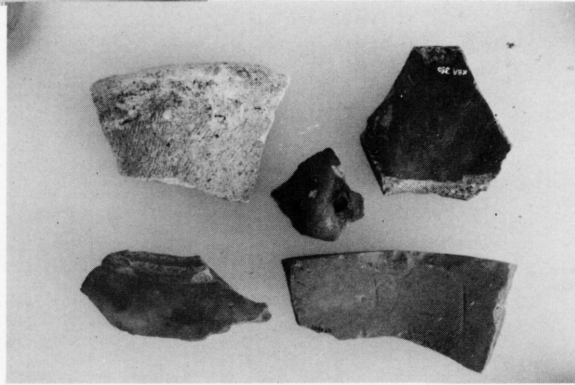
1. 青 磁



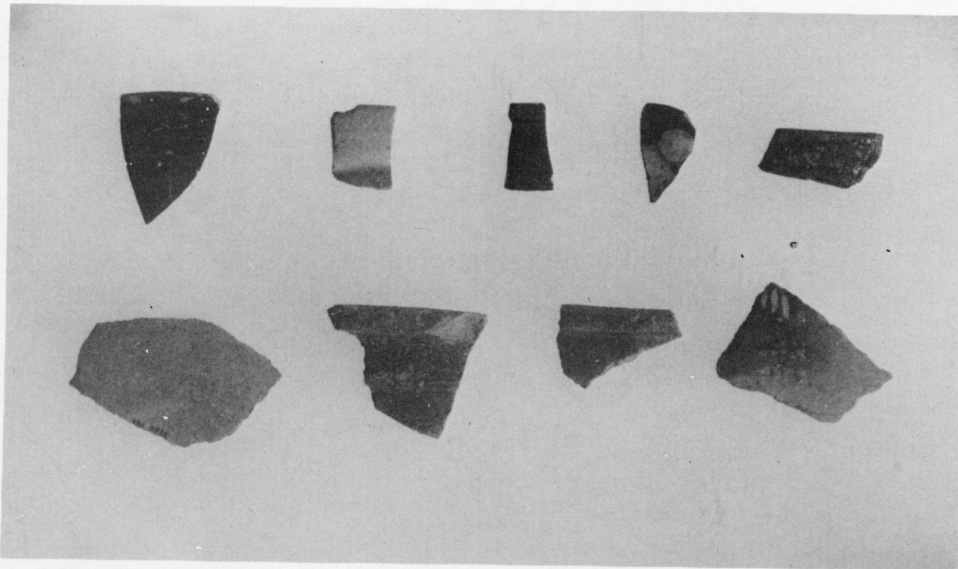
2. 青 磁



1. 陶器



2. 瓦質土器



3. 近世の陶磁器

木場 A - 2 遺跡

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴って、昭和53年～昭和54年度に発掘した木場A-2遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 木場A-2遺跡の調査は、牛ノ浜修が担当し、本書の執筆も牛ノ浜が行なった。
4. 出土品は、文化課収蔵庫に保管している。整理・復元作業は、収蔵庫の整理作業員が行なった。
5. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
6. 遺物番号は、木場A-2遺跡で通し番号を付した。
7. 発掘調査にあたり、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏・故加治木工業教諭池水寛治氏に指導・助言を得た。石器については岡山大学稲田孝司氏の指導を得た。

目 次

例 言	1
目 次	2
第1章	3
第1節 調査の組織	3
第2節 調査の経過	3
第2章 調査の概要	5
第1節 区割の設定	5
第2節 層 序	5
第3章 遺構・遺物	10
第1節 IV層出土の遺物	10
第2節 V層出土の遺物	12
第3節 VI層出土の遺物	13
第4節 VII層出土の遺物	17
第5節 VIII層出土の遺物	26
第4章 まとめにかえて	27

挿 図 目 次

第1図 木場A-2遺跡の地形図	7	第8図 第VI層出土石器実測図	15
第2図 第IV層出土遺物分布図	8	第9図 第VII層出土遺物分布図	18
第3図 第IV層出土遺物分布図	9	第10図 第VII層出土石器器種別分布図	19
第4図 第IV層出土石器実測図	10	第11~12図 第VII層出土石器実測図	20
第5図 第V層出土遺物分布図	11	第13図 第VIII層出土遺物分布図	24
第6図 第V層出土石器実測図	12	第14図 第VIII層出土石器実測図	25
第7図 第VI層出土遺物分布図	14		

図 版 目 次

図版1	1. 遺跡近景 (南から)	2. 発掘風景	28
図版2	1. IV層出土の石器	2. V層出土の石器	29
図版3	1. VI層出土の石器	2. VI層出土の石器	30
図版4	1. VII層出土の石器	2. VII層出土の石器	31
図版5	1. VIII層出土の石器	2. VIII層出土の石器	32

表 目 次

表1	IV層出土石器分類表	10
表2	V層出土石器分類表	13
表3	VI層出土石器分類表	16
表4	VII層出土石器分類表	22
表5	VIII層出土石器分類表	26

第 1 章

第 1 節 調査の組織

調 査 責 任 者	文 化 課 長	谷 崎 哲 夫
	文 化 課 長	猿 渡 侯 昭
	課 長 補 佐	荒 田 孝 助
	課 長 補 佐	本 田 武 郎
	専 門 員	本 藏 久 三
	主任文化財研究員	諏 訪 昭 千 代
	主 事	牛ノ 浜 修
	係 長	中 条 享
	主 幹 兼 係 長	川 畑 栄 造
	主 事	伊 地 知 千 晴
	主 査	安 藤 幸 次
	主 事	天 辰 京 子
	主 事	山 下 玲 子

第 2 節 調査の経過（日誌抄）

発掘調査は、昭和53年12月11日から昭和54年4月23日まで行ったが、経過は日誌抄により以下略述する。

昭和53年12月11日(月)～12月15日(金)

木場A-2遺跡発掘調査開始。STA 162+20とSTA 162+10の境界杭を中心線とし、中間点で東側をE区、西側をW区と区割りする。桑畑のため桑の根の除去作業より始める。遺跡面積が狭いため最初から全面調査にとりかかる。E区より層位を確認しながら調査する。遺跡は傾斜地で層位ごとの調査が困難である。

12月18日(月)～12月22日(金)

E区IV層掘り下げ。W区表層除去。W区は表層のすぐ下にIV層が検出される。IV層、V層上面に石鏃出土。W区VI層下部に黒曜石製断面三角形尖頭器出土。E区IV～V層掘り下げ。W区V～VI層掘り下げ。W区黒曜石剥片・碎片がVI層中に出土し、中世の遺跡である可能性を旧石器時代の遺跡と判断し、調査期間および調査方法を再検討する。

昭和54年1月8日(月)～1月12日(金)

E区IV層～V層掘り下げ。E区は傾斜面のためV層が厚い。W区VI層掘り下げ。黒曜石剥片出土。

1月16日(火)～1月19日(金)

V層～VI層掘り下げ。霜柱が強く遺物が浮きあがり調査が困難である。

1月22日(月)～1月26日(金)

下部の層位と遺物包含層確認のため東西・南北に2m幅のトレンチを設定し確認をいそぐ。VI～VII層にも包含確認。E区V層下面から黒曜石製断面三角形尖頭器出土。また、チャート製製切出し状ナイフ形石器出土する。今週いっぱい木場C遺跡終了にともない作業員を増員する。

1月29日(月)～2月2日(金)

トレンチ調査と平行してE区のVI層掘り下げ。岡山理科大学三宅寛氏見学。2月1日雪、寒さが厳しくなる。

2月5日(月)～2月9日(金)

VI層掘り下げ。遺物の分布が北側に集中しはじめる。W区はVI層が薄くVII層に遺物の出土がみられる。

2月13日(火)～2月16日(金)

南北トレンチでVII層より多くの黒曜石製剥片・碎片出土。VI層の黒曜石と比較してやや気泡の少ないものに石材がかわる。VII層上面にて断面三角形尖頭器出土。E区VI層下部掘り下げ。W区VI層下部～VII層掘り下げ。加治木工業高校池水寛治氏指導。

2月19日(月)～2月23日(金)

E区VI層下部，W区VI層下部～VII層掘り下げ。

2月26日(月)～3月2日(金)

E区VI層下部，W区VII層掘り下げ。E区桜島パミスと思われる層位確認。その直下より黒曜石の平扁礫を利用した細石刃核出土。寒い日が続く。2月28日，3月1日雪のため作業中止。

3月5日(月)～3月10日(土)

E区VI層，W区VII層掘り下げ。断面図作成(1/20)。今週より木場A遺跡から作業員の加勢をもらう。

3月12日(月)～3月17日(土)

断面用畦はずし，表層より掘り下げ。E区VII層掘り下げ。

3月19日(月)～3月24日(土)

E区VII層掘り下げ。W区VII～VIII層掘り下げ。W区のVII層に遺物の集中がみられる。別府大橋昌信氏見学。

3月26日(月)～3月31日(土)

VI～VIII層掘り下げ。

4月9日(月)～4月13日(金)

VI～VIII層掘り下げ。遺物の出土状態で集中部と点在個所にわかれはじめる。

4月16日(月)～4月21日(土)

E区集中個所掘り下げ。レンズ状になりにこむ。下層のトレンチ確認。

4月23日(月)

トレンチ掘り下げ。遺物なし。木場A-2遺跡終了。

第2章 調査の概要

第1節 区割の設定

木場A-2遺跡は、東西33m×南北15mの約350㎡の範囲で、川内川南側の舌状台地縁辺部にあり、川内川からの比高は約80mである。木場A遺跡の東側700mであり、南側に遠目ヶ丘と呼ばれる楠原の岡が綾織の谷におりる標高258mの傾斜地に位置している。

当地は畑であったが桑畑のため、その除去作業から始めた。調査実施にあたっては、面積が狭いため、STA 162+20の境界杭とSTA 162+10の境界杭より南へ2.5m延ばしその点を結ぶ線を中心の東西線とし、中央に南北の畦を残し、東側をE区、西側をW区と設定し、トレンチでなく、グリッド調査を行った。当初、分布調査に基づき土師器・須恵器の散布地として調査にあたったが、他の遺跡での縄文時代包含層までは、傾斜地のため削平され部分的にしきみられなかった。

中世から古墳時代の遺物として、土師器・須恵器・陶器の破片が出土したが、全て表層からの出土で層位的確認は出来なかった。

縄文時代の遺物としては、Ⅳ層・Ⅴ層から石鏃・剝片（黒曜石・チャート）が出土したが、土器の出土はみられなかった。

旧石器時代の遺物としては、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層にかけて細石刃・細石刃核・ナイフ形石器・断面三角形尖頭器・スクレイパー・剝片・碎片等が出土した。遺構は検出できなかったが、遺物は調査地域のほぼ中程の北側に集中してみられた。尚、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層と層位は一応区別したが、傾斜地のため若干の問題を残している。

第2節 層序

木場A-2遺跡は山の傾斜面を削平して畑地にしたため南側では、縄文時代の包含層（Ⅳ層）がなく、遺跡面積が狭いことにより層位の標準層は認められなかったが、復元すると次員のような層位になる。

第Ⅰ層

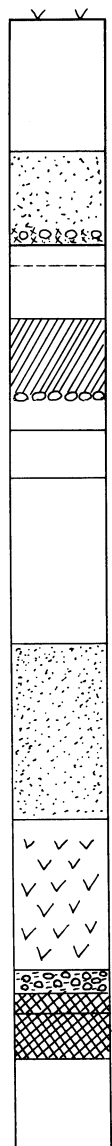
表土であり、現在の耕作土である。

第Ⅱ層

通常黒ニガと呼ばれている層位である。当遺跡では該当する層位はみられなかったが周辺の遺跡との関連で第Ⅱ層を設けた。

第Ⅲ層

黄褐色砂質土層で、下部にパミスがブロック状にみられるが、連続した層にはならない。この層は、アカホヤ層と幸屋火砕流に対比できるもので、その起源は鬼界カルデラに求められ、6050～6400Y.B.P.の年代が与えられている。



第IV層

青灰色火山灰層 (IV a層)と淡青灰色火山灰層 (IV b層)である。石鏃が検出されている。

第V層

黒褐色粘質土層である。遺物は石鏃だけであるが、周辺の遺跡では縄文時代早期の遺物が検出されている。

第VI層

暗茶褐色粘質火山灰層である。第V層と第VI層の間には、桜島起源とされる黄褐色パミス層がブロック状にみられる。第VI層からの遺物には、細石器・ナイフ形石器・断面三角形尖頭器を包含する。

第VII層

暗黄褐色火山灰層である。遺物として、細石刃・断面三角形尖頭器・剥片等が包含されている。細石刃の包含がみられるが、出土層位はI層の直下になり第VII層の包含であるかどうかむずかしい。

第VIII層

茶褐色火山灰層であり、断面三角形尖頭器・スクレイパー・剥片が上面に包含されていた。

第IX層

黄シラス層であり入戸シラスに該当する。

第X層

礫混りシラス層で大隅降下軽石に該当する。

第XI層

淡桃色シラス層で入戸火砕流に該当する。

第XII層

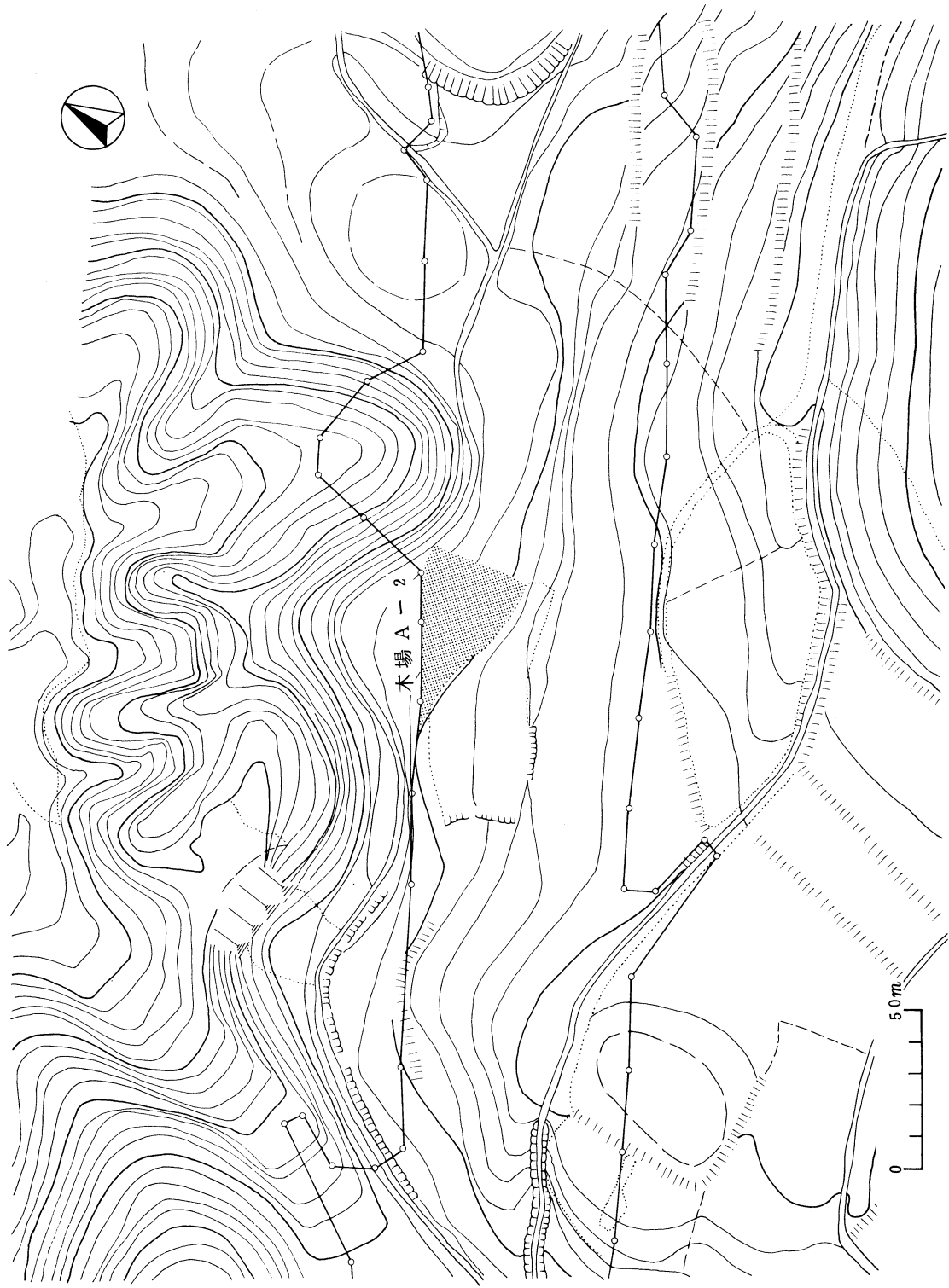
茶褐色粘質である。

第XIII層

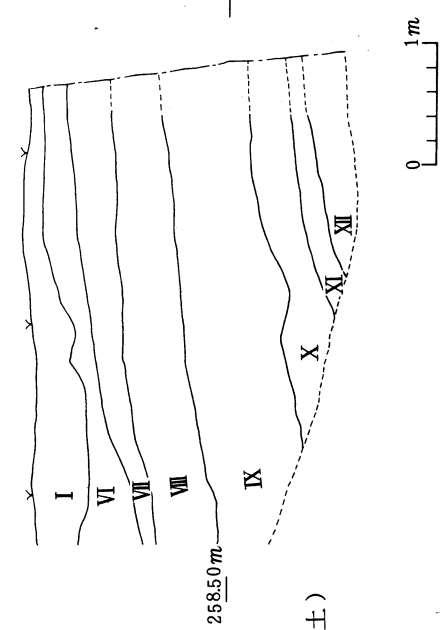
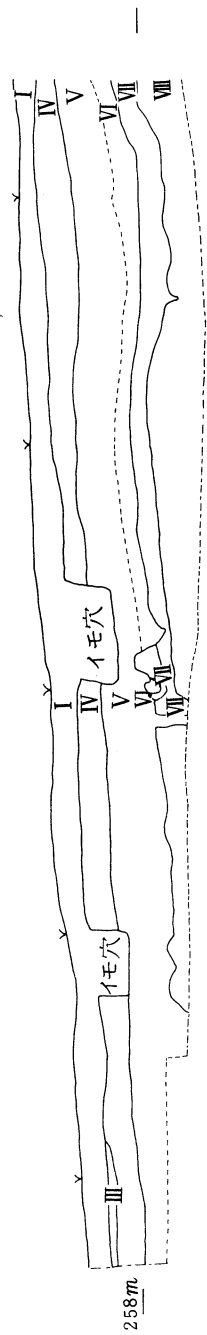
黒色粘質土であり、第XII～XIII層は粘質湖成層である。

第XIV層

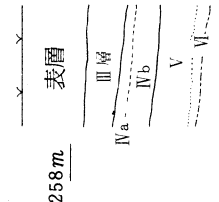
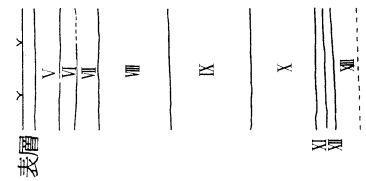
淡赤褐色粘質土層で安山岩腐植土である。



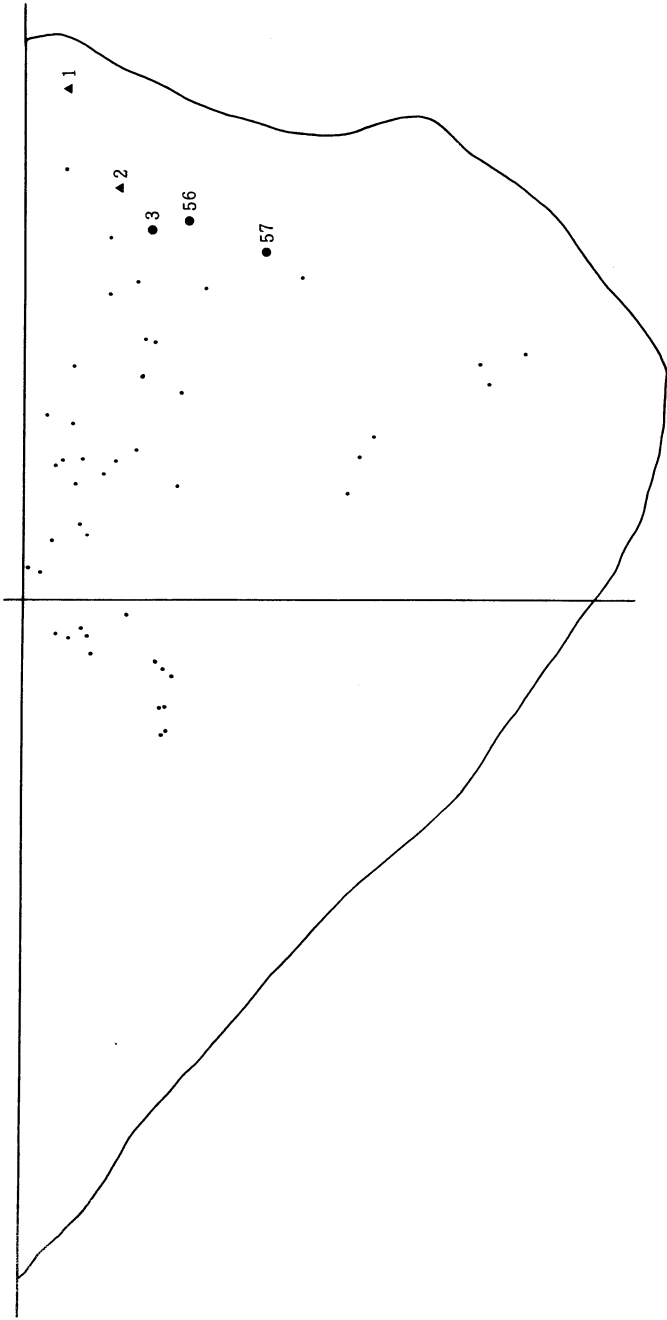
第1図 木場 A-2 遺跡の地形図



- 表土
- I 黄褐色砂質土層
- III 黄褐色火山灰層
- IVa 淡青色火山灰層
- IVb 黒褐色粘質土層
- V 黒褐色粘質火山灰層
- VI 暗茶褐色火山灰層
- VII 暗茶褐色火山灰層
- VIII 黄シラス
- IX 礫層
- X シラス
- XI 淡桃色シラス
- XII 茶褐色粘質土
- XIII 黒色粘質土
- XIV 淡赤褐色粘質土 (安山岩腐植土)



第 2 図 地 層 図



● 剥片
▲ 石鏃

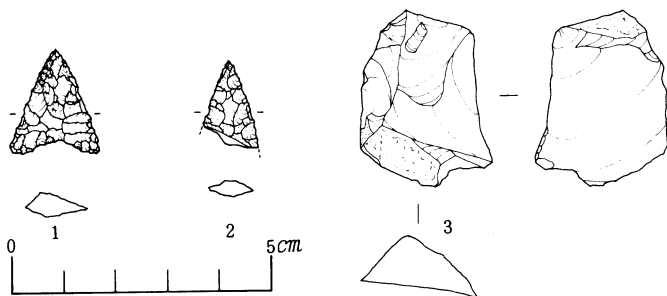


第 3 图 第 IV 层出土遗物分布图

第3章 遺構・遺物

調査の概要で述べたように、当初の予定は古墳時代～中世の土師器・須恵器・陶器の遺構・遺物の調査であったが、傾斜地で削平されていたため、古墳時代の遺物は表層でしか出土しなかった。Ⅳ層・Ⅴ層の遺物として石鏃と黒曜石・チャート製の剥片が出土した。土器の出土した。土器の出土はみられなかったが周辺遺跡との関連で縄文時代に想定される。Ⅵ層からは細石刃・細石刃核・ナイフ形石器・断面三角形尖頭器の出土をみた。Ⅶ層・Ⅷ層にも断面三角形尖頭器・剥片・石核（残核）の出土をみた。これは層序の時間的差を考えるより、傾斜地の遺跡として層序の把握が確実でなかった。これは後の項でくわしく述べるが、断面三角形尖頭器の比較と遺物の集中個所の構成より考えられる。次に各層位別に遺物の紹介をしたい。

第1節 Ⅳ層出土の遺物（第4図 図版2）



第4図 Ⅳ層出土の石器実測図

層位の頃で述べたように、Ⅲ層黄褐色砂質土層下にⅣ層の青灰色火山灰層が存在する。Ⅲ層の黄褐色層はⅣ層と整合に堆積しており、その層

相の異なりでより鮮明にみえる。調査の結果、遺構は検出されず、また層位もE区にみられるだけであった。

石鏃（1・2）

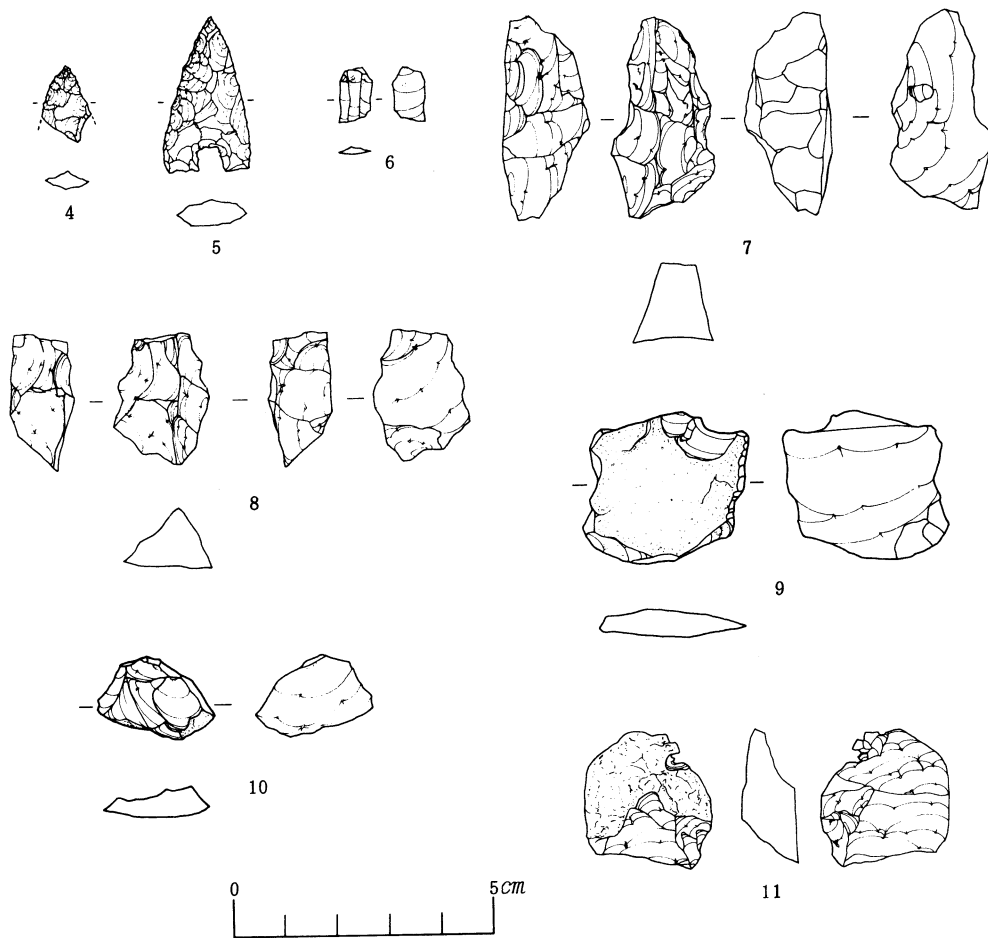
1は、均正のとれた二等辺三角形を呈し、抉りは脚部から広く、浅く形成されている。石材は黒曜石である。2も先端部は1と同様であるが脚部は欠損し不明である。黒曜石である。3はチャート製の剥片で一部に自然面を残し、使用痕の認められるものである。

表1 Ⅳ層出土石器分類一覧表

番号	器種	区	層	長さ ^{cm}	幅 ^{cm}	厚さ ^{cm}	重さ ^g	石質	備考	挿図番号
1	石鏃	E	4	1.75	1.70	0.45	1.0	黒曜石		1
2	石鏃	E	4	(1.65)	(0.96)	(0.33)	(0.5)	黒曜石		2
3	剥片	E	4上	3.17	2.45	0.95	8.0	チャート		3
4	剥片	E	4上	3.97	2.23	0.89	7.8	黒曜石		
5	剥片	E	4	3.47	2.36	1.08	7.1	黒曜石		



第 5 図 第 V 層出土遺物分布図



第6図 V層出土の石器実測図

第2節 V層出土の遺物 (第7図 図版2)

IV層青灰色火山灰層・淡青灰色火山灰層下にV層の黒褐色粘質土が存在する。腐植土を主体にした黒色土層である。下部には黄色軽石 (パミス) 層がブロック状に部分的に存在する。これはこれまで溝辺台地などで確認された桜島降下軽石層と呼ばれる桜島起源の火山灰に比定され、 10.630 ± 220 年B.P.と 11.200 ± 200 年B.P.のC¹⁴年代測定値が得られている。

遺構は検出されず、層位もE区にみられるだけである。遺物はV層上面に石鏃と剥片であり黒曜石が主体を示めている。V層下部に旧石器時代の遺物がみられるがこれはパミス層がブロック状に存在するため、V層とVI層の間に出土したものと把握した。ここからは、細石刃、断面三角形尖頭器・スクレイパー・剥片が出土した。

石鏃 (4・5)

4は、脚部が欠損しているが、気泡の少ない良質の黒曜石を使用した二等辺三角形鏃である。
5は、均正のとれた二等辺三角形で抉りは小さいが深い。石材は玄武岩である。

細石刃 (6)

黒曜石製の打瘤を持つ頭部で断面は台形を呈する。

断面三角形尖頭器 (7・8)

7は、Bタイプの尖頭器であり、剥離面と二面の調整剥離のあるものである。また先端部が弯曲し、中央部の両側縁に抉りがあり抉り入りの石器の可能性もある。石材は黒曜石で鹿児島市吉野町三船産と思われる。8はやはりBタイプの二面の調整剥離をもつもので先端部が欠損している。やはり三船産の黒曜石を石材としている。

スクレイパー (9)

気泡の少ない黒曜石を素材とした自然面を残した剥片で石縁辺部にリタッチがみられるスクレイパーである。

剥片 (10・11)

10は、打瘤をもつ横長の剥片であり打点周辺に調整剥離が加えられているが用途は不明である。薩摩郡樋脇町上牛鼻の黒曜石を石材としている。11は、三船の黒曜石で原石から剥離した自然面を残した剥片に三ヶ所打撃を加えたものである。

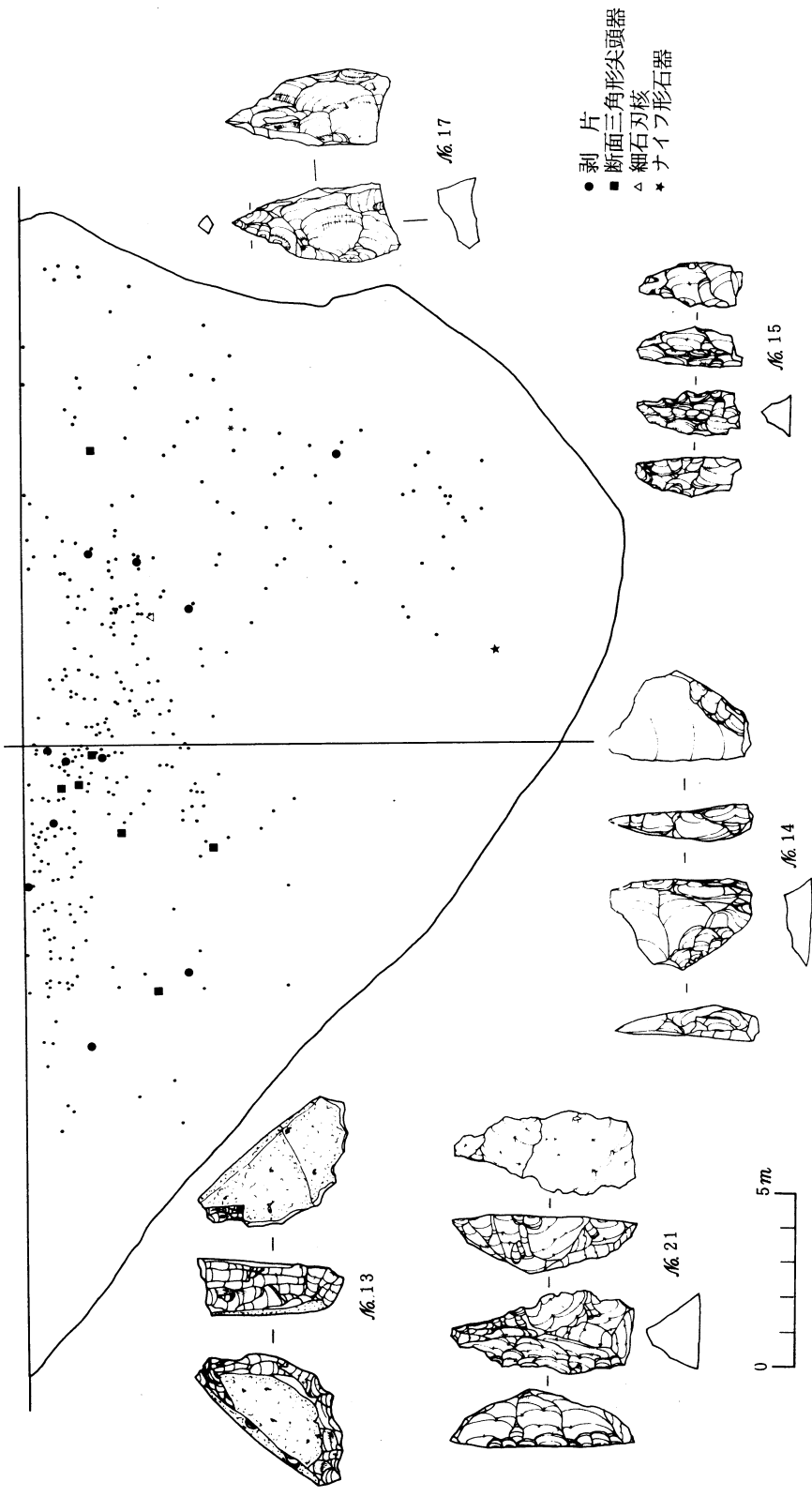
表2 V層出土石器分類表

番号	器種	区	層	長さ ^{cm}	幅 ^{cm}	厚さ ^{cm}	重さ ^g	石質	備考	挿図番号
6	石 鏃	E	5	(1.50)	(0.90)	(0.44)	(0.4)	黒曜石	先端部	4
7	石 鏃	E	5	3.04	1.66	0.53	2.2	玄武岩		5
8	細 石 刃	E	5下	0.98	0.58	0.10		黒曜石		6
9	断面三角形尖頭器	E	5下	3.74	1.93	1.45	9.1	黒曜石	B	7
10	断面三角形尖頭器	E	5下	(2.62)	1.69	(1.04)	(4.4)	黒曜石	B	8
11	スクレイパー	E	5下	2.97	2.76	0.52	4.7	黒曜石		9
12	剥 片	E	5	1.45	1.31	0.43	0.7	黒曜石		
13	剥 片	E	5	2.26	1.98	0.52	2.9	黒曜石		
14	剥 片	E	5下	2.02	1.41	0.63	1.4	黒曜石		10
15	剥 片	E	5下	2.85	2.01	0.66	4.8	黒曜石		
16	剥 片	E	5下	2.44	1.79	0.58	2.9	黒曜石		
17	剥 片	E	5下	2.33	2.35	0.97	5.9	黒曜石		11

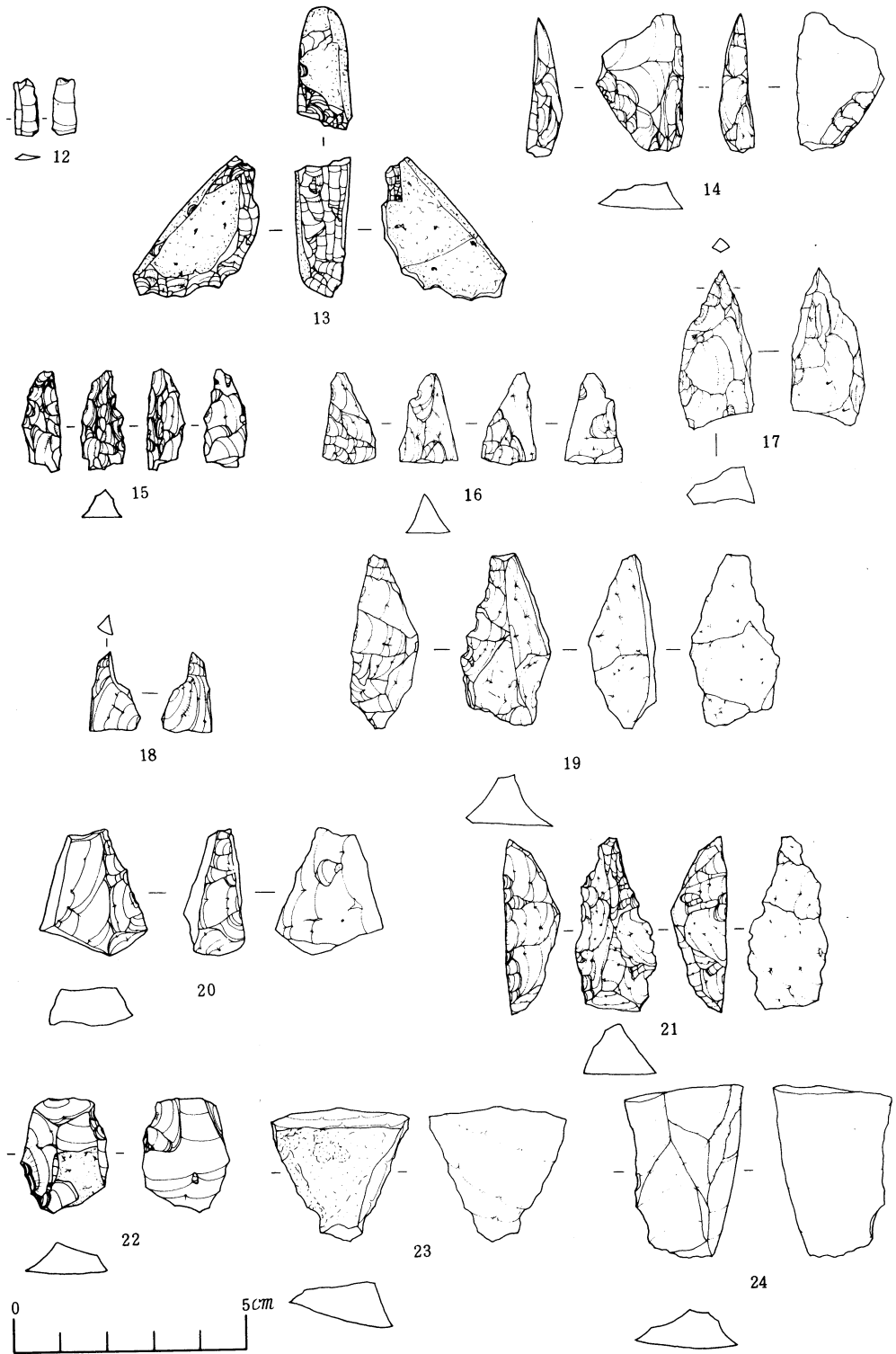
第3節 VI層出土の遺物 (第10図・図版3)

V層下部の黄色軽石層下にVI層暗茶褐色粘質火山灰層が存在する。2の層位は溝辺台地の石峰遺跡や加栗山遺跡・加治屋園遺跡の細石器文化層と対比される。

遺構は検出されず遺物も遺跡範囲全体に広がった。遺物は、細石刃・細石刃核・ナイフ形石



第 7 図 第 VI 層出土遺物分布図



第 8 図 VI層出土の石器実測図

器・断面三角形尖頭器・剝片・石核（残核）が出土した。

細石刃 (12)

黒曜石で断面三角形の頭部であり、刃部の刃こぼれが顕著にみられる。

細石刃核 (13)

気泡の少ない良質な扁平な角礫の黒曜石を用い、打面は調整しながら側面は平坦面を基調にし、下縁は片面からの調整剝離により整形されている。木場A-2遺跡では唯一のものである。

ナイフ形石器 (14)

チャートを石材として用いた切出し形のナイフ形石器である。背部と基部は調整剝離がなされ、刃部には使用痕が認められる。

断面三角形尖頭器 (15~21)

15は、Aタイプの三面に加工・調整剝離のあるものであり、先端部及び基部が欠損している。石材は気泡の少ない黒曜石を用いている。16は、やはりAタイプであるが、片面に顕著に調整剝離がみられる。三船の黒曜石で基部が欠損している。17もAタイプであるが、断面は二等辺三角形になり若干他のタイプと異なるものである。気泡な少ない黒曜石を用いている。18はBタイプの二面に加工・調整剝離のあるものであるが、欠損部が多く、打面と剝離面を考えると尖頭器の類にはいらないかも知れない。19は、断面三角形であるが、一面しか加工・調整剝離を加えないCタイプであり、先端部が欠損している。三船の黒曜石を用いている。20は、やはりCタイプであるが断面は台形を呈す。やはり三船の黒曜石で先端部・基部を欠いている。21は、均正のとれたBタイプである。先端部は鋭くなく先端から頂部にかけて剝出されている。やはり三船の黒曜石と思われる。

剝片 (22~24)

剝片は11点出土した。22は気泡の少ない良質の黒曜石を用いた縦長剝片である。23は頁岩を用いた剝片で縦長の折断剝片であり、表皮が残っている。24は硬質頁岩製の整形された折断剝片であり、縁辺部には使用痕が認められる。

表3 VI層出土石器分類表

番号	器種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
18	細石刃	E	6	1.14	0.44	0.12	0.1	黒曜石		12
19	細石刃核	E	6	3.53	1.64	0.97	7.9	黒曜石		13
20	ナイフ形石器	E	6	2.86	1.84	0.66	3.2	チャート		14
21	断面三角形尖頭器	W	6	(2.12)	(0.93)	(0.75)	(1.1)	黒曜石		15
22	断面三角形尖頭器	W	6	(1.87)	(1.20)	(1.91)	(1.6)	黒曜石		16
23	断面三角形尖頭器	W	6	3.05	1.52	0.61	2.9	黒曜石		17
24	断面三角形尖頭器	W	6	(1.65)	(1.01)	(0.27)	(0.6)	黒曜石		18
25	断面三角形尖頭器	E	6	(3.65)	1.74	1.12	(600)	黒曜石		19

番号	器種	区	層	cm 長さ	cm 幅	cm 厚さ	g 重さ	石質	備考	挿図番号
26	断面三角形尖頭器	W	6	(2.52)	(2.02)	(0.79)	(2.9)	黒曜石		20
27	断面三角形尖頭器	E	6	3.62	1.64	1.23	5.7	黒曜石		21
28	剥片	W	6	2.71	1.75	1.41	6.5	黒曜石		
29	剥片	W	6	2.67	2.00	0.81	3.5	黒曜石		
30	剥片	W	6	3.05	1.41	0.47	1.7	黒曜石		
31	剥片	W	6	2.54	0.99	0.69	2.4	黒曜石		
32	剥片	W	6	2.27	1.67	0.54	1.6	黒曜石		
33	剥片	W	6	1.81	1.29	0.45	1.0	黒曜石		
34	剥片	E	6	2.84	2.73	0.81	6.5	頁岩		23
35	剥片	E	6	2.13	1.71	0.62	2.5	黒曜石		
36	剥片	E	6	3.62	2.44	0.95	8.5	硬質頁岩		24
37	剥片	W	6	2.41	2.68	0.85	2.9	黒曜石		
38	剥片	W	6	2.46	1.76	0.65	2.5	黒曜石		22
39	石核(残核)	E	6	2.75	2.2	1.34	7.7	黒曜石		

第4節 VII層出土の遺物(第11・12図 図版4)

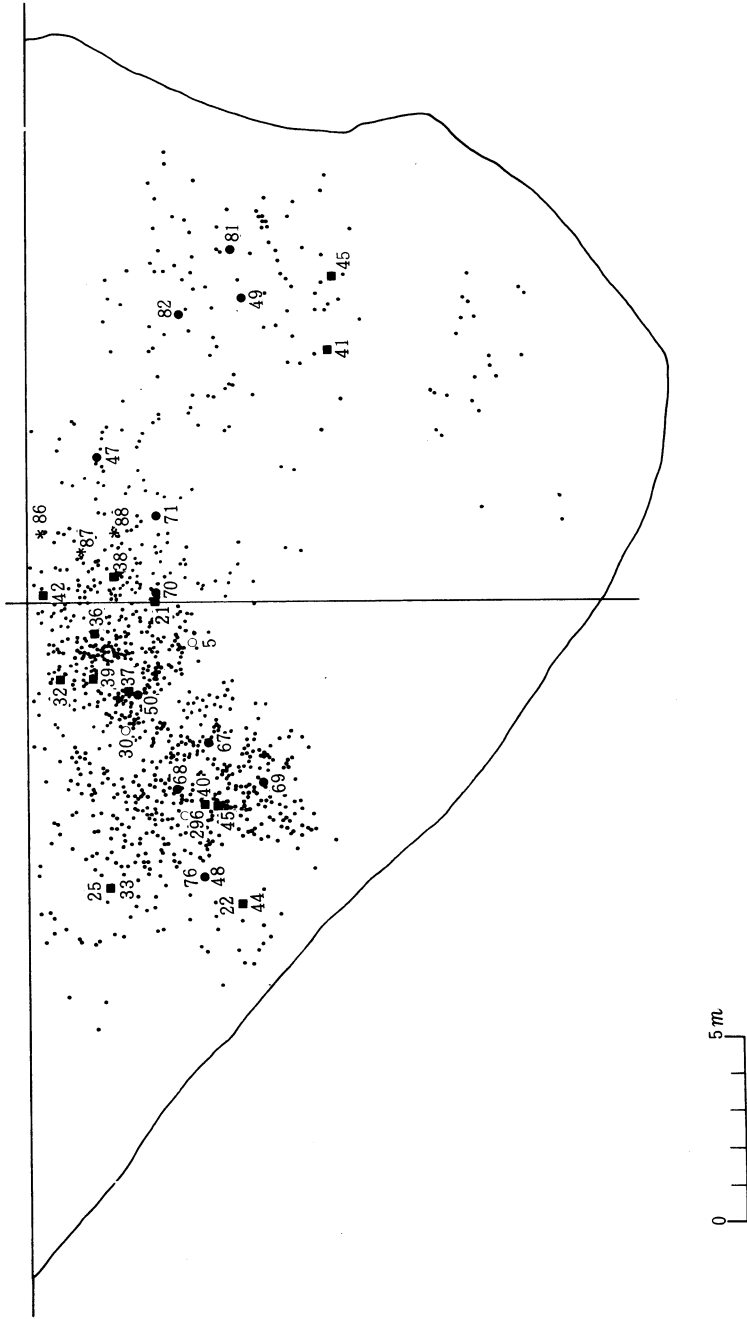
VI層暗茶褐色粘質火山灰層下にVII層暗黄褐色火山灰層が存在する。遺構は検出されず、遺物はW区の北側に集中しはじめた。これは、W区に於いては、表層のすぐ下にVII層が存在するところが多く、VI層までは削平されていた個所が多い。遺物としては、細石刃・断面三角形尖頭器・剥片・石核が出土した。

細石刃(25~30)

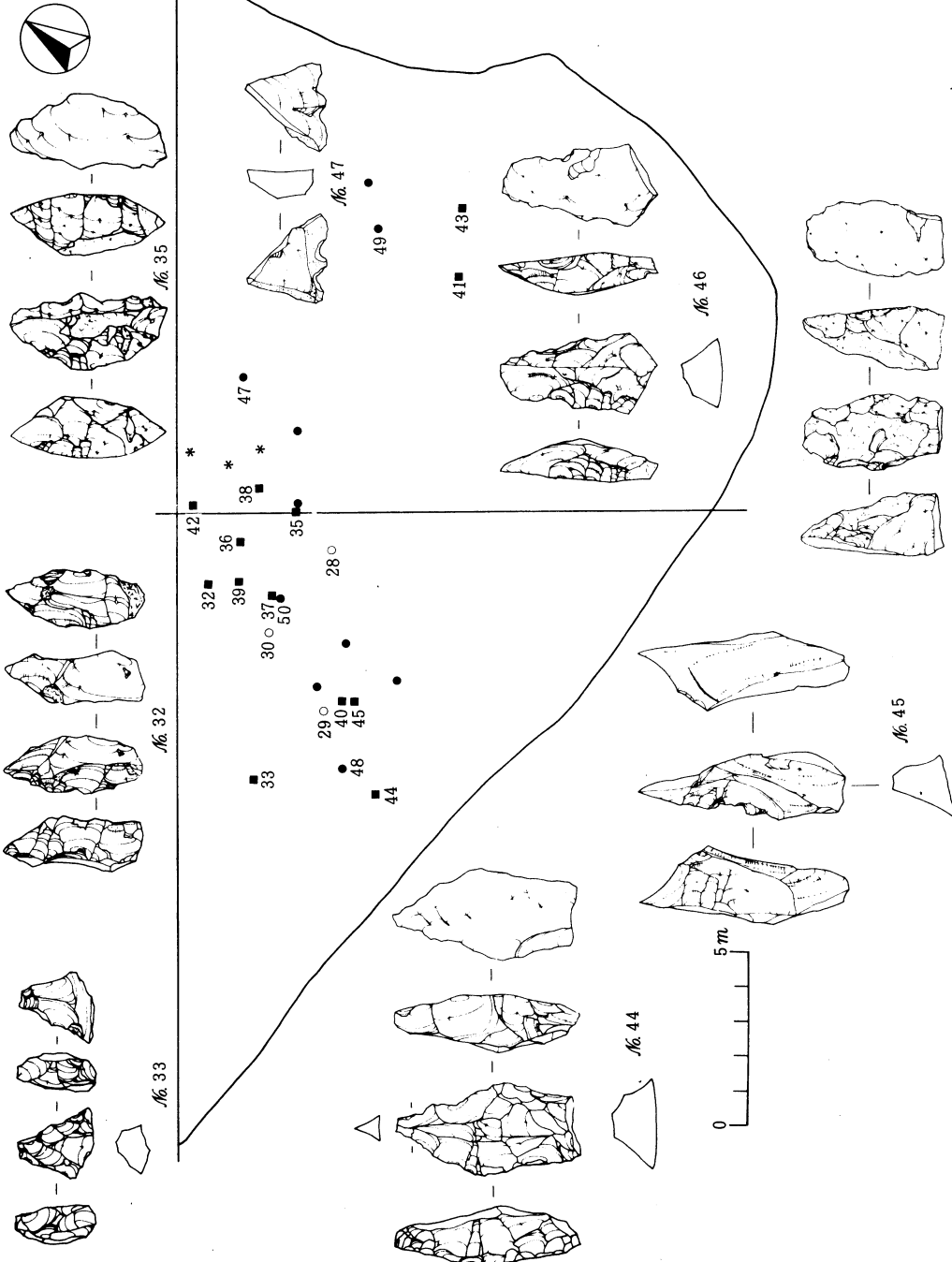
VII層に於いて細石刃の出土がみられるが、これは表層下でVI層までの層位が削平されているため確認がむずかしかった。25は、断面三角形を呈す幅広の打瘤をもつ頭部である。気泡の少ない黒曜石を用いている。26は、完形品で断面三角形を呈し、刃部の刃こぼれがみられる。27は、長さが短いがやはり完形品で断面三角形を呈する。黒曜石を用い刃部の刃こぼれは顕著にみられない。28は断面台形を呈し打瘤をもった頭部である。刃こぼれはみられない。29は、気泡の少ない良質の黒曜石を用いたやや幅広の尾部である。刃部の刃こぼれは顕著でない。断面は三角形を呈す。30は、断面三角形を呈す尾部である。

断面三角形尖頭器(31~46)

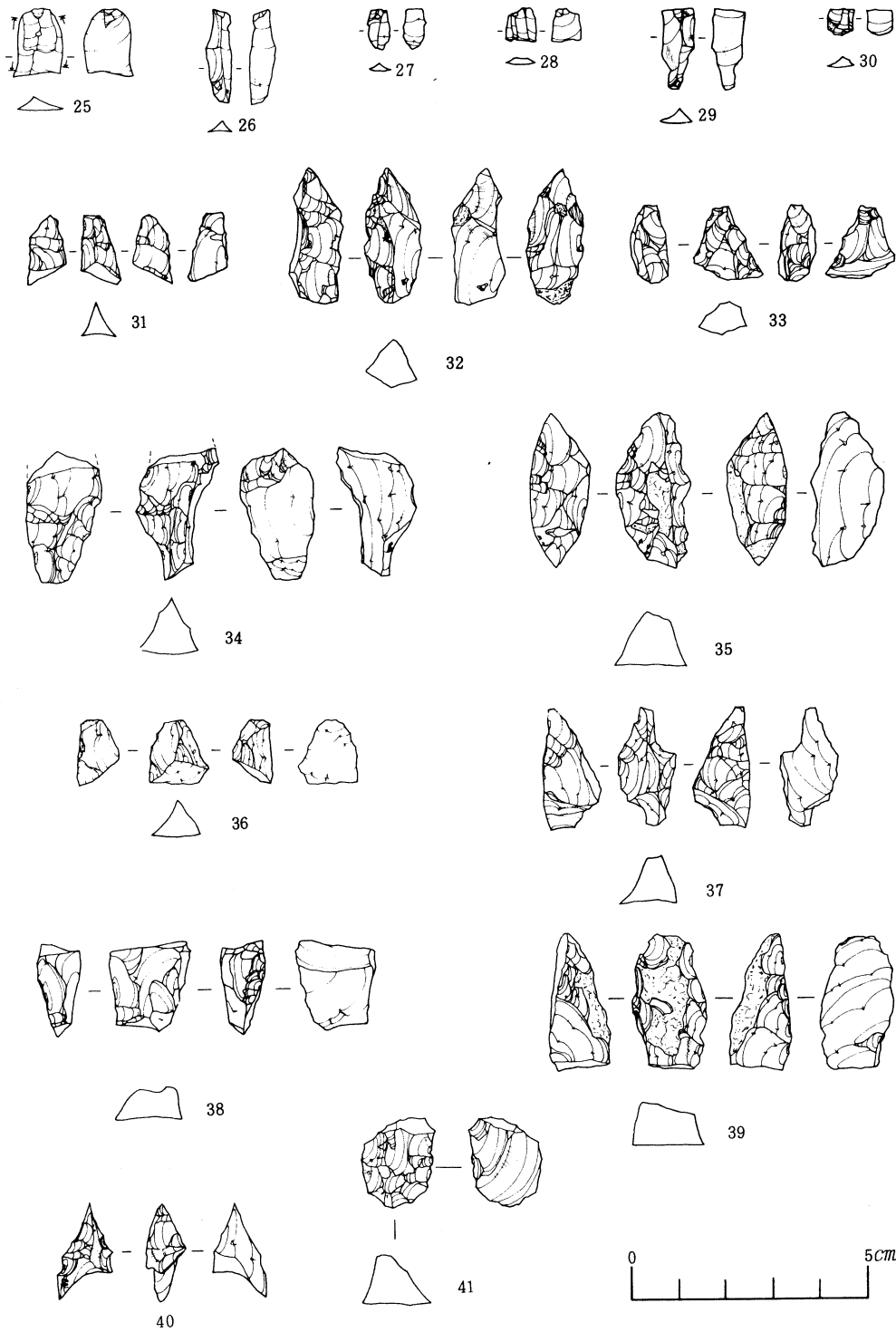
31は、Aタイプの三面に加工・調整剥離のあるもので基部は欠損している。尖頭器として分類したが先端部が鋭くなく自然面が残っている。気泡の少ない黒曜石を用いている。32もAタイプで上牛鼻の黒曜石を用いている。先端部は鋭く基部には自然面が残っている。33は、気泡の少ない黒曜石を用い、Aタイプである。先端部は欠損し、基部も欠損している。34は、Bタイプで三船の黒曜石を用いている。剥離面と二面の調整剥離のあるものであり先端部が湾曲し



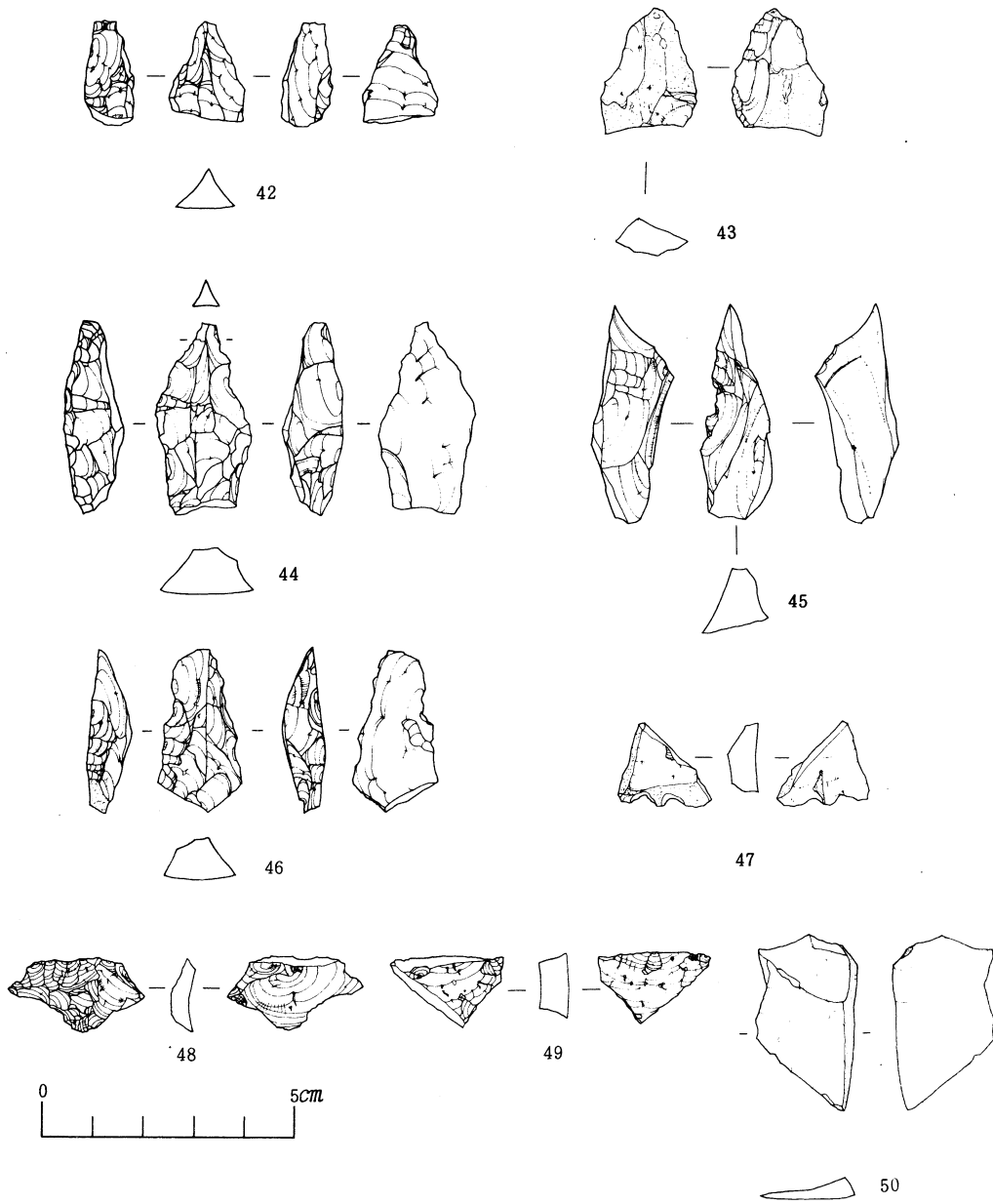
第 9 图 第 VII 層出土遺物分布图



第 10 圖 VII 層出土石器器種別分布圖



第11図 VII層出土の石器実測図(1)



第12図 VII層出土の石器実測図(2)

先端部と基部が欠損している。35は、Bタイプで三船の黒曜石を用い頂部には自然面を残している。器形は弯曲し先端部と基部の判断がつきにくい。中央部の片側縁に抉りがあり抉り入りの石器の可能性もある。36は、Bタイプで三船の黒曜石を用い先端部は欠け、基部は欠損している。37もBタイプで先端周辺の側辺部は頂部にむかって調整剥離を加え、右側辺部は不規則な剥離である。先端部は欠け、基部は欠損している。38はBタイプで三船の黒曜石を用い頂部から先端部にかけて自然面が残っている。先端部は丸味をおび縁辺部には調整剥離が顕著にみられる。基部は欠損している。39もBタイプで上牛鼻の黒曜石を用いた断面三角形尖頭器の基部である。側縁部には細かなりタッチが加えられ、基部は一面の剥離のみで調整は施こされていない。40は気泡の少ない黒曜石を用いたBタイプである。先端部から頂部にかけての稜は自然面を残している。先端部は鋭く基部は欠損している。41は、上牛鼻の黒曜石で基部のみである。基部は丸味を帯びBタイプである。縁辺部に調整剥離が加えられ均正のとれたものである。42は、三船の黒曜石を用い一面だけ加工・調整剥離のあるもとで先端部は欠け、基部は欠損している。43はやはりAタイプで自然面を多く残り一面だけ調整剥離を加えている。先端部にも自然面が残り鋭くない。基部は欠損している。44は、当遺跡出土の尖頭器の中で最も整形されたもので上牛鼻の黒曜石を用い、先端部がやや弯曲し側辺部は調整剥離が施こされている。先端部は欠け、基部には加工・調整剥離は施こされていない。Bタイプであり、二面に加工がみられ、一面が剥離面である。45はCタイプで一面に加工・調整剥離が施こされている。先端部は鋭いが全体の整形はまだ施こされていない。気泡の少ない黒曜石を用いている。46はE区の攪乱層（層位が不明）出土で上牛鼻の黒曜石を用い、基部に自然面を残したBタイプのものである。先端部は丸味をおび側辺部はよく調整されている。

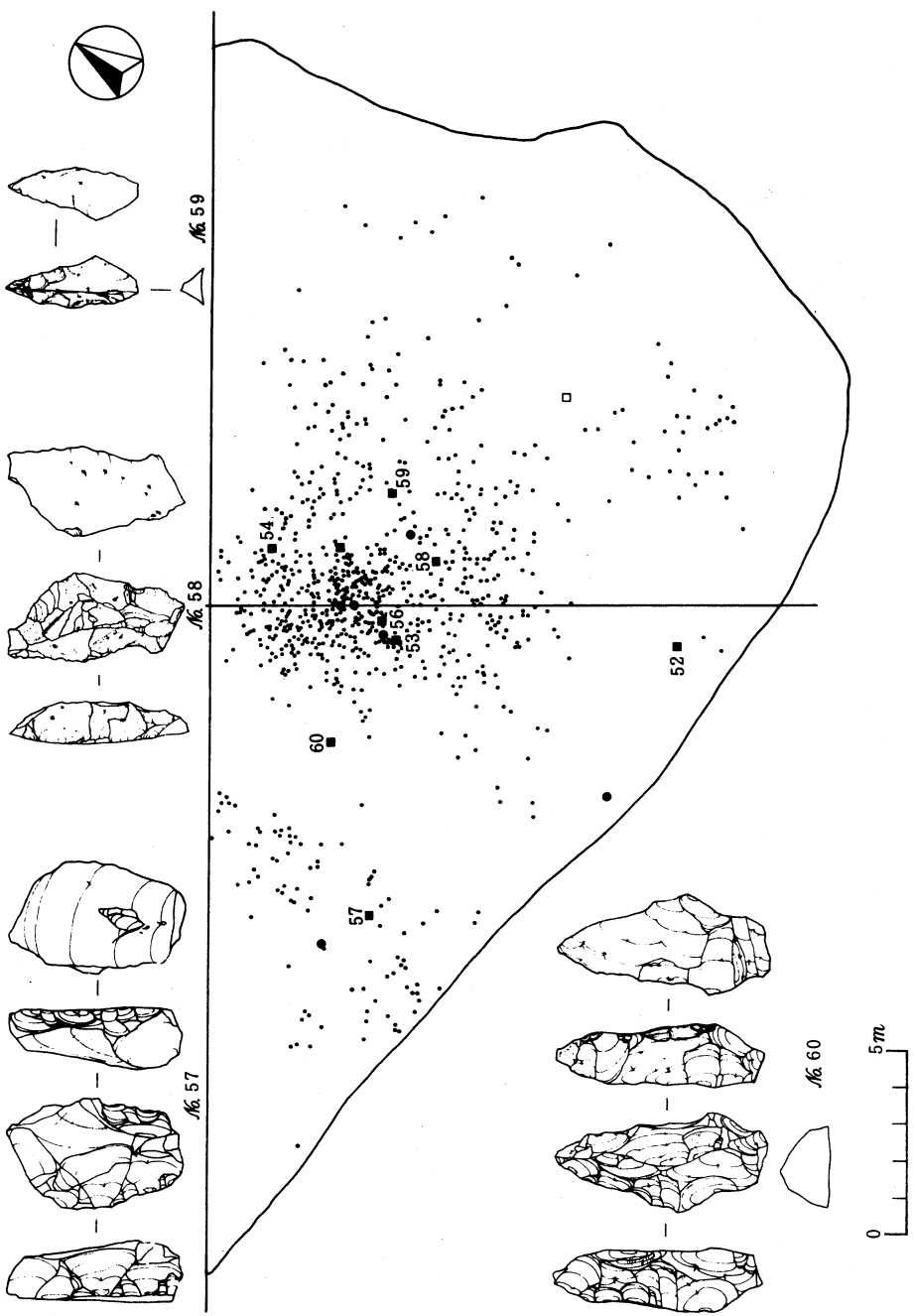
剥片 (47~50)

47は気泡の少ない黒曜石を用い一側辺部に抉りが二ヶ所はいつている。抉り入りの石器の可能性もある加工のある剥片である。48はやはり気泡の少ない黒曜石を用い加工痕の残る剥片であり、製作中欠落したものと思われる。49は、三船の黒曜石を用いた剥片である。50は、頁岩を用いた剥片であり自然面が残っている。

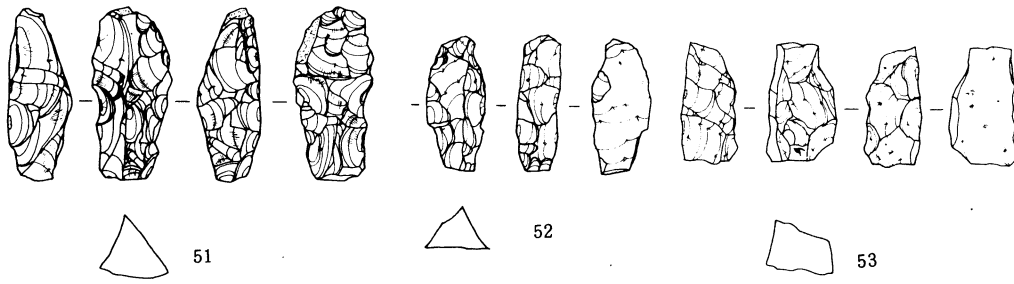
表4 VII層出土石器分類表

番号	器種	区	層	長さ ^{cm}	幅 ^{cm}	厚さ ^{cm}	重さ ^g	石質	備考	挿図番号
40	細石刃	W	7	1.33	0.97	0.24	0.3	黒曜石		25
41	細石刃	W	7	1.93	0.54	0.21	0.2	黒曜石		26
42	細石刃	W	7	0.79	0.40	0.01		黒曜石		27
43	細石刃	W	7	0.67	0.60	0.10		黒曜石		28
44	細石刃	W	7	1.68	0.61	0.21	0.2	黒曜石		29
45	細石刃	W	7	0.54	0.49	0.14		黒曜石		30
46	断面三角形尖頭器	W	7	(1.51)	(0.72)	(0.70)	(0.4)	黒曜石		31

番号	器種	区	層	長さ ^{cm}	幅 ^{cm}	厚さ ^{cm}	長さ ^g	石質	備考	挿図番号
47	断面三角形尖頭器	W	7	2.87	1.18	1.20	2.7	黒曜石		3 2
48	断面三角形尖頭器	W	7	(1.58)	(1.17)	(0.66)	(1.1)	黒曜石		3 3
49	断面三角形尖頭器	W	7	(2.78)	(1.27)	(1.24)	(4.4)	黒曜石		3 4
50	断面三角形尖頭器	W	7	3.19	1.51	1.09	4.4	黒曜石		3 5
51	断面三角形尖頭器	W	7	(1.29)	(1.00)	(0.81)	(1.0)	黒曜石		3 6
52	断面三角形尖頭器	W	7	(2.42)	(1.34)	(1.03)	(2.2)	黒曜石		3 7
53	断面三角形尖頭器	W	7	(2.74)	(1.50)	(1.13)	(4.7)	黒曜石		3 9
54	断面三角形尖頭器	W	7	(1.77)	(1.51)	(0.77)	(2.7)	黒曜石		3 8
55	断面三角形尖頭器	W	7	(1.12)	(1.23)	(0.78)	(0.7)	黒曜石		4 0
56	断面三角形尖頭器	E	7	1.91	1.43	1.13	3.0	黒曜石		4 1
57	断面三角形尖頭器	E	7	(1.73)	(1.46)	(0.76)	(2.1)	黒曜石		4 2
58	断面三角形尖頭器	E	7	2.24	1.90	0.88	3.5	黒曜石		4 3
59	断面三角形尖頭器	W	7 下	3.61	1.75	0.95	5.9	黒曜石		4 4
60	断面三角形尖頭器	W	7 下	4.29	1.55	0.80	5.2	黒曜石		4 5
92	断面三角形尖頭器	E	攪乱	3.17	1.61	0.81	3.5	黒曜石		4 6
61	剥片	E	7 上	3.26	2.75	0.70	5.4	黒曜石		
62	剥片	E	7	2.12	1.69	0.46	1.5	黒曜石		
63	剥片	E	7	2.54	1.58	0.66	2.2	黒曜石		
64	剥片	E	7	2.86	1.19	0.22	0.8	黒曜石		
65	剥片	E	7	2.61	1.78	0.61	3.0	黒曜石		
66	剥片	E	7	2.01	1.37	0.50	1.2	黒曜石		4 7
67	剥片	W	7	2.66	1.43	0.41	1.1	黒曜石		4 8
68	剥片	E	7	2.18	1.40	0.75	1.7	黒曜石		4 9
69	剥片	E	7	2.44	2.07	0.92	5.0	頁岩		
70	剥片	E	7	2.90	1.74	0.74	3.7	黒曜石		
71	剥片	W	7	3.18	1.88	1.86	3.7	頁岩		5 0
72	石核	E	7	3.55	2.78	1.86	13.2	黒曜石		
73	石核	E	7	2.13	2.09	1.72	7.2	黒曜石		
74	石核	E	7	3.44	2.63	2.12	15.0	黒曜石		



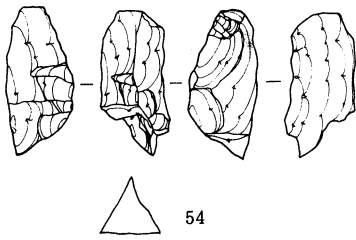
第 13 図 第四層出土土遺物分布図



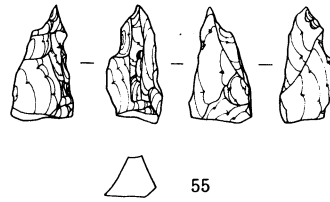
51

52

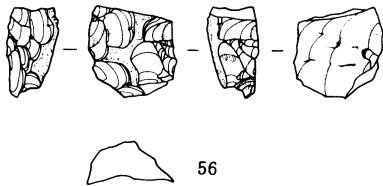
53



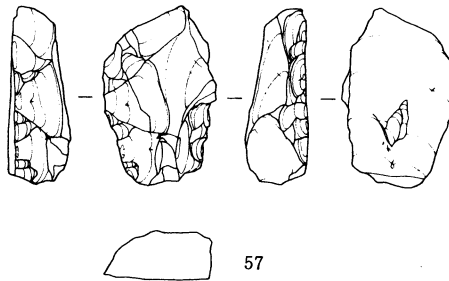
54



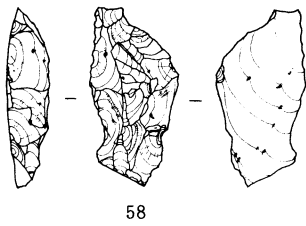
55



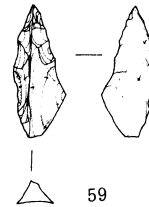
56



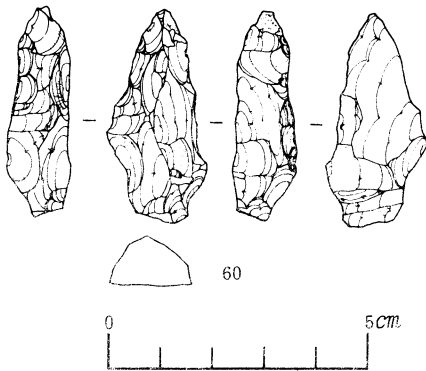
57



58

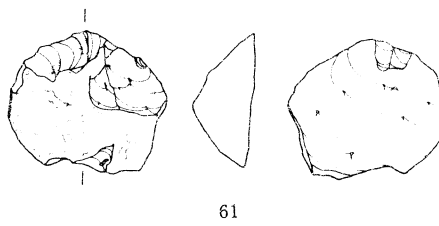


59



60

0 5cm



61

第14図 VIII層出土の石器実測図

第5節 Ⅷ層出土の遺物（第14図 図版5）

Ⅶ層暗黄褐色火山灰層下にⅧ層茶褐色火山灰層が存在した。遺構の検出はなく遺物も上面にみられたのみであった。遺物は、断面三角形尖頭器、スクレイパー・剥片が出土した。

断面三角形尖頭器（51～60）

51は、気泡の少ない黒曜石を用いたAタイプの三面加工・調整剥離を加えたもので先端部は丸味をおび自然面を一部残している。側辺は調整を施こすが基部にはみられない。52は、三船の黒曜石でBタイプの二面加工であり先端部は欠落している。調整剥離は側辺部には施されているが、基部にはみられない。53は三船の黒曜石を用い、横長の厚い剥片を二面加工し、断面はやや丸味のある小形の尖頭器である。先端部は欠損している。54も三船の黒曜石でBタイプで先端は欠損している。55はBタイプで先端部が鋭く基部は欠損している。56は、基部のみであるが自然面を残し基部は丸味をおびている。57は上牛鼻の黒曜石を用い先端部が欠損している。58は気泡の少ない黒曜石で弯曲し先端部は鋭くない。挟りがみられる。59は気泡の少ない黒曜石であるが、薄手の剥片の先端部付近だけ調整剥片を施し先端部を鋭利にしたものである。60は、三船の黒曜石を用い、よく整形されたものであるが先端部に自然面を残している。

剥片（61）

原石から打ち欠いた剥片で縁辺部に加工を施す。三船の黒曜石を用いている。

第5表 Ⅷ層出土石器分類表

番号	器種	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
75	断面三角形尖頭器	E	8	(3.21)	1.49	1.16	(4.5)	黒曜石	A	5 1
76	断面三角形尖頭器	W	8	3.89	1.71	1.11	6.4	黒曜石	A	6 0
77	断面三角形尖頭器	W	8	(2.49)	1.08	0.73	(2.1)	黒曜石	B	5 2
78	断面三角形尖頭器	W	8	(2.14)	(1.16)	(0.85)	(3.4)	黒曜石	B	5 3
79	断面三角形尖頭器	E	8	(2.81)	(1.22)	(1.11)	(3.2)	黒曜石	B	5 4
80	断面三角形尖頭器	E	8	(一部欠) (2.05)	(1.17)	(0.96)	(1.9)	黒曜石	B	5 5
81	断面三角形尖頭器	W	8	(1.55)	(1.48)	(0.81)	(2.7)	黒曜石	B	5 6
82	断面三角形尖頭器	W	8	2.95	2.00	0.89	8.0	黒曜石	B	5 7
83	断面三角形尖頭器	E	8	3.44	1.72	0.77	3.5	黒曜石	B	5 8
84	断面三角形尖頭器	E	8	(2.58)	(0.89)	(0.51)	(0.6)	黒曜石		5 9
85	スクレイパー	E	8	2.25	1.87	0.62	2.7	黒曜石		
86	剥片	W	8	2.75	2.37	0.94	6.7	黒曜石		6 1
87	剥片	E	8	2.70	1.53	0.59	2.5	黒曜石		
88	剥片	W	8	3.16	2.73	0.79	7.7	黒曜石		
89	剥片	E	8	3.89	1.96	0.66	3.9	黒曜石		
90	剥片	E	8	2.89	1.46	0.61	2.4	黒曜石		
91	剥片	E	8	3.76	2.06	1.07	7.9	黒曜石		

第4章 まとめにかえて

発掘調査の結果、木場A-2遺跡は旧石器時代の断面三角形尖頭器を中心とした遺跡であることが判明した。

当遺跡は傾斜地の立地の上に畑の開墾等により上部の層位は削平されていた。VI. VII. VIII層に旧石器時代の多くの遺物が出土したが、明確な層位の分離は出来ず、また、遺物にも差異は認められなかった。

断面三角形尖頭器はA. B. C三つのタイプに分類できた。

(Aタイプ)

三面に加工，調整剥離のあるもの

(Bタイプ)

一面が剥離面で二面に調整剥離のあるもの

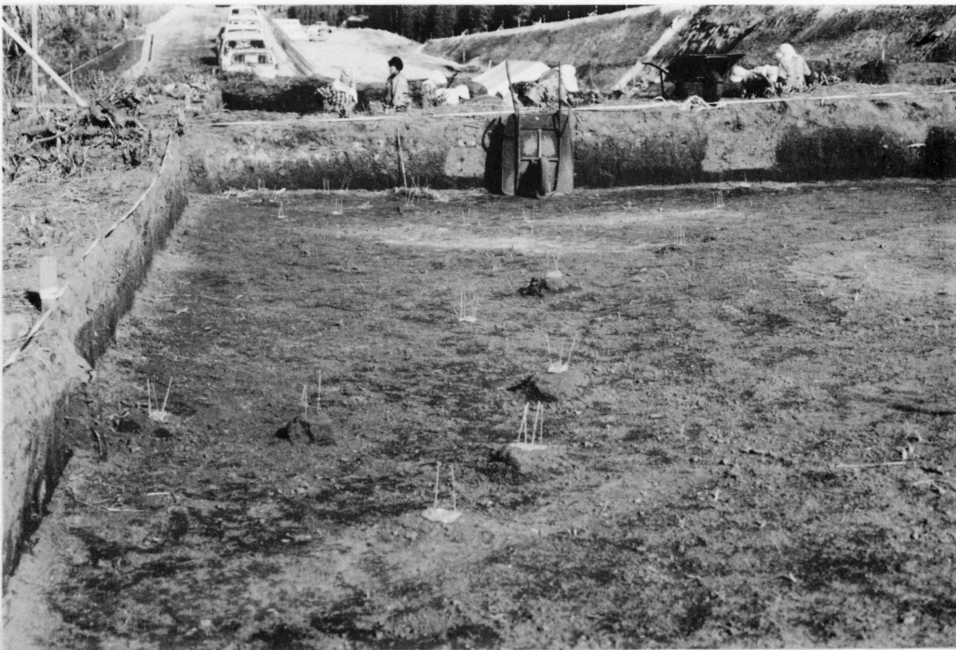
(Cタイプ)

上面の片面に剥離のあるもの。ナイフ形石器，スクレイパーに近いけど先端部が尖がる特徴をもっていることから尖頭器として分類した。

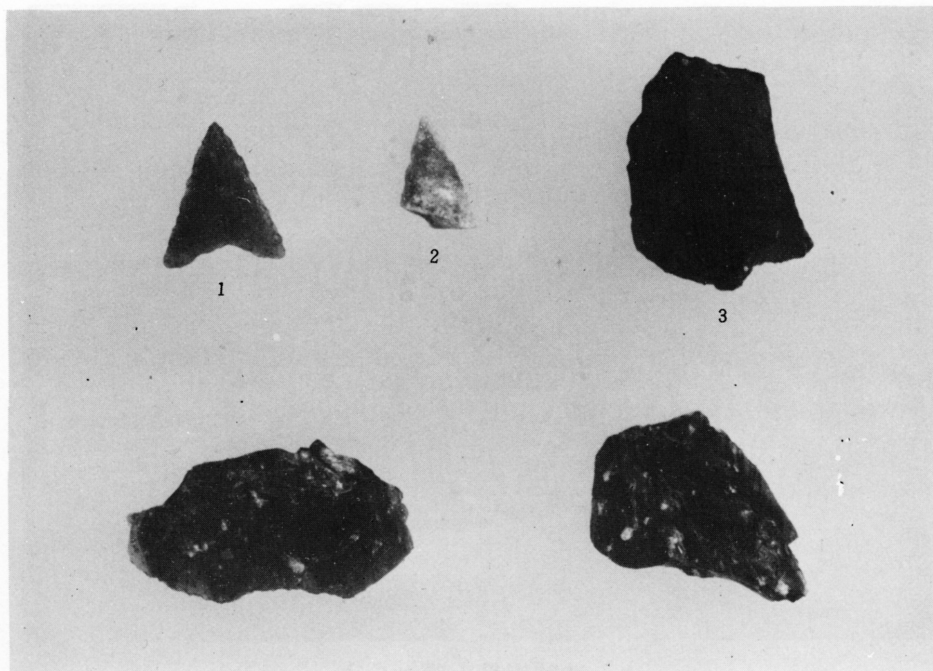
当遺跡は傾斜地に立地するのと、遺跡範囲が狭いこともあって、遺構とか遺物の集中個所が分離することは出来なかったが、これも一つのユニットとしてとらえ、層位の上下関係の把握等に何ら関係するものと思われる。



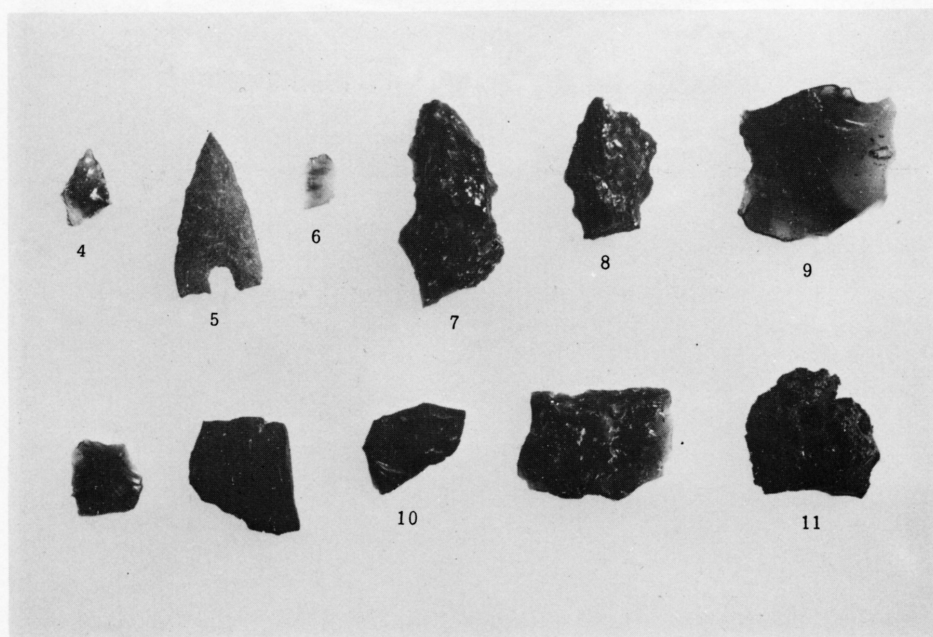
1. 遺跡近景（南から）



2. 発掘風景

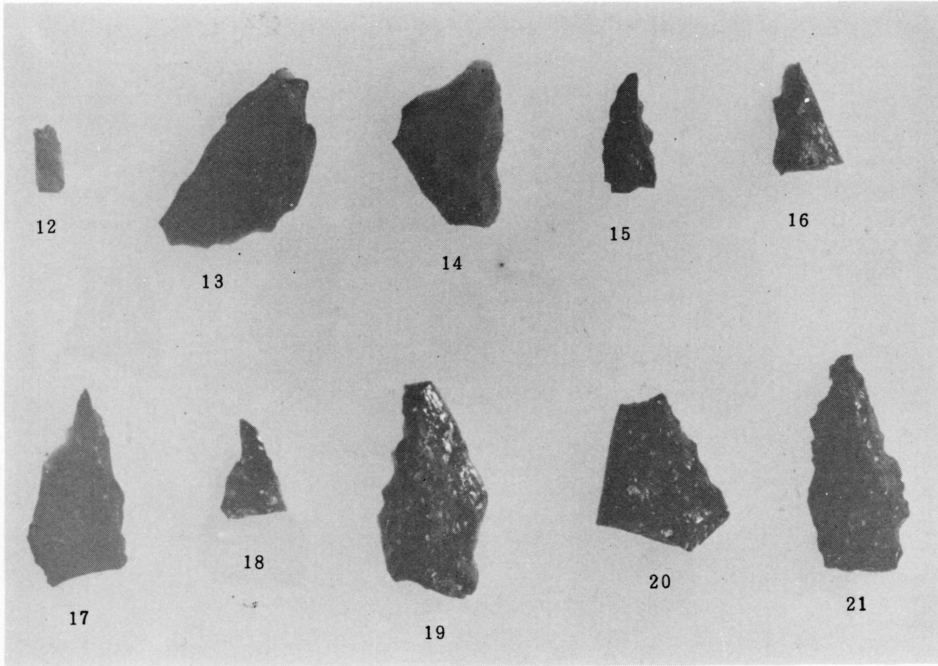


1. IV層出土の石器

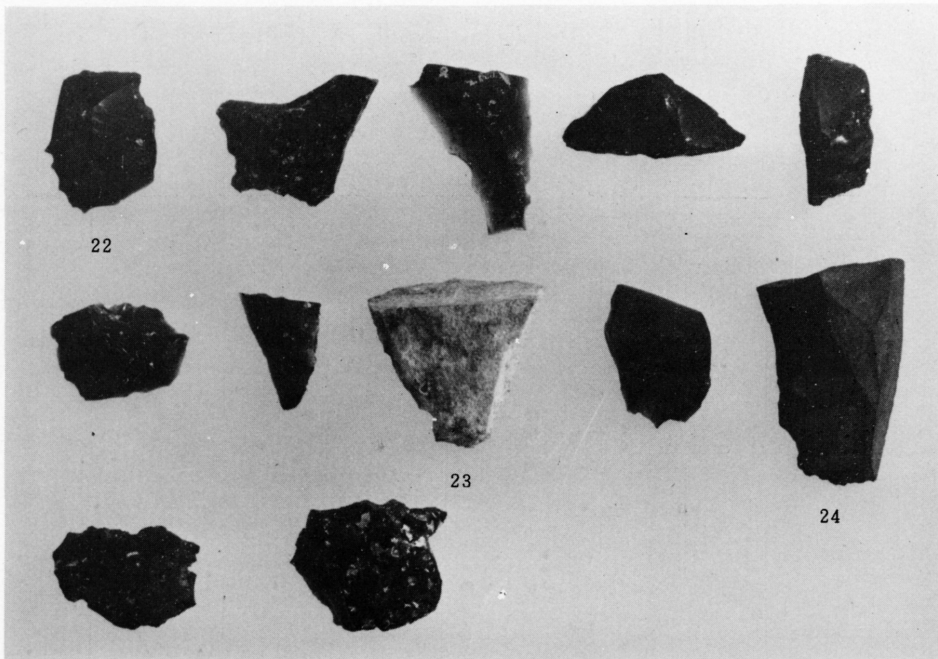


2. V層出土の石器

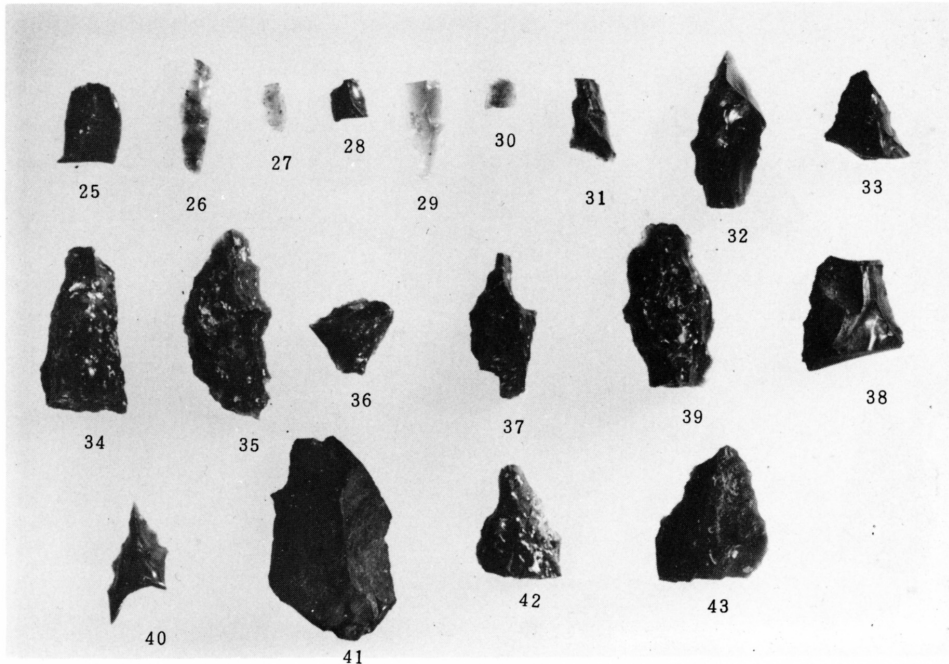
一五十一



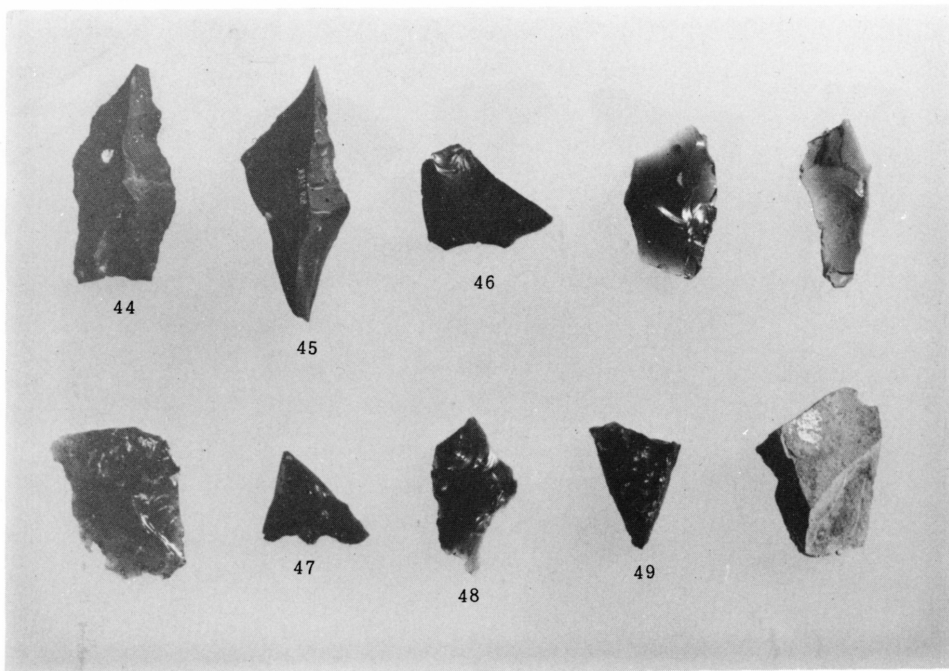
1. VI層出土の石器



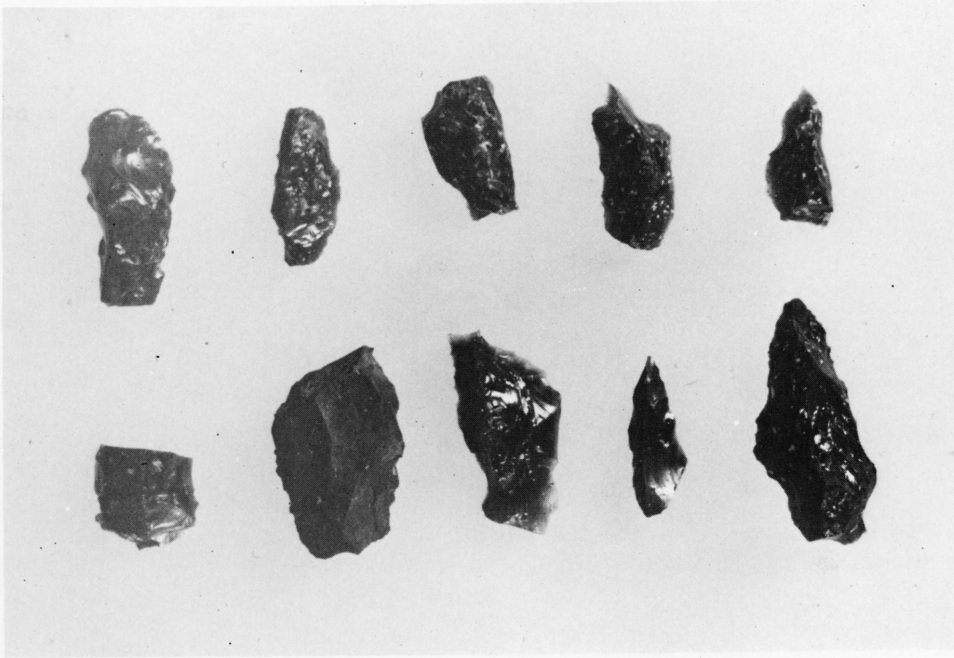
2. VI層出土の石器



1. VII層出土の石器



2. VII層出土の石器



1. VIII層出土の石器



2. VIII層出土の石器

木場 B 遺跡

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴って、昭和54年に発掘した木場B遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 報告書作製に当って、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、九州歴史資料館亀井明徳氏の指導を得た。
4. 調査に至るまでの経過の説明は木場A遺跡と重複するため省いた。また地形、環境については木場A遺跡のところで合わせて記述した。
5. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
6. 整理、復元作業は、収蔵庫の整理作業員が行ない、出土品は文化課収蔵庫に保管している。
7. 執筆、編集は出口浩がおこなった。

目 次

例 言	
第1章 調査の組織と経過及び概要	3
第1節 調査の組織	3
第2節 調査の経過 (日誌抄)	3
第3節 調査の概要	5
第2章 層 位	6
第3章 遺構と出土遺物	9
第1節 縄文時代	9
第2節 弥生時代	9
第3節 古墳時代	9
第4節 古代～中世	11
第4章 まとめ	13

挿 図 目 次

第1図 木場B遺跡グリッド図	7
第2図 土層断面図	8
第3図 石 器	9
第4図 土器散布ドット図	10
第5図 溝状遺構平面図	11
第6図 土器(1)	12
第7図 土器(2)	13

図 版 目 次

図版1 上下 木場B遺跡, 土層断面	15
図版2 土器出土状況 溝状遺構	16
図版3 滑石製加工品 石鏃 石皿 発掘風景	17
図版4 上, 縄文土器 中, ヘラ描き文土器 下, 底部 (左端縄文土器)	18
図版5 成川式土器口縁部 土師式土器口縁部	19
図版6 土師, 坏の底部 須恵器	20
図版7 青磁・青磁 (底部)	21

第1章 調査の組織と経過及び概要

第1節 調査の組織

調査責任者	文化課長	山下典夫
	文化課長	猿渡侯昭
	課長補佐	新時弘
	課長補佐	本田武郎
調査企画	専門員	本藏久三
	主任文化財研究員	諏訪昭千代
調査担当者	文化財研究員	出口浩
	主事	新東晃一
	主事	弥栄久志
	文化財調査員	中島哲郎
事務担当	文化財調査員	井ノ上秀文
	管理係長	中条享
	主幹兼係長	川畑栄造
	主査	安藤幸次
	主事	天辰京子
	主事	山下玲子

第2節 調査の経過（日誌抄）

発掘調査は、昭和54年8月28日から11月27日まで行った。この間の経過を、発掘調査日誌を整理して記載することにする。

8月28日(火)

木場B遺跡の調査開始。調査上の注意と説明を作業員に行う。草木伐採と焼却。テントとプレハブの設置。

8月31日(金)～9月3日(月)

D・E-7～12区Ⅲ層（アカホヤ）の掘り下げ。D・E-13区Ⅰ層の掘り下げ。

9月4日(火)～9月7日(金)

D・E-5・6・9・10区Ⅴ層の掘り下げ。

9月8日(土)～9月10日(月)

D・E-5・6区Ⅷ層からⅨ層にかけて掘り下げ。

9月11日(火)～9月17日(月)

D・E-5・6区掘り下げ。一部は入戸火砕礫まで下げる。

9月18日(火)～9月21日(金)

D・E-5・6区、Ⅱ層からⅢ層の掘り下げ。D・E-7区、V・Ⅵ層の掘り下げ。D・E-8区、V層の掘り下げ。

9月22日(土)～9月26日(水)

D・E-7区 Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。D・E-8区 Ⅵ～Ⅶ層の掘り下げ。D・E-11・12区Ⅱ層の掘り下げ。

9月27日(木)～9月29日(土)

D-11・12区Ⅲ～Ⅳ層の掘り下げ。D・E-13区Ⅰ層～Ⅱ層の掘り下げ。D-7・8区、Ⅱ層の掘り下げ。

10月1日(月)～10月6日(土)

D-7・8区 Ⅶ～Ⅷ層にかけ掘り下げ。D-11・12区はⅣ層の掘り下げ。D-14区 Ⅱ層の掘り下げ。D-15区 Ⅲ～Ⅳ層にかけて掘り下げ。D・E-3・5区 断面実測。

10月8日(月)～10月11日(木)

C-7・8区 表層掘り下げ。E-15・16区 Ⅳa層の掘り下げ。D-7・8区 Ⅲ層の掘り下げ。E-7・8区 Ⅲ層の掘り下げ。

10月12日(金)～10月13日(土)

C-7・8区 Ⅰ層～Ⅱ層の掘り下げ。D-9・10区 Ⅰ層の掘り下げ。E-9・10区 Ⅰ層掘り。

10月15日(月)～10月16日(火)

D・E-9・10区 Ⅰ層の掘り下げ。D-17区 Ⅰ・Ⅱ層の掘り下げ。D-15・16区 Ⅱ～Ⅲ層の掘り下げ。D・E-7区 遺物取り上げ。E-14区 Ⅰ層～Ⅲ層の掘り下げ。E-16区 Ⅰ～Ⅲ層の掘り下げ。

10月17日(水)～10月19日(金)

D-15～17区トレンチⅢ層上面まで掘り下げ。Ⅱ層の遺物検出。D-9～12区トレンチ拡張Ⅱ層遺物検出。C・D・E-7・8区、Ⅱ層出土遺物の平板実測。

10月22日(月)～10月24日(水)

D・E-7・8区 Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。溝状遺構の検出作業。D-9・10区トレンチ壁面の清掃実測。D-11・12区 Ⅰb・Ⅲa層 遺物出土状況実測。D・E-9区Ⅰb～Ⅲa層、遺物出土状況実測。

10月25日(木)～10月26日(金)

D-11・12区 Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。溝状遺構検出作業。C・D・E-8区 E-9区 Ⅱ層検出作業。D・E-7区 Ⅲa層 掘り下げ作業。D・E-8・9区 遺構およびコンタ実測。

10月29日(月)～10月31日(水)

D・E-8区 南北トレンチⅣ層掘り下げ。D-11・12区 Ⅱ層掘り下げ了。Ⅲa層面遺物散布状況平板実測。D・E-9区 東西トレンチ Ⅲa・Ⅲb層掘り下げ。

11月1日(木)～11月2日(金)

D-10区 Ⅲ層掘り下げ。C-9・10区Ⅰ層剥ぎ。D・E-9区トレンチ調査後・縄文後晩期の遺物が散在するため拡張する。

11月5日(月)～11月7日(水)

C-9・10区 Ⅰ～Ⅱ層掘り下げ終了。D・E-11区トレンチ Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。D・E-12区トレンチⅢ層掘り下げ。D・E-13区トレンチⅠ層掘り下げ。

11月8日(木)～11月9日(金)

D・E-12～14区Ⅰ層剥ぎ続行。D-9・10区トレンチ深掘り。

11月12日(月)～11月14日(水)

D-9・10区トレンチ深掘り終了。D-13～14区トレンチ深掘り開始。D・E-13区トレンチ深掘り続行。D・E-14区トレンチ深掘り。D・E-15・16区 Ⅱ・Ⅲa層の遺物散布状況実測。

11月15日(木)～11月17日(土)

D-14区，C-15～17区 Ⅱ下～Ⅲa層の遺物検出。D-17区 Ⅲa層の遺物散布状況実測。

11月19日(月)～11月21日(水)

C-13・14区 トレンチ壁面の清掃。C-15区 トレンチⅢ下～Ⅳ層掘り下げ。D-15～17区トレンチ掘り下げ。

11月22日(木)～11月23日(金)

D-18・19 トレンチⅢ下～Ⅳ層深掘り。C-15区トレンチ深掘り。D-15～17区トレンチ深掘り。

11月26日(月)

D-18・19区トレンチ深掘り。C-15区トレンチ断面実測。D-15～17区トレンチ断面実測。

11月27日(火)

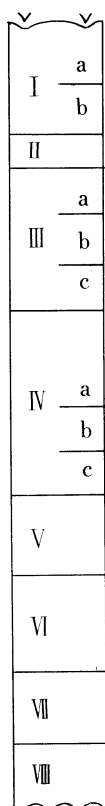
D-18・19区トレンチ断面実測。木場B遺跡の調査終了。

第3節 調査の概要

木場B遺跡は、標高252mのほぼ水平な台地上にある。土地は桑畑等に利用され、地面は良く整えられている。調査は、STA169と170を結ぶ直線と基準にして10m間隔のグリッドを設定した。南西から東北にかけて1・2・3…20、北西から南東へA・B・C…Fと呼称した。調査区域は長さ200m幅約40mを測る。長年の耕作のため表層中には土師器などの細片が含まれており、ほとんど攪乱されている。

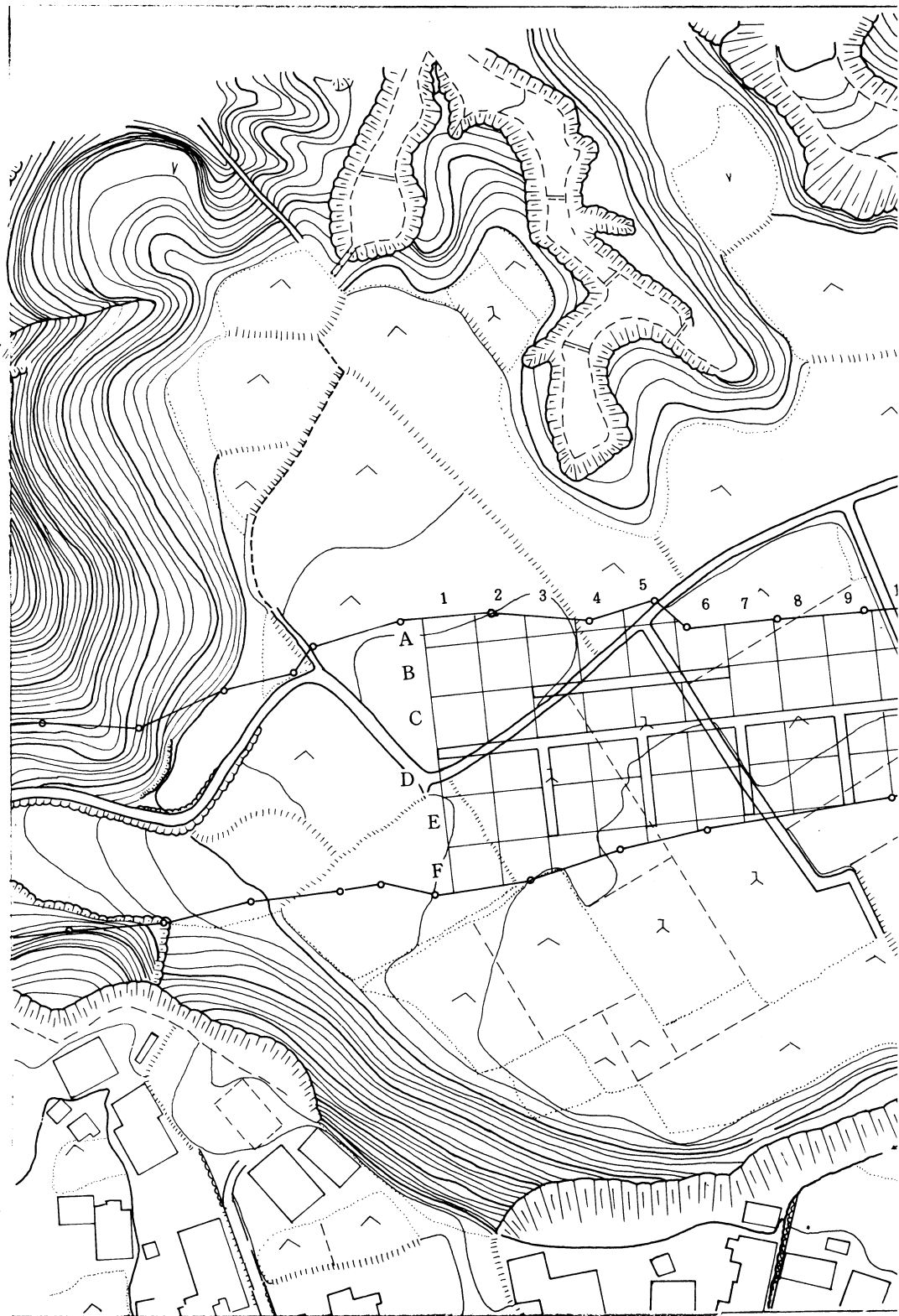
調査は、ほぼ道路中央線に沿って、すなわちグリッドD線に2m巾のトレンチを1本、また北西-東南方向は20m間隔に2m幅のトレンチとD・E区に設定した。C-3～6区には、C線に沿って2m幅のトレンチを増設した。この結果1～6区には遺跡の存在が認められなかったため放棄した。7～17区にかけては、遺物の出土や、溝状遺構の検出がみられたので、全面調査をすることとなった。

第2章 層 位



層は全体に略水平に堆積し同じ層序を示しているので、D線-11区の断面を中心に説明したい。I層は表層で耕作土である。30~50cmの深さを示し、現在の耕作（I a）と古い耕作（I b）に分けることができる。I a層は褐色を呈し、白色のパミスの粒子を含んでいる。I b層はやや黒っぽい色調で整石を含んでいない。II層は約10cm前後の厚さで薄くみられる。耕作による削平を受け、残存部分は少ない。軟質黒色土で土師器を包含している。III層は赤褐色で軟質のIII a層と、黄褐色で硬質のIII b層、そして軽石（パミス）のIII c層に細分される。III a層は20~30cmの厚さで拡がり、上部はII層からの染み込みがみられ、成川式土器を出土する。III b層とIII c層は、上下に層をなしている部分もあるが、III b層内下部にブロック状に入り込んでいる。III a層中に縄文時代後晩期の土器が少量出土した。IV層は60~90cmの黒色粘質土である。下部附近に小指先大の桜島パミスと想定される軽石がバラバラと拡がっており、この層をIV b層とし、上下をIV a層、IV c層とした。IV c層は10~20cmの厚さである。V層は褐色粘質層、VI層は黒褐色粘質層、VII層は黄褐色シラス層と続いている。本遺跡では、IV層以下に遺物は発見されなかった。

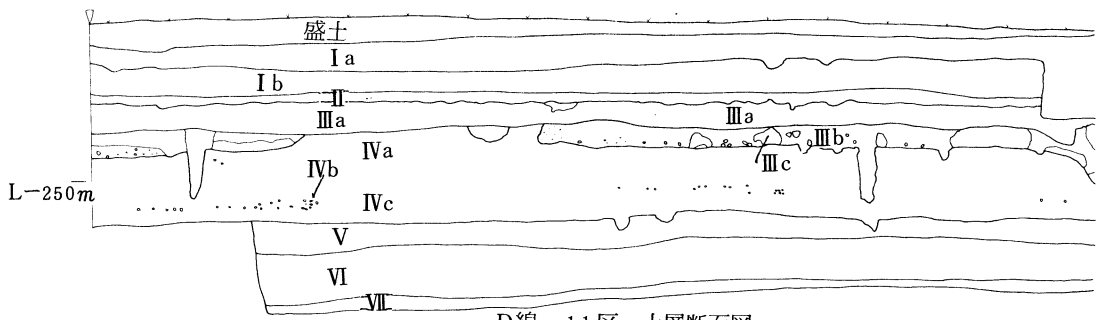
D-17区、C-10区に土層の横転現象がみられた。D-17区のは、III b~VI層までが影響を受け、VI層が斜めに迫り上ってIII b層まで達している。C-10区のは、横転の範囲が直径5 m以上にも広がり、その影響はIII b層からシラス層まで及んでいる。両方共にIII aが上部に堆積しており、III a層堆積以前の変動を示している。断面はいずれも半円形をなし、水平層が斜めに移動している。



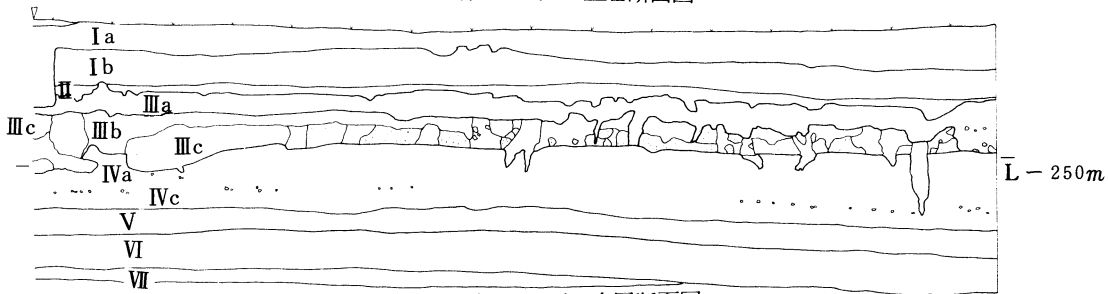
第1図 木場B遺跡 地形お



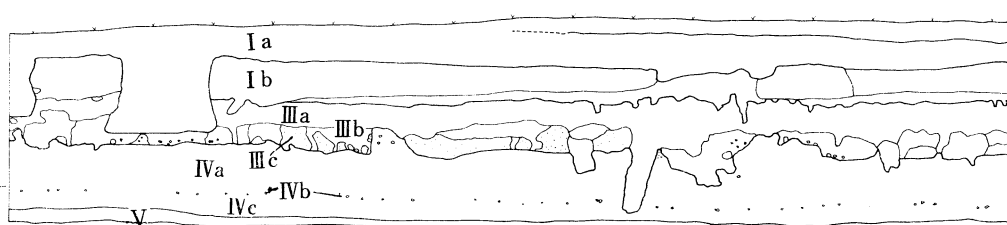
よびグリッド図



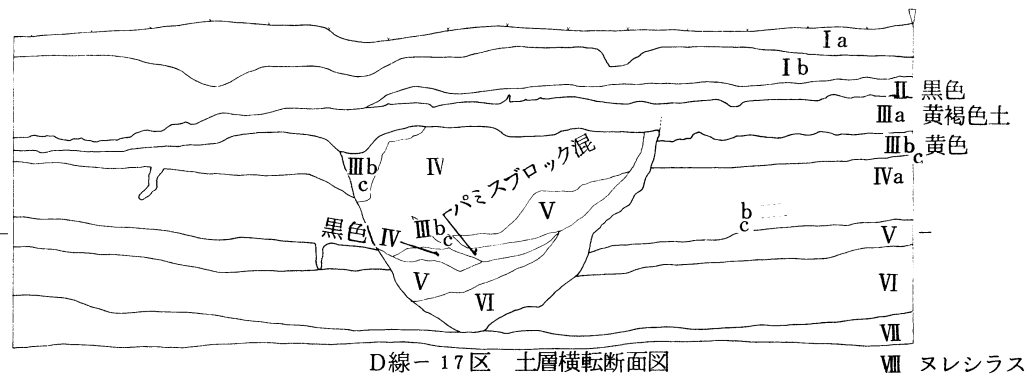
D線-11区 土層断面図



D線-12区 土層断面図

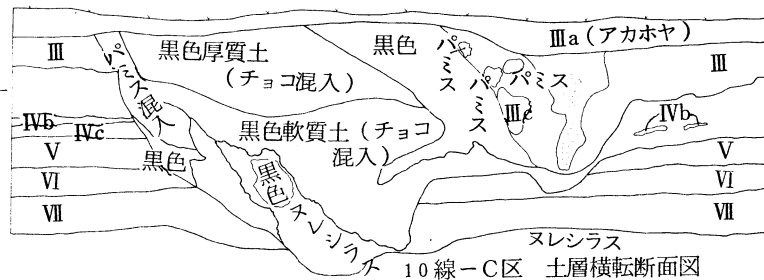


11線-D区 土層断面図



D線-17区 土層横転断面図

VII ヌレシラス



10線-C区 土層横転断面図

第2図 土層断面図

第3章 遺構と出土遺物

第1節 縄文時代

① 遺構

縄文土器の出土は少量みられたが、遺構は検出されなかった。

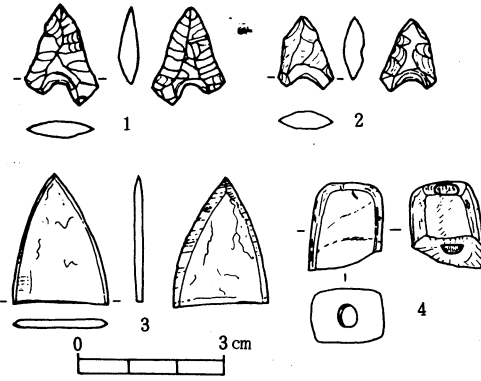
② 遺物

ア. 土器 (第6図 1~5)

縄文土器は、少量の散布がみられた。ほとんどⅢ a層の出土である。1は三角形断面の口縁部をなし、口唇部と下端を貝殻縁状のもので斜目に刻目をつけ、間に凹線を配するものである。2は沈線間に刺突文を施す。胎土は粗である。3は外面にX状の篋描き文を有す。内面は荒い貝殻条痕による調整を施す。4は肩部が「>」形に張り、口縁部にかけて大きく外反する黑色研磨の精製土器である。5は安定した平底で胎土は粗である。

イ. 石器 (第3図 1・2)

石鏃2点を含めて石片や剥片など10点を発見した。1は長径21mm, 短径14mm, 厚さ3.5mm重さ0.68gを測る。凹基式で尖端は鋭く、側縁は内側に浅く折れる。押圧剥離はていねいである。石材はチャートである。E-13区Ⅲ a層出土。2は長径15mm, 短径11mm, 厚さ3.6mm, 重さ0.6gと測る。抉りが浅く、押圧剥離は荒い。石材は玉髄である。D-8区Ⅱ層出土。



第3図 石器

第2節 弥生時代

① 遺構

弥生時代の遺構は、発見されなかった。

② 遺物 (第3図 3)

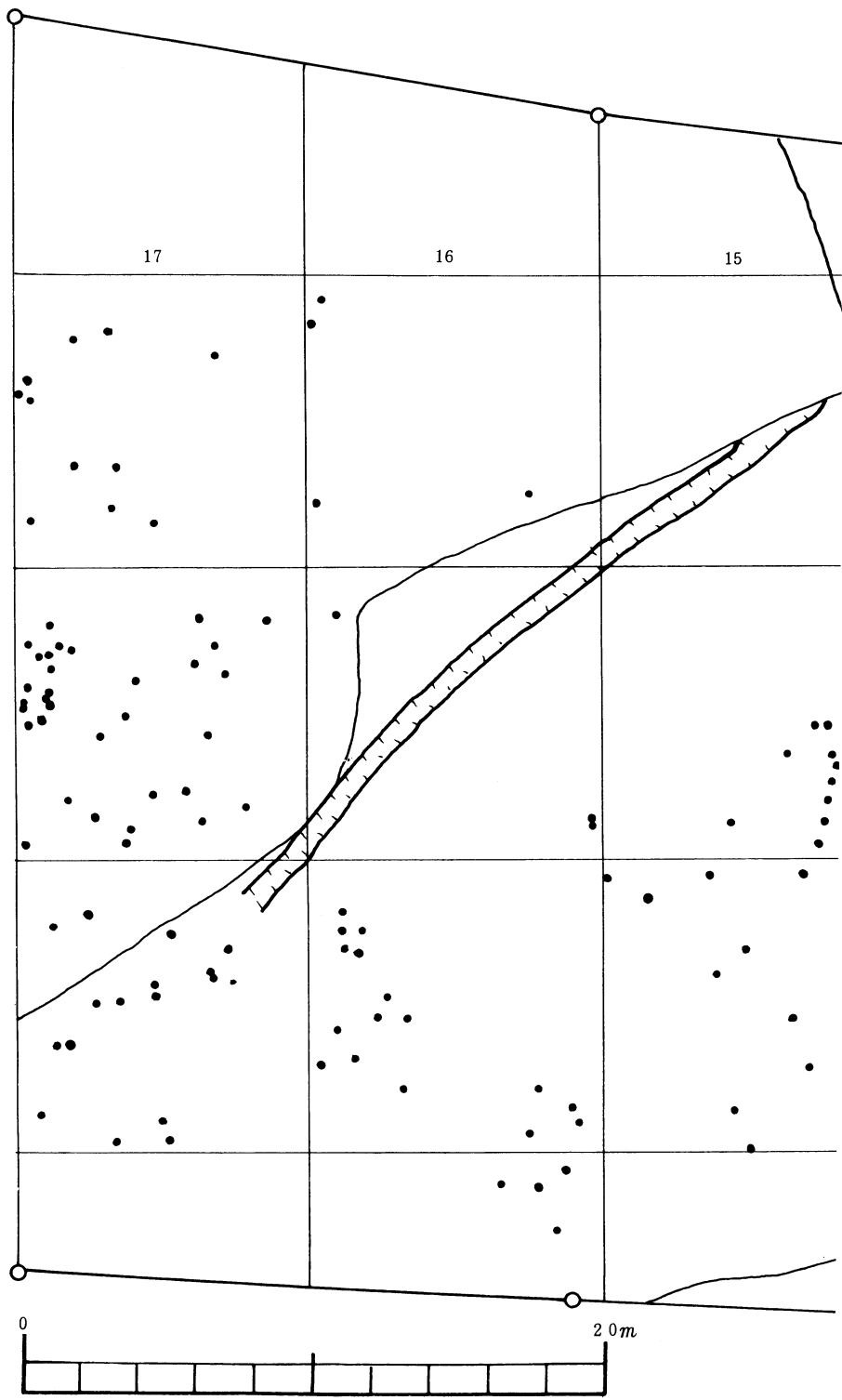
弥生時代の土器は発見されなかった。石器としては、磨製石鏃がみられる。長径26mm・短径20mm, 厚さ2mm, 重さ1.5g, 薄手, 頁岩製。

第3節 古墳時代

① 遺構

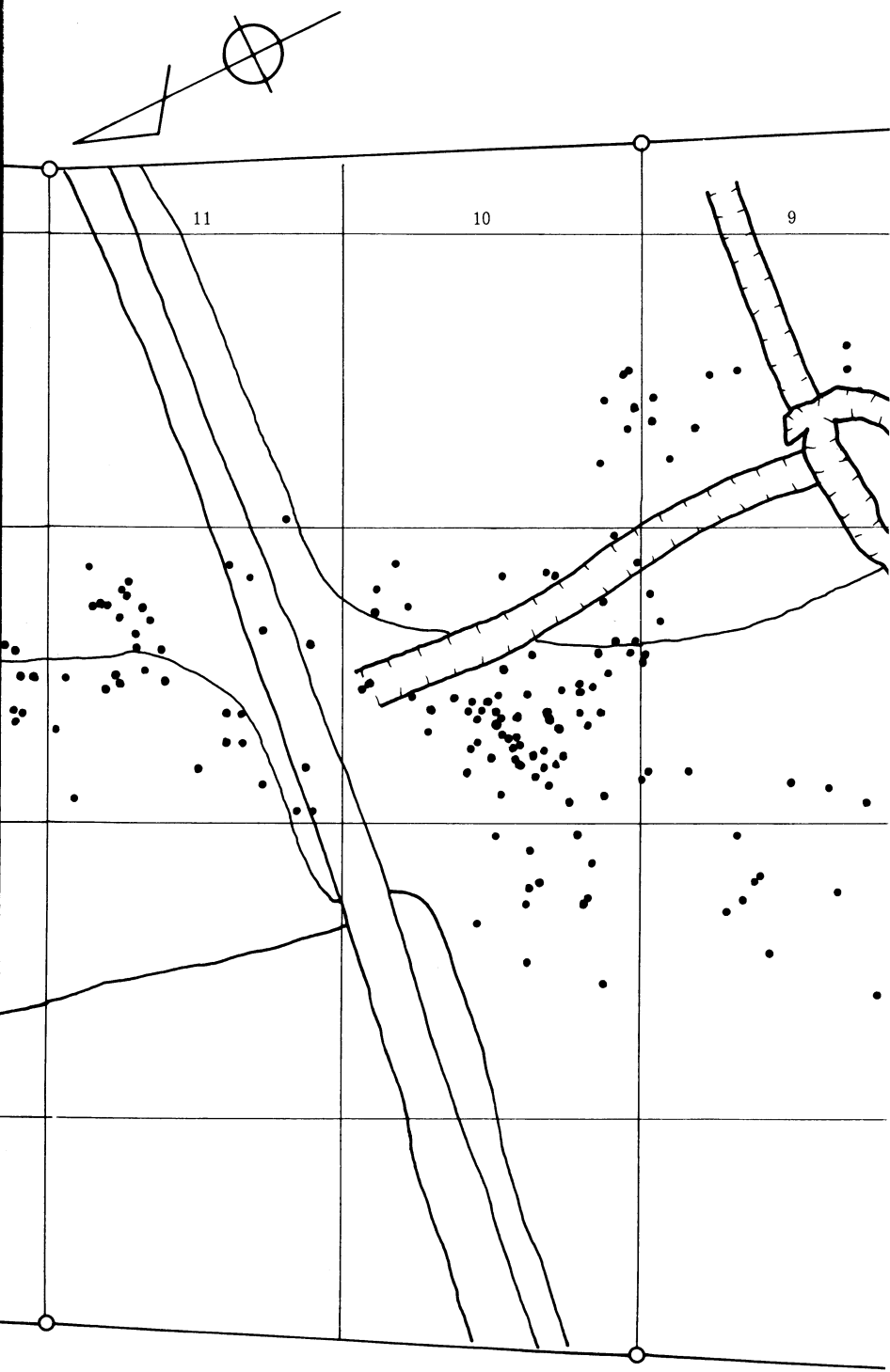
古墳時代の遺構と判断しうるものは発見されなかった。

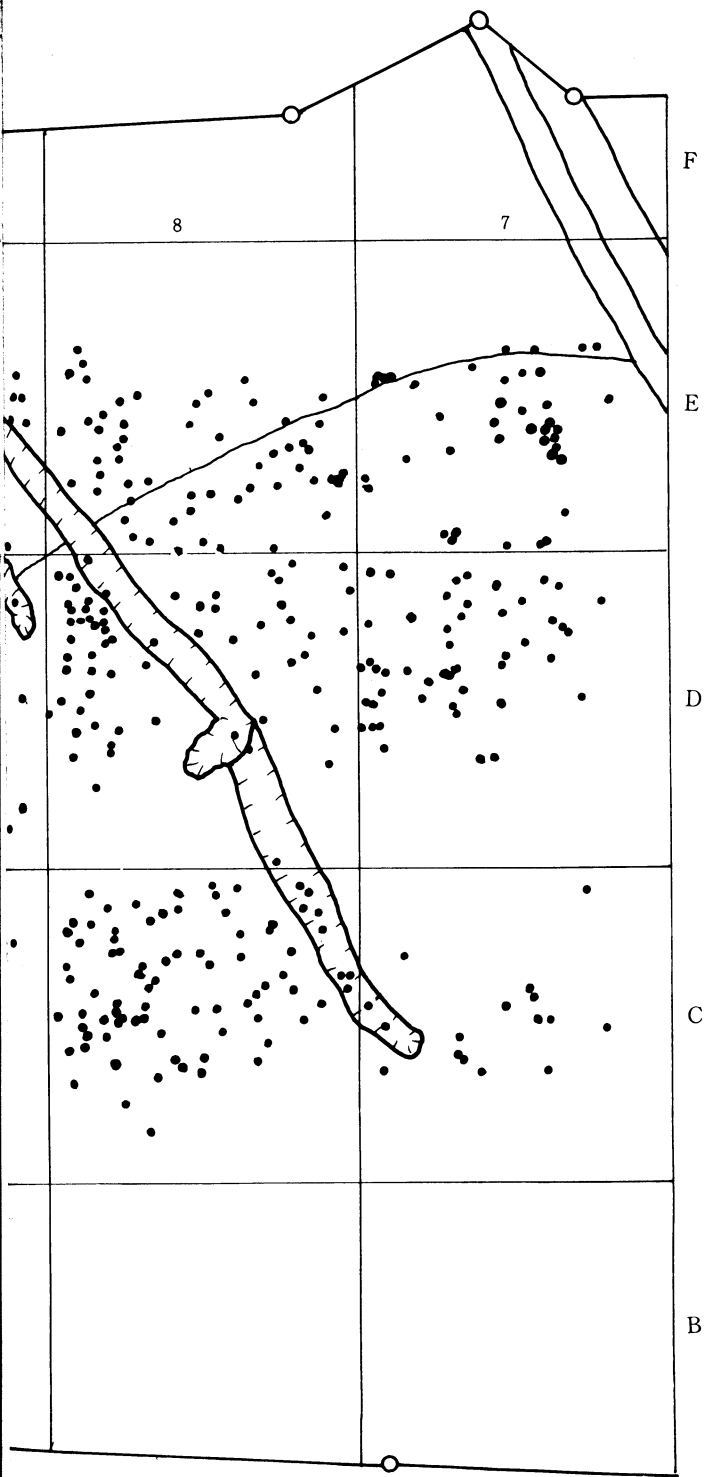
② 遺物





第 4 図 土 器 散 布 ド ッ





ア. 土器

Ⅱ層からⅢa層上部にかけて、成川式土器の破片が多く出土した。C～E-7・8区から17区にかけて散布している。特にD-7・8区に濃密である。全体的に規則性はみられない。

土器は小片が多く、凶化できるものは少ない。甕形土器は、頸部で内弯し、口縁部へやわらかく外反するもので、頸部に刻目凸帯を附すもの(6・7・24)刻目のない三角凸帯を附すもの(8・9)などがある。底部は平底(10・11)や、浅い上げ底を有するもの(27)などがみられる。壺形土器の底部であろう。また器面に篋描き沈線を有するもの(12・13)などがみられた。

第4節 古代～中世

① 遺構

Ⅲa層直上面で明確に輪郭が検出できる。溝状の遺構である。C-7区から東方へ伸び、E-9区で東方から伸びてきた溝と交わる。さらに北方向へ伸びる溝とほぼ直角に交叉している。北端は消滅して不明である。またE-15区からC-17区に略南北方向に走る溝もみられるが、北端は消滅して不明である。

これらの溝は、幅約1m内外、深さ30～40cm、断面鍋底状を呈しており、埋土はⅡ層である。成川式土器の破片や陶磁器を少量包含していた。D-13区には、底面凹凸がはげしく平面形のほそ長い落ち込みがみられ、東側の土師器集中部分は、赤褐色に土が変色して、焼土となっていた。甕形土器の破片が多い。

② 遺物(第6図・第7図)

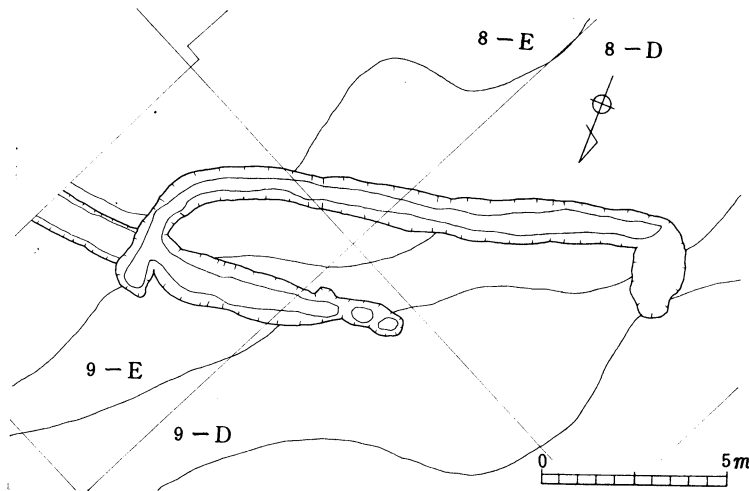
須恵器, 22は外面茶褐色を呈し、格子目状の叩き目を施す。23も同様であるが、外面光沢のある赤茶褐色の釉を施す。他に内外とも刷毛目調整をなした破片もみられた。

土師器・甕形土器は、厚手をなし、口縁部で小さく外反する。口唇部も丸く仕上げる。内面胴部は、縦方向の荒い篋削り調整を行なう。

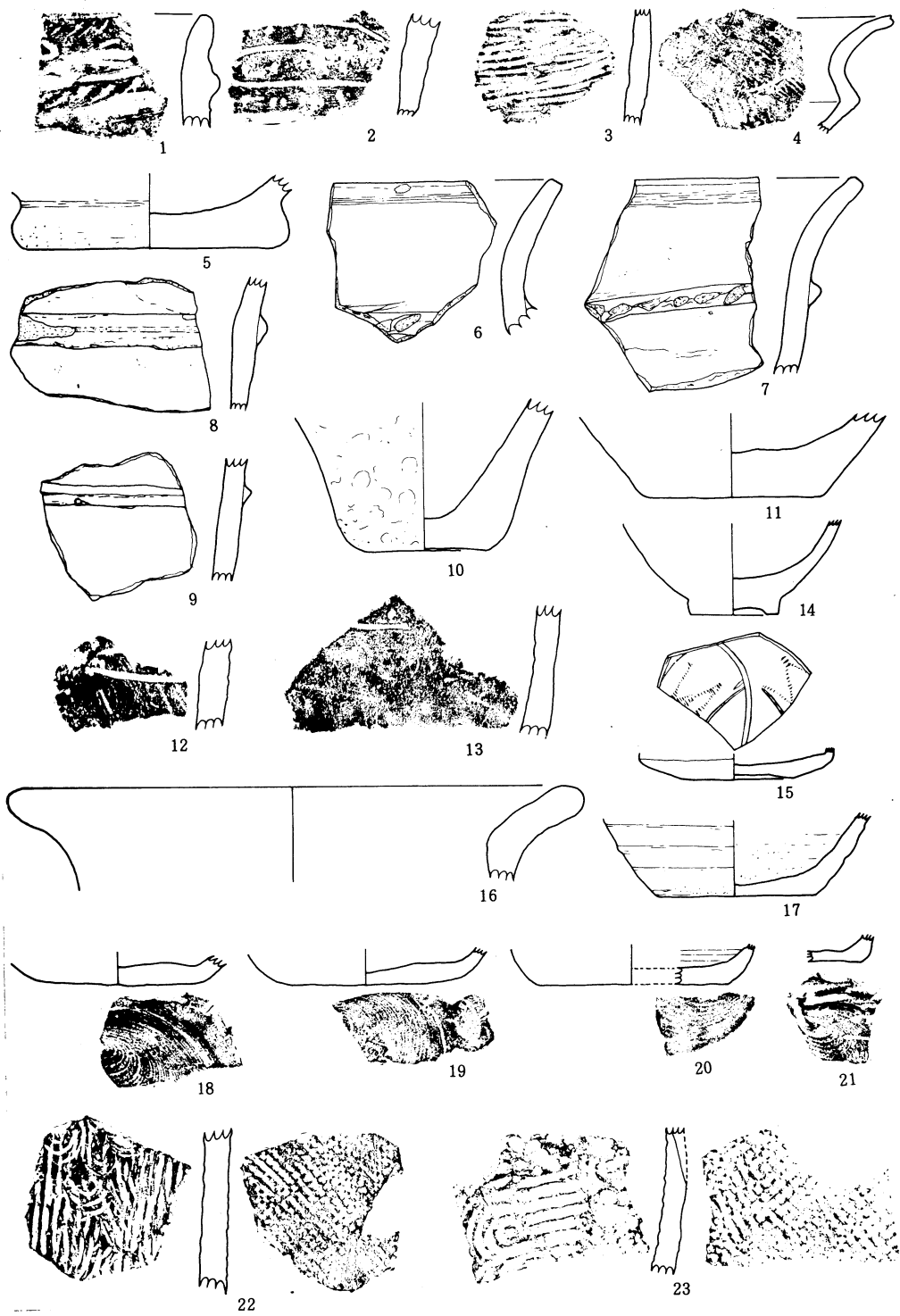
(16・25・26)

坏, 17は、外面の調整が断面波状を呈する。底はヘラ切り仕上げ。18～21は底部から胴部への立ち上がりが弱い。糸切り仕上げで、内面中央部に凹部がみられる。

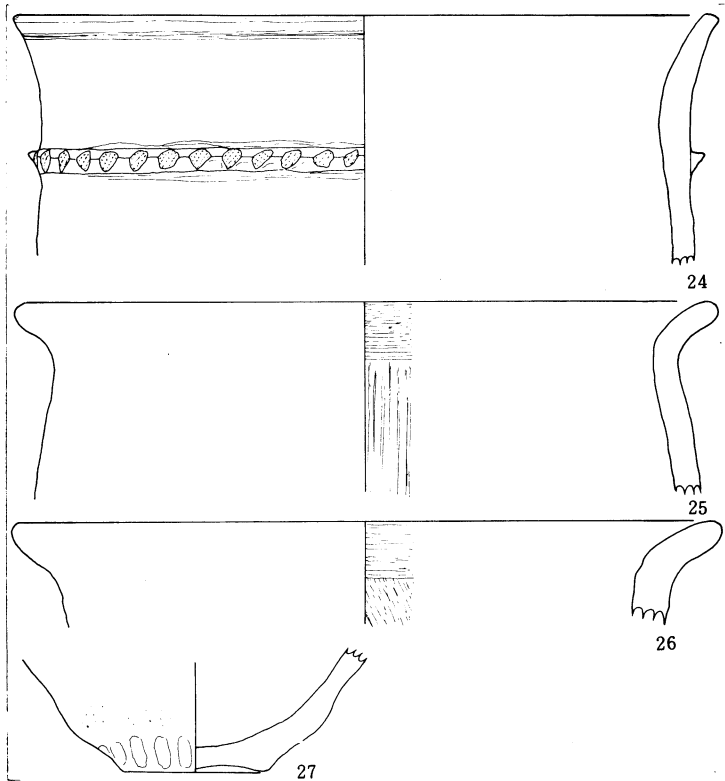
青磁, 14は高台付の境で畳付け部分はシャ



第5図 溝状遺構平面図



第6圖 土器 (1)



第7図 土器(2)

る。一端は欠損している。

第4章 まとめ

当遺跡は、古墳時代の成川式土器を主として出土する遺跡である。南九州においては、この時期の遺跡は各地にみられ、大量に土器を出土することで知られている。辻堂原遺跡、鹿大釘田遺跡、花牟礼遺跡等である。栗野地方においても多くの遺跡が知られているが、縄文式土器を出土する遺跡が多く、この時期のものは少ないように思われる。

土器は小片が多く、散乱した状態で出土しておりまとまったものは少ない。頸部がややくびれて口縁部へやわらかく外反する土器は、くびれ部に布目圧痕の刻目を有し(6・7・24)、また三角状の凸帯を廻らしている。これらに伴う底部は中空の上げ底が普通であるが、本遺跡では出土していない。むしろ10・11・27の平底がみられ注目される。

土師器もかなり出土した。層位的にはⅡ層からⅢa層上面に当り、古墳時代の成川式土器と

ープにカットされている。畳付部および外底は露胎である。15は皿で内面に猫描文がみられる。浅い上げ底をなし、その部分は釉が施されていない。14は竜泉窯で13C~14C、15は同安窯で13C、他の縞のついた蓮弁文は13C~14C後半、白磁の壺の破片は12C~13Cと思われる。(亀井明德氏より教示を受けた。)

その他に備前焼きの破片が1片出土した。

滑石製加工品くさ3
図4)

断面は角のとれた長方形を呈し、内部に直径5mmの孔を穿っている。

混交している。坏は糸切り底を主としたもので（18～21）時期堆定に重要である。甕は16・25・26の厚手のもので、内面の頸部から下を荒い篋削り調整を行っている。これらと関係の深いとみられるものが14・15の青磁である。他にも蓮弁文様の椀や白磁の破片がみられた。いずれも13C前後のものである。遺跡地は松尾城の後背地に当たり、遺跡地末端部の谷は「空堀」といわれる伝承もあるので、これらとの関連も注目される。その他、須恵器や備前焼の破片もみられたが少量であった。

縄文土器も数点出土した。1は市来式 4は黒川式土器である。2は不明。これらに伴うと思われる黒曜石やチャートを利用した石鏃や石片・剥片もみられた。縄文後期から晩期にかけてのもので、この近辺に遺跡の存在が予想される。なお早・前期の土器は全く発見されなかった。近接した木場A遺跡の出土状況と比較して興味深いものがある。



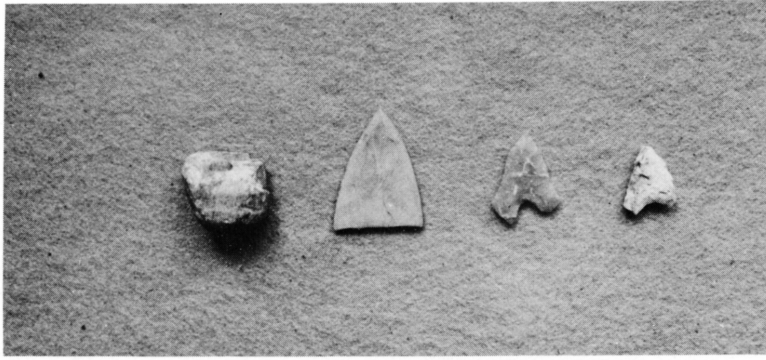
上・下木場B 遺跡土層断面



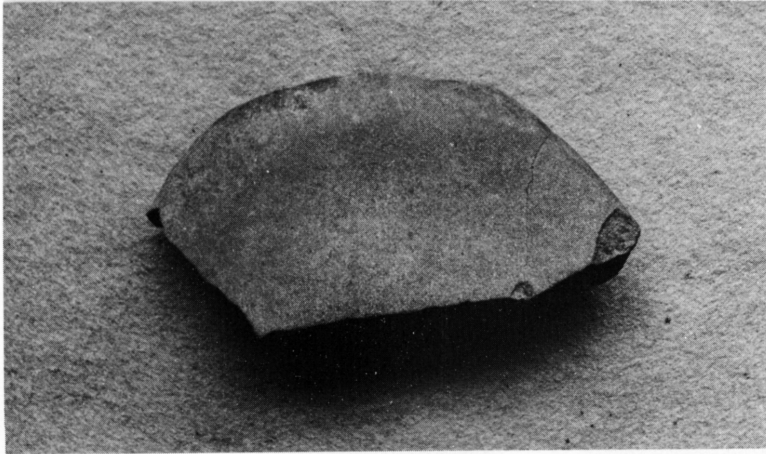
土器出土状況



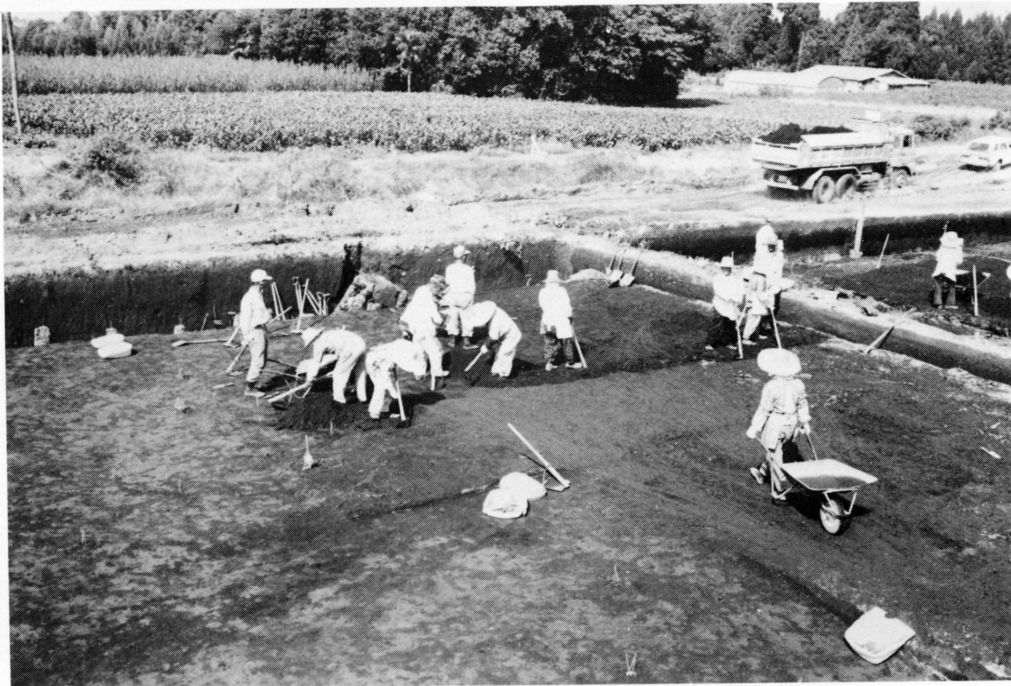
溝状遺構



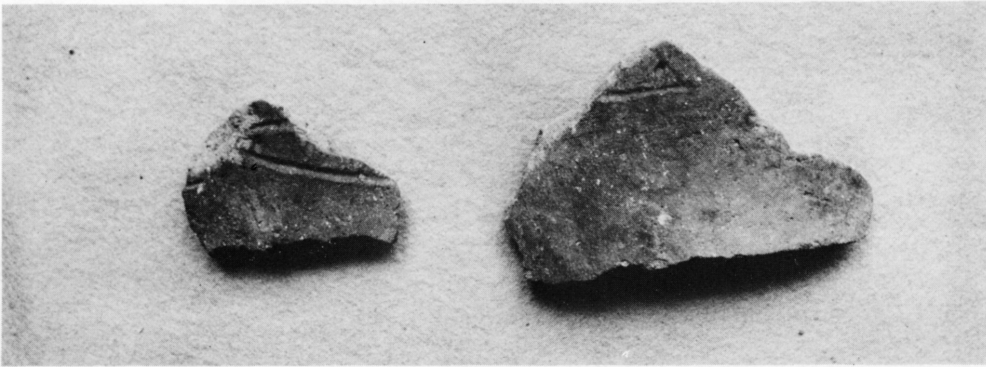
滑石製加工品
石 鏃



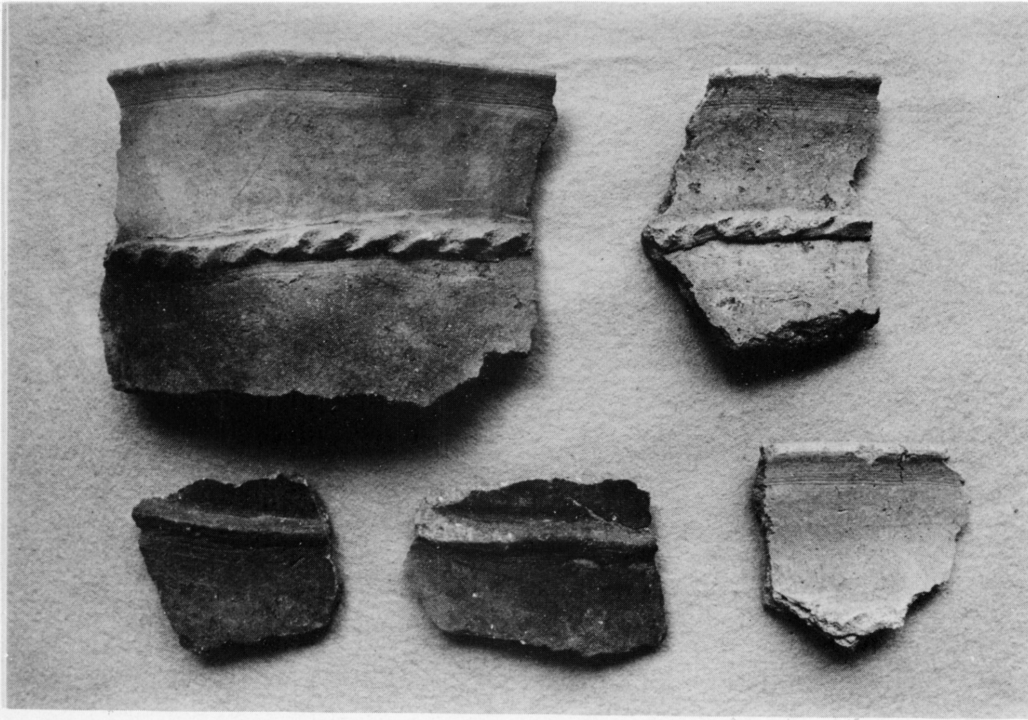
石 皿



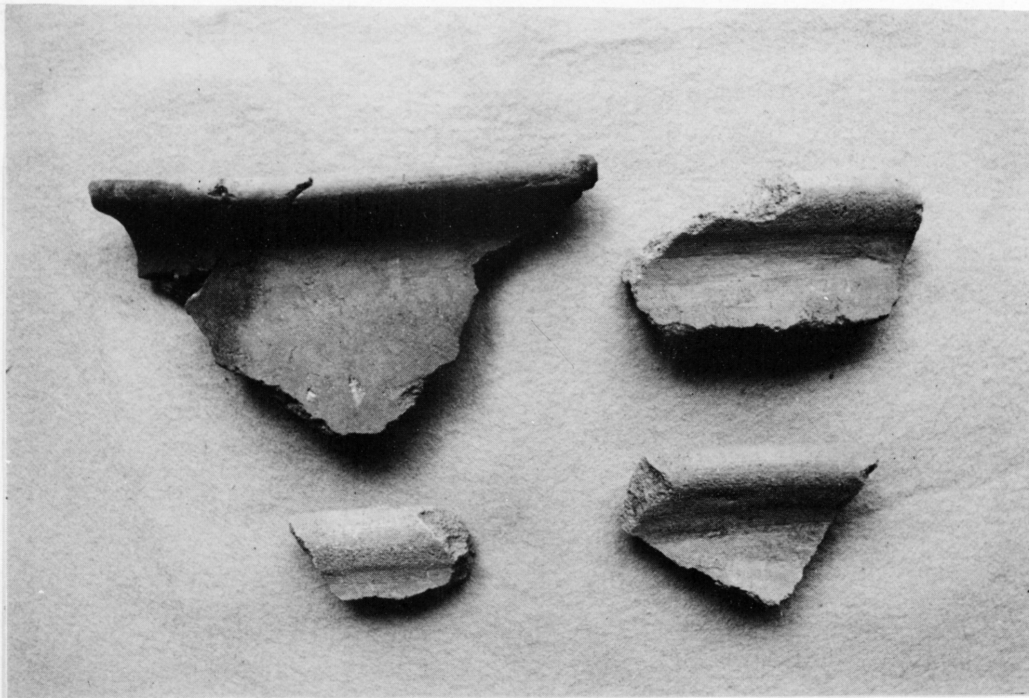
発掘風景



上・縄文土器 中・ヘラ描き文土器
下・底部（左端 縄文土器）



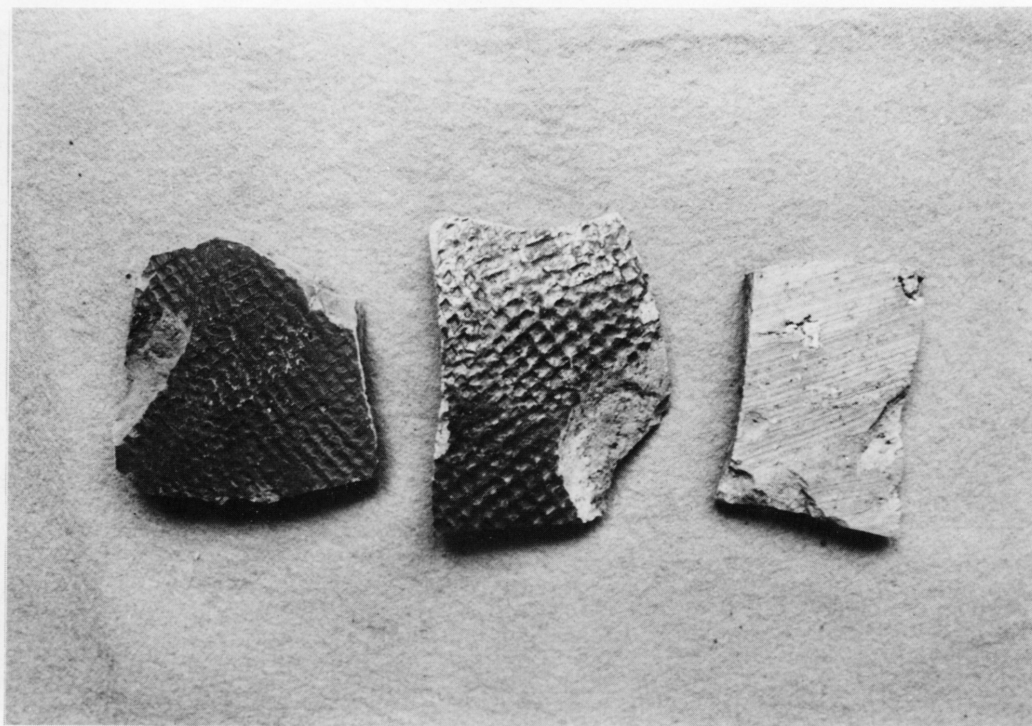
成川式土器口縁部



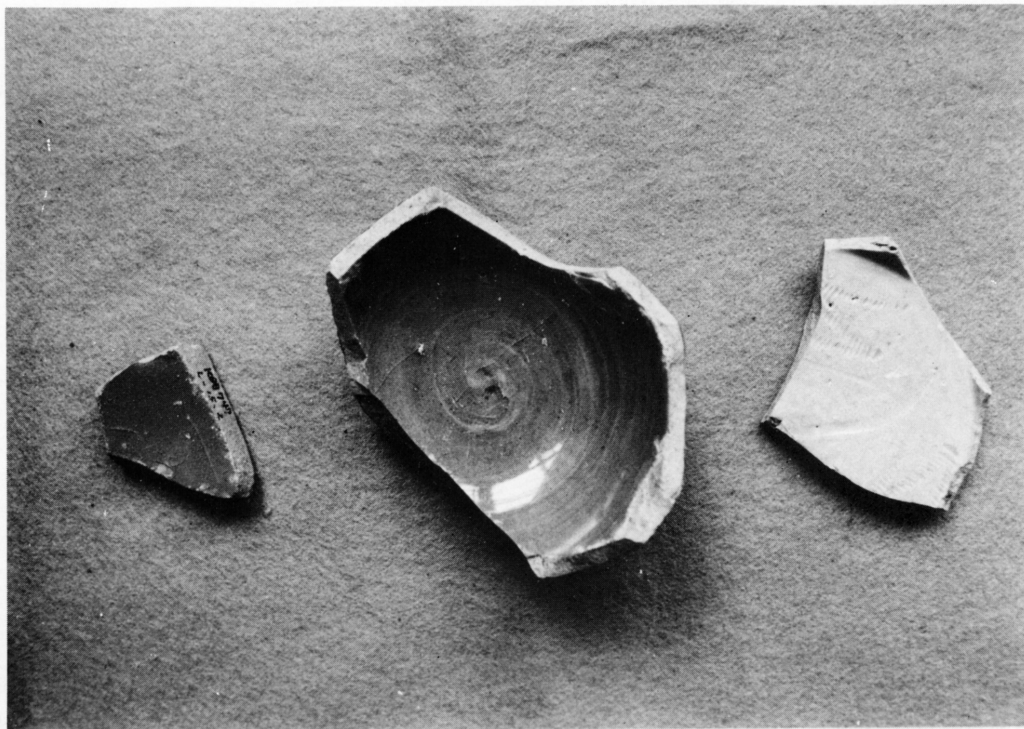
土師式土器口縁部



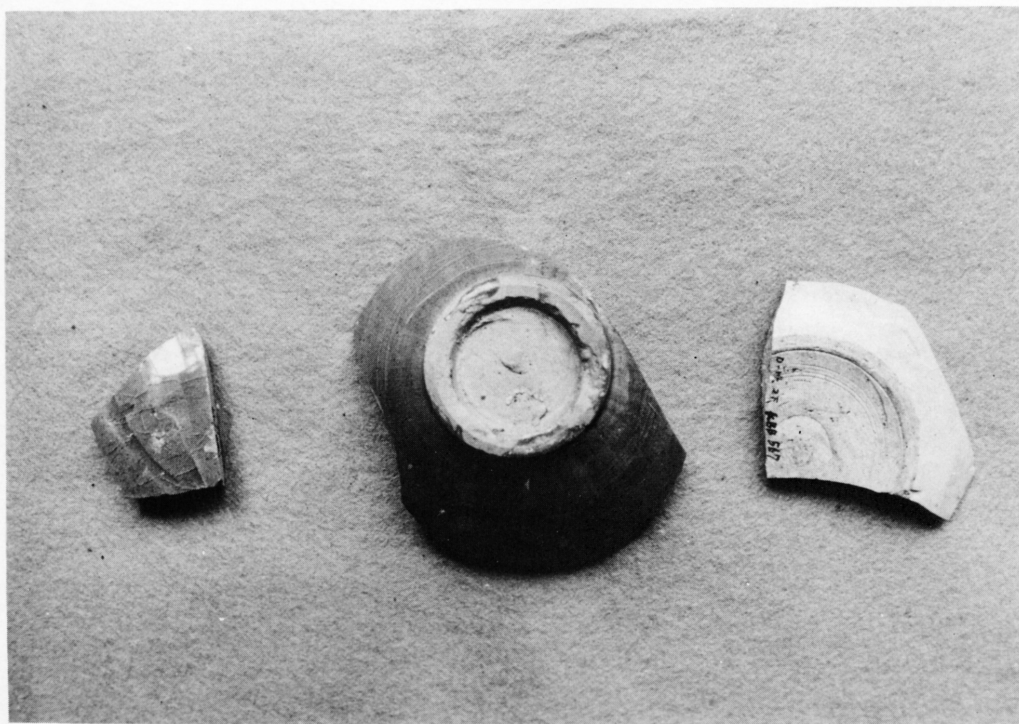
土師杯の底部



須恵器



青 磁



青磁（底部）

堀ノ内遺跡

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設に伴って、昭和54年度に発掘調査を実施した調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 本書の遺物の実測、写真及び執筆、編集は立神次郎・青崎和憲が分担して行なった。
4. 調査の組織は、調査の組織及び調査の経過の中で記した。
5. 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
6. 出土品は、文化課収蔵庫に保管してある。

目 次

I 調査に至るまでの経過	3
II 調査の組織及び調査の経過	3
III 遺跡の位置及び環境	6
IV 調査の概要	11
①土層	11
②遺物	16
V むすび	20

挿 図 目 次

第1図	グリット配置図	5
第2図	位置及び周辺遺跡	7
第3図	周辺地形図	10
第4図	土層略図	12
第5図	土層断面図	13
第6図	土層断面図	14
第7図	B-4区, B-5区遺物出土状況	15
第8図	縄文式土器実測図	16
第9図	成川式土器実測図	16
第10図	甕形土器実測図	17
第11図	甕形土器実測図	18
第12図	土師器, 内黒土師器, 須恵器実測図	19

表 目 次

表 1	堀ノ内遺跡周辺の遺跡一覧表	8
-----	---------------	---

図 版 目 次

図版1	調査風景 層位	21
図版2	A-4区土器出土状況・A-4区土師器出土状況	22
図版3	縄文式土器・成川式土器・甕形土器	23
図版4	甕形土器・土師器・内黒土師器	24
図版5	甕形土器・須恵器	25

I. 調査に至るまでの経過

日本道路公団は「日本道路公団の建設事業等施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき、九州縦貫自動車道鹿児島線（吉松—加治木線）の埋蔵文化財について、昭和47年2月23日に協議を求めた。これに対し、鹿児島県教育委員会は、昭和47年8月2日～10日、同月18日～26日までの2回にわたり、延長38km、幅2kmにわたって埋蔵文化財分布調査（溝辺—加治木間は予定路線内）を実施し、その結果に基づいて、埋蔵文化財の保護のうえからも十分配慮されることを要望したが、溝辺—加治木間については昭和47年5月27日に路線を発表した後だったので事前に調査して記録保存することとした。溝辺～吉松間は県文化財専門委員（当時）、河口貞徳氏、同故池水寛治氏の指導を得て第二次の埋蔵文化財の分布調査を実施し、発掘調査前の遺跡の取り扱いについて慎重を期するとともに、昭和49年1月～2月、河口貞徳氏に指導を依頼して再確認のための埋蔵文化財分布調査を実施した。これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決定し、日本道路公団と協議の結果、保存する遺跡（吉松町堂迫地下式横穴）1か所、記録保存する遺跡10か所が決定し、本遺跡である堀ノ内遺跡も含まれた。

本遺跡は分布調査の結果、台地上の北側斜面に面する畑地の約4,800㎡の範囲内に遺物が散布していたが、そのうち約4,300㎡は九州縦貫自動車道本線外で、取り付け道路部分に約500㎡が記録保存の対象となった。

調査期間は、昭和54年9月10日～27日までの実働13日間を要した。

II. 調査の組織及び調査の経過

① 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	文化課長	山下典夫	
	文化課長	猿渡侯昭	
調査企画	専門員	本蔵久三	
調査担当者	主事	立神次郎	
	主事	青崎和憲	
	主事	牛ノ浜修	
事務担当	管理係長	中條享	
主幹兼	管理係長	川畑栄造	
	主査	安藤幸次	
	主事	天辰京子	
		山下玲子	

② 調査の経過

分布調査の結果、堀ノ内遺跡は、吉松町の中心部を蛇行しながら流れる川内川へ合流する樋寄川と大谷川とに取り囲まれた北側斜面の台地上で、標高約320mの畑地に位置しており、採集遺物は、縄文式土器片、成川式土器片、黒曜石剥片などが見られる。

発掘調査は、分布調査の結果、遺物の散布の認められた畑地の約4,800㎡が遺跡地であるが、本遺跡は九州縦貫自動車道の建設に伴う附帯工事（既成の農道拡張区部分の約500㎡）が対象となり、調査期間は昭和54年9月10日～9月27日までの実働13日間を要した。その間の調査経過については、下記のとおりである。

調査日誌抄

発掘調査期間 昭和54年9月10日～9月27日

9月10日 堀ノ内遺跡発掘開始

堀ノ内遺跡の発掘調査の打合せ。発掘予定地として残してあった地点は路線外にあたり、道路を境に東側の一段高い畑地の縁辺部である。分布調査で遺跡として範囲設定した一筆の畑地の縁辺部約500㎡が対象区である。

作業員に発掘調査の説明と調査上の注意を行ない作業に入る。草木の伐採及び発掘器材運搬テント張りの作業を行う。

9月11日 調査区トレンチ設定。畑地縁辺部の調査区（約500㎡）の細長い地区である。

北側の側溝より2mひかえて基本杭を設定。地層は2区～6区にかけて傾斜する。Ⅱ層の黒褐色層とⅢ層の赤ホヤ層の接点から、土師器、須恵器片（小片）が出土する。一部溝によって切られている部分もある。

9月12日 B-2, 3区掘り下げ。Ⅱ層は耕作の為削平。B-4, 5区掘り下げ。Ⅱ層は約10cm堆積。B-6区掘り下げ、Ⅱ層無し。Ⅷ層まで掘り下げる。一部Ⅴ層が残る。B-7区, A-1区設定。掘り下げ、Ⅱ層無し、Ⅵ層まで約60cm掘り下げる。

9月13日 A-1区Ⅷ層まで掘り下げ終了。B-2, 4, 5区盛土排除。

9月14日 B-2区Ⅲ層以下掘り下げ。局部断層有り。B-4～7区小型ブルドーザーによる盛土及び、竹、立木の根の除去。B-4, 5区Ⅱ層に土器集中し、その拡張部の掘り下げ。B-5区西北壁～B-4区東にかけ旧耕作土の落ち込みが検出さる。

9月17日 B-2区Ⅴ, Ⅶ層掘り下げ、Ⅵ層無し、B-4, 5区一部耕作土掘り下げ。遺物検出作業。

9月18日 B-4, 5区Ⅱ層、清掃写真、平板実測、B-6区Ⅷ層まで掘り下げ終了。

B-6区Ⅷ層まで掘り下げ終了。B-2区Ⅷ層まで掘り下げ終了。

9月19日 B-4, 5区Ⅲ層面の $\frac{1}{500}$ 、10cm毎のコンタ線測量。地形実測 $\frac{1}{500}$ 。B-7区北面縦割りトレンチ設定、掘り下げ作業。B-3区Ⅲ層以下掘り下げ開始。

9月20日 B-3, 7区Ⅲ層以下掘り下げ。B-7区拡張及び北面掘り下げ。C-7区北面

耕作土以下掘り下げ。Ⅱ層は削平されている。

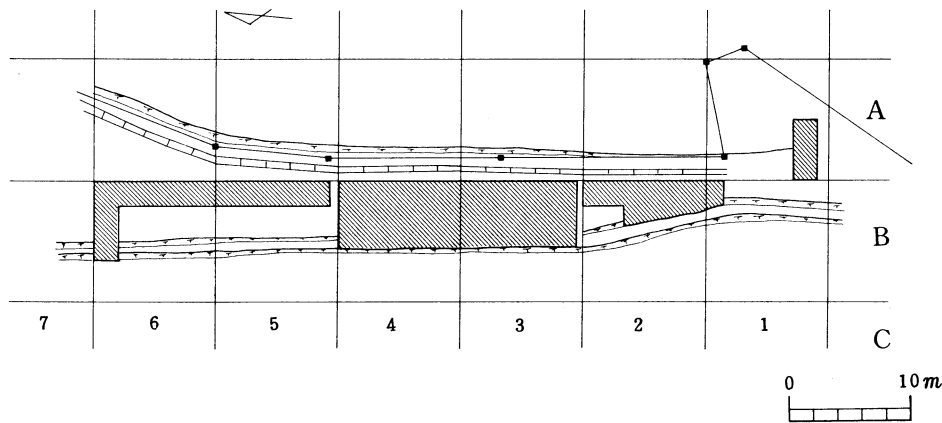
9月21日 B-4, 5区Ⅱ層下部, 土器出土状況実測 $\frac{1}{20}$ 。遺物取り上げ。B-2, 3区Ⅴ層以下掘り下げ。C-7区掘り下げ。

9月25日 B-2, 3区Ⅲ層以下掘り下げ。B-4, 5区Ⅱb層の土器出土。B-6, 7区Ⅲ層以下掘り下げ。C-Ⅶ区掘り下げ。

9月26日 B-2, 3区Ⅶ層まで掘り下げ終了。B-4, 5区Ⅱb層の土器出土状況実測($\frac{1}{20}$)。一部旧畑地の為・削平されている西側をのぞき土師器の出土を小片であるが多数見られた。B-6区Ⅶ層まで掘り下げ。B-7区東北壁深掘り。

9月27日 A-1区東壁土層実測。B-2~7区北壁土層実測。B-4区東壁土層実測。B-7区西壁層実測。

作業器材後かたづけ。関係事務所へ発掘作業終了のあいさつ。



第1図 堀ノ内遺跡グリッド配置図

Ⅲ. 遺跡の位置及び環境

堀ノ内遺跡は、始良郡吉松町大字川添字堀ノ内に位置している。吉松町は鹿児島県の北端部にあり、北部及び東部は宮崎県えびの市との県境をなし、南部から南西部にかけては栗野町、西部は伊佐郡菱刈町と相接している。

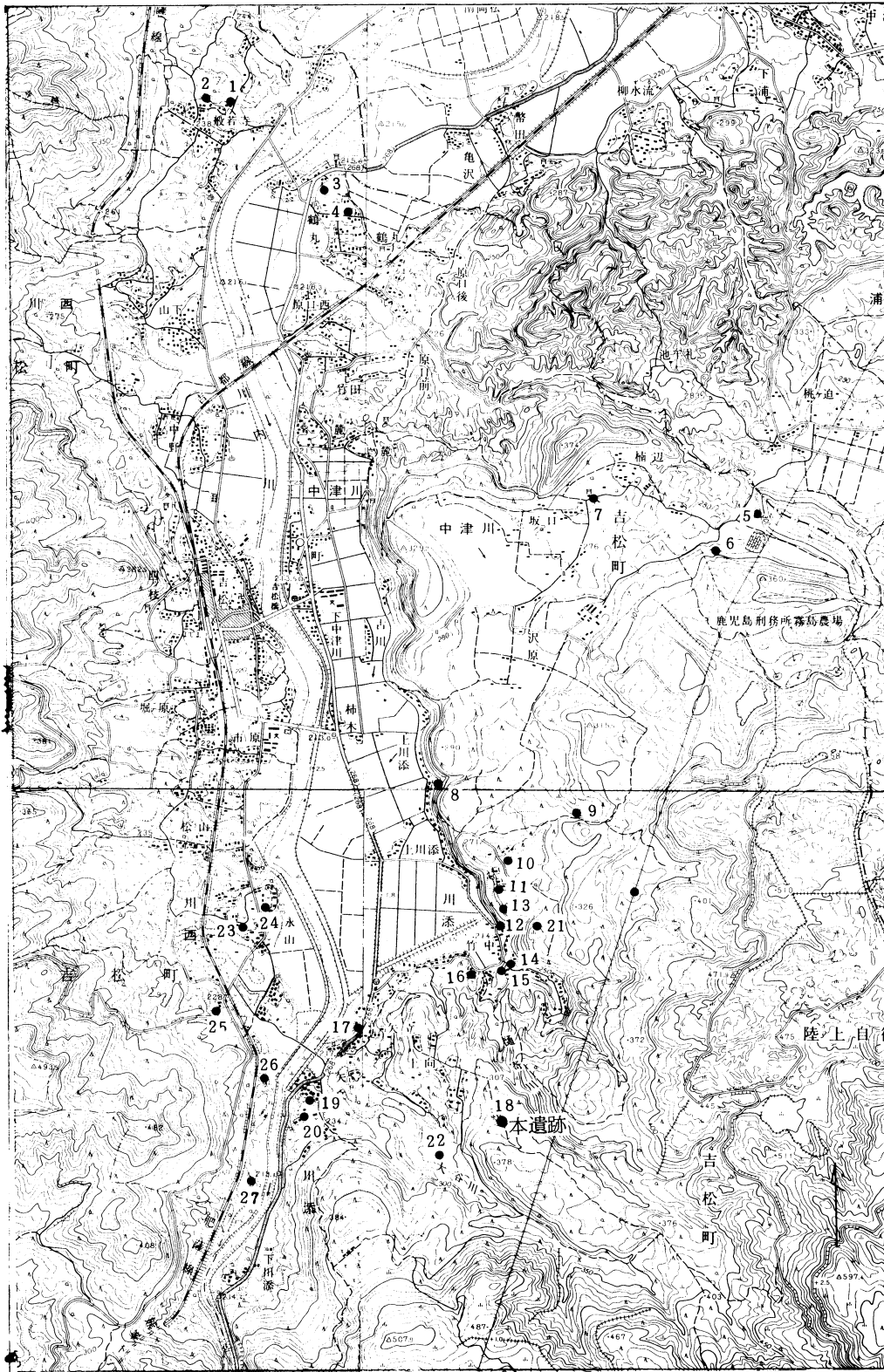
本遺跡の位置する始良郡北部地方を大きく見ると、西北部には九州山脈の連山をひかえ、南東部には霧島連峰の山岳が千数百mの標高を呈し、その間を熊本県の白髪山に源を発する川内川が南流して細長い加久藤盆地を形成し、米穀倉地帯となっている。

吉松町は、加久藤盆地の南端部にあたり、川内川沿岸の水田地帯は、砂礫層の土壤で、台地及び丘陵性台地は、黒色火山灰土の土壤で覆われ下層にはシラス層が堆積している。この加久藤盆地内には、加久藤層群の分布が見られ、その分布は、川内川の右岸及び長江川以東の地域では、ほぼ水平に近く、長江川左岸より京町南部から吉松にいたる地域では著しい褶曲と破碎が認められ、破碎帯であることを示している。霧島火山群の主脈は北西—南東方向に走り、ひとつの圧碎帯と考えられるが、加久藤盆地破碎帯はこの延長部に位置し、地質構造上不安定なこの地域は地震帯となっている。この地域に大災をもたらした「えびの地震」は昭和43年2月に起り、この加久藤盆地が震源地となっていることは記憶に生々しい。

川内川流域は、河岸段丘が発達し、特に右岸はその傾向が見られ、集落の多くが立地している。左岸は標高300mの高地段丘を東限とし、標高200mの^{註①}低平な沖積平野を形成し、穀倉地帯となり、その周辺部に集落が形成されている。本遺跡もこの左岸に位置している。

本遺跡は、吉松町の中心地より南東約3.3kmで、大谷川と樋寄川とに取り囲まれた丘陵性の北側斜面に位置する畑地に所在している。周辺地域は階段状と化した畑地のほとんどは植林がなされ、一部は、この地方の特産である栗の栽培が行われている。

本遺跡の周辺には、多くの遺跡が周知されている（第2図、表Ⅰ）が、これらの遺跡は本遺跡と同様に、九州縦貫自動車道建設工事に伴い、分布調査の結果発見された遺跡もあり、また周知の遺跡については、所在地の確認も実施されている。その中で、堂迫古墳周辺には、堂迫遺跡・堂迫遺跡A地点からF地点までの7遺跡、^{註②}三堂遺跡A～C地点の3遺跡があり、その他については、第2図と表1に示したとおりである。そのうち永山遺跡（11・12）は、昭和48年1月20日、宅地造成中に発見され、同年8月に鹿児島県考古学研究所・吉松町教育委員会により^{註③}発掘調査が実施されている。その結果、地下式石積石室の数は17基、うち13基について石室まで調査が行われている。出土遺物としては壺形土器・高杯・銅鏡・鉄鎌・鎌柄・ガラス製小玉などが出土した。^{註④}



第2図 堀ノ内遺跡の位置及び周辺遺跡

表1 堀ノ内遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	編年	遺物	備考
1	中原	吉松町般若寺 中原	台地	後期	石斧・弥生式土器	
2	中原	〃 〃 〃	畑地		土師器・小片散布	
3	鶴丸古墳	〃 鶴丸 鶴丸寺	台地		須恵器・土師器・鉄刀・人骨・地下式土壇・箱式棺	
4	鶴丸	〃 〃 〃	〃		須恵器・土師器	
5	竹島 A	〃 中津川 竹島	〃	後期	弥生式土器片・土師式土器片	
6	竹島 B	〃 〃 〃	〃	前期	縄文式土器(竊式)	
7	秋葉神社	〃 〃 楠辺				
8	川添の供養塔	〃 川添 池田			馬迫己利宅	
9	堂迫 A	〃 〃 堂迫			弥生式土器片・土師器片・須恵器片	
	堂迫 B	〃 〃 〃			土師式土器片	
	堂迫古墳	〃 〃 〃	台地		鉄剣・人骨・鉄刀・鉄鏃 地下式土壇	広範囲にわたり地下式古墳の存在可能大
	堂迫 C	〃 〃 〃			弥生式土器片・土師式土器片・黒曜石剝片	
	堂迫 D	〃 〃 〃			弥生式土器片	
	堂迫 E	〃 〃 〃			土師式土器片・土製品	
10	三堂 A	〃 〃 三堂			弥生式土器片・土師式土器片	
	三堂 B	〃 〃 〃			須恵器片・石斧	
	三堂 C	〃 〃 〃			弥生式土器片・土師式土器	
11	竹中	〃 〃 竹中	斜面地		弥生式土器・羊磨製石斧	
12	竹中	〃 〃 〃	〃		土師器	
13	御堀内	〃 御堀内			弥生式土器片・土師式土器片	
14	竹中の供養塔	〃 川添 竹中			享保三戌年	
15	愛甲家歴代の墓	〃 〃 堀ノ内				
16	熊野神社遺跡	〃 〃 川添		晩期	縄文(晩期)土器片・土師式土器片	
17	庚申供養塔	〃 〃 〃				
18	堀ノ内 A	〃 〃 堀ノ内			縄文式土器片・弥生式土器片 土師式土器片・黒曜石剝片	
	堀ノ内 B	〃 〃 〃				
	堀ノ内 C	〃 〃 〃			縄文式土器片・土師式土器片・黒曜石剝片	
	堀ノ内 D	〃 〃 〃			弥生式土器片	
	堀ノ内 E	〃 〃 〃				
	堀ノ内 F	〃 〃 〃			縄文式土器片・弥生式土器片・須恵器片	
19	重永 A	〃 〃 重永			成川式土器片・土師器片	

番号	遺跡名	所在地	地形	編年	遺物	備考
20	重永 B	吉松町般若寺 重永			弥生式土器片・土師式土器片	
21	三体堂	〃 〃 三体堂			五輪塔	
22	永野	〃 永野 〃			縄文式土器片・弥生式土器片・土師式土器片・須恵器片・石鏃	
23	永山古墳群 A	〃 川西永山			地下式板石積石室古墳	
24	永山古墳群 B	〃 〃 〃				(S.47.1.29現在) 34確認
25	前田 A	〃 永山前田		晩期	縄文(晩期)土器片・石鏃・黒曜石剝片	
26	前田 B	〃 〃 〃			縄文式土器片・弥生式土器片・土師器片	
27	豆付	〃 川西豆付	河岸段丘		縄文式土器	

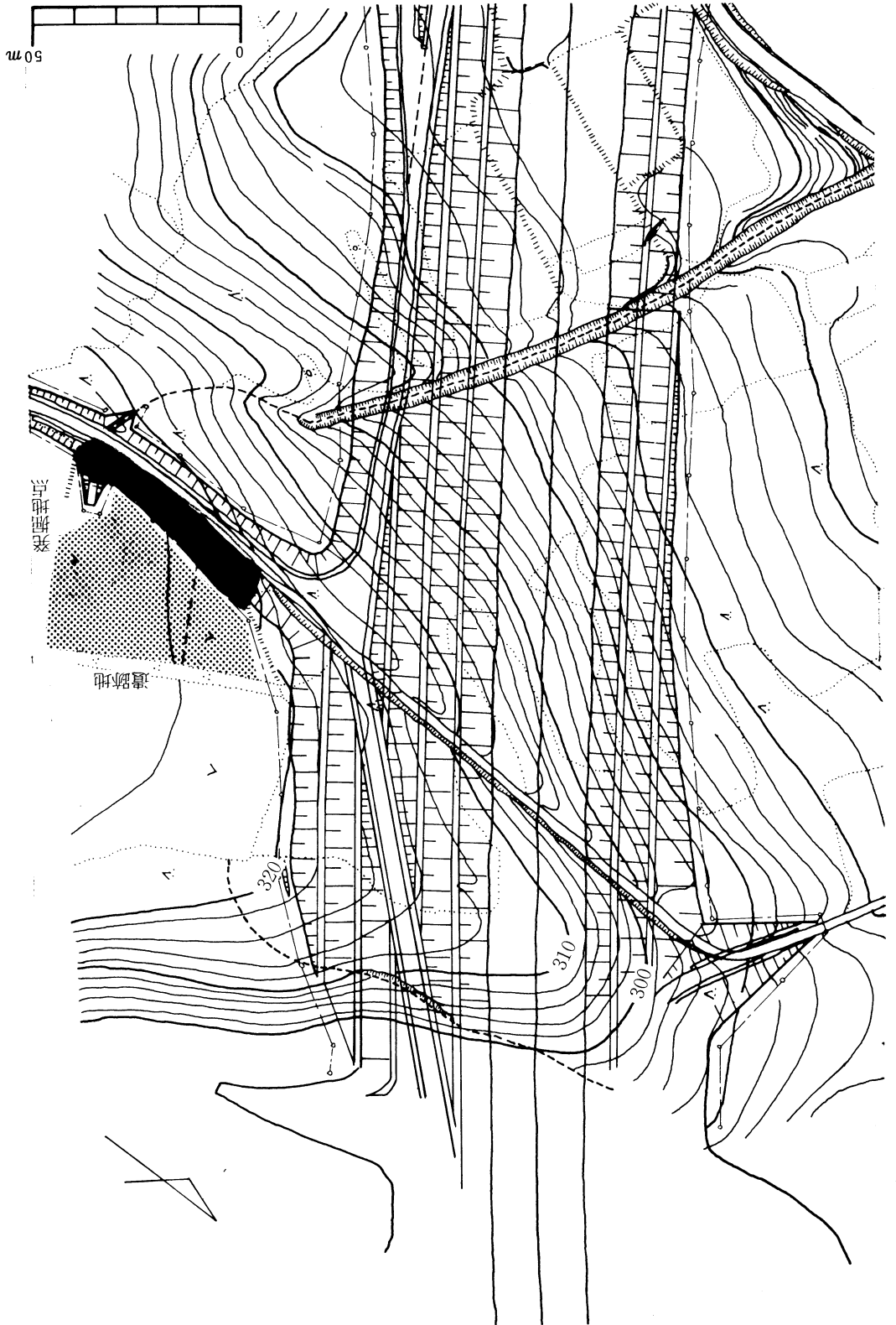
註① 吉松町郷土誌編纂委員会 「吉松町郷土誌」 1970.5

註② 鹿児島県教育委員会 「埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」 九州高速道路鹿児島線(加治木～吉松間) 1973

註③ 註2に同じ

註④ 吉松町教育委員会 「永山遺跡」 1973.12

第3图 堀ノ内遺跡周辺地形図



Ⅳ. 調査の概要

堀ノ内遺跡は、堀ノ内遺跡B地点で、その面積は約4,800㎡あり、そのうち今回の発掘調査面積は、九州縦貫自動車道の建設に伴う附帯工事（既成の農道を拡張区）部分で、旧農道より比高約1.8mの面に延びた畑地の縁辺部約500㎡である。

本遺跡は、畑地の縁辺部が調査区で、細長い地形を呈し、北側に設営されている側溝より2mひかえ基本杭を基準に、4m×10mのグリッドを設定し、北から南へA、B区、東から西へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ……区とし、A-1区、B-Ⅰ区、B-2区、B-3区と呼ぶことにした。

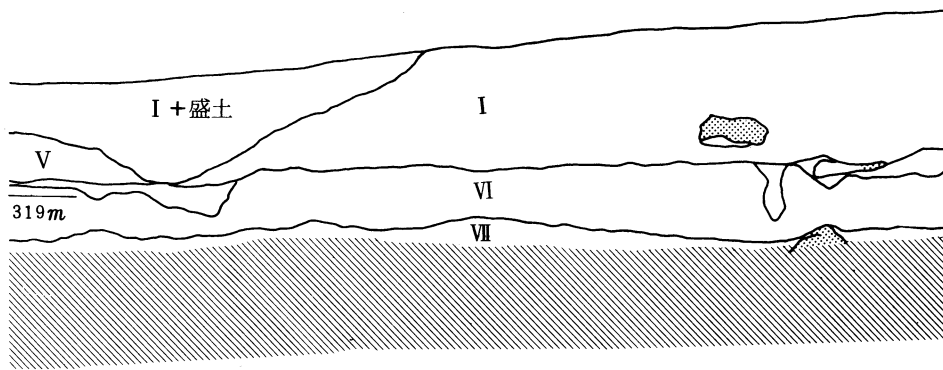
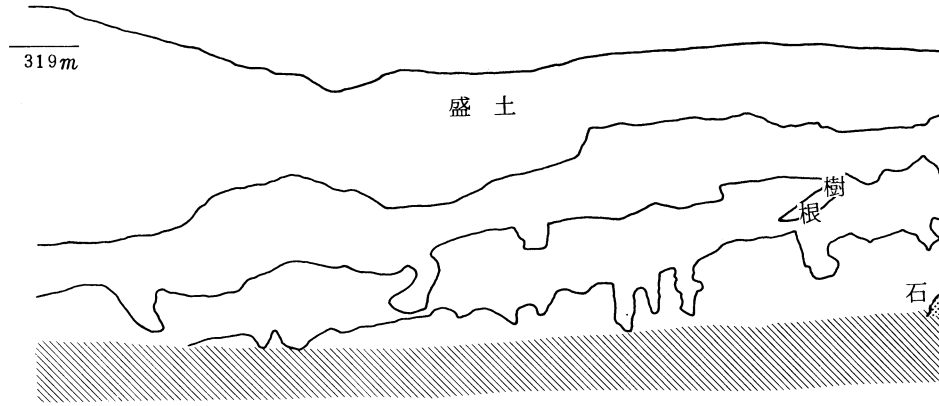
発掘作業は、当初、幅2mのトレンチによる確認調査から始め、その結果に基づき発掘調査をすることとし、A-1区、B-2区、B-3区、B-4区、B-5区、B-6区、B-7区の掘り下げ作業を実施した。その結果、A-1区、B-2区、B-7区は耕作などで攪乱されⅡ層の遺物包含層も消失していた。B-4区、B-5区のⅡ層は約10cmの堆積が認められた。B-4区、B-5区のⅡ層とⅢ層の接点より奈良期の土器の小片が多数出土したのでこの面が生活面と思われる。全体の地形からみると東側から西側へ傾斜し、Ⅱ層の残存しているB-4区、B-5区は、わずかに凹地になっており、そこに遺物が集中したものと考えられる。地区よりはⅡ層遺物包含層削平が確認されたりしているため、遺物の出土は認められなかった。また、B-7区表土層からは縄文時代前期の押型文土器の破片1点が出土したのみである。B-4、B-5区は、土器が集中したため、拡張作業を実施し、掘り下げた結果、Ⅱ層より土師器の小破片が多数出土した。その中にB-5区で成川式土器1点が出土している。B-4区、B-5区は遺物検出作業を継続しながら、他区については、さらに下層の掘り下げ作業を実施したが、遺物、遺構ともに発見されなかった。B-7区は表層から、縄文時代前期の押型文土器の破片1点が出土したためその周辺部を拡張して縄文時代前期の遺物包含層の確認調査を実施したが、遺物、遺構とも確認できなかった。B-4区、B-5区は土器取り上げ作業後下層の調査を実施した。

本遺跡の出土遺物は、B-4区のⅢ層より縄文式土器の小破片、B-4区、Ⅱ層より成川式土器も見られ、B-4区、B-5区のⅡ層より土師器の坏、甕、内黒土師器、須恵器などが出土した。B-7区の表層より縄文時代前期の押型文土器の小破片も出土した。

① 土層

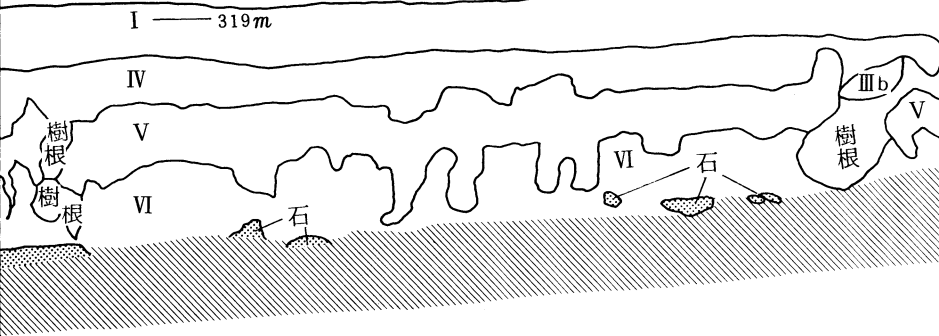
本遺跡は、畑地の縁辺部に当り、また南側より北側へ傾斜が見られ、B-8区以降になると現状でも判明されるほどの開墾による削平が行なわれている。

遺跡の標準的な層位は次のとおりである。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は黒褐色火山灰土層で土師器の遺物包含層で、随所に削平が認められる。Ⅲa層は黄褐色土層（赤ホヤ層）、Ⅲb層はパミス層で、不規則のブロック状を呈するⅣ層は、灰青色粘質土層である。Ⅴ層は暗褐色粘質土層で、

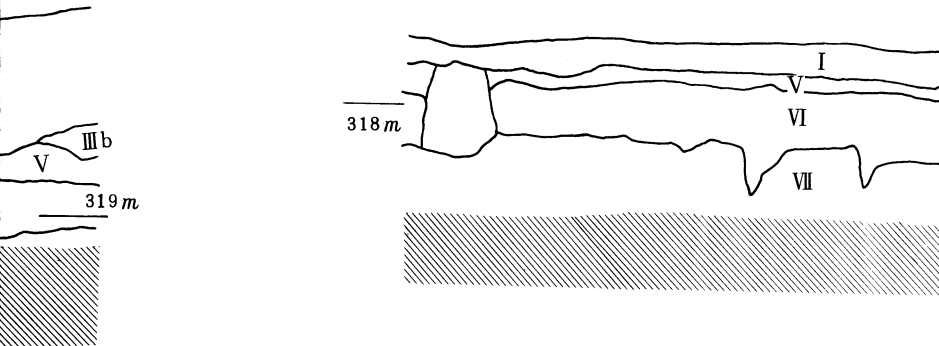


B-6, B-7 区東側土

B-7 区 | B-6 区

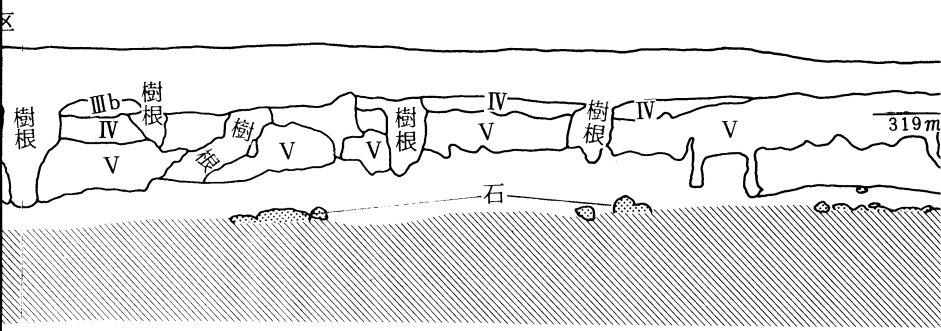


A-1 区北側土層断面区

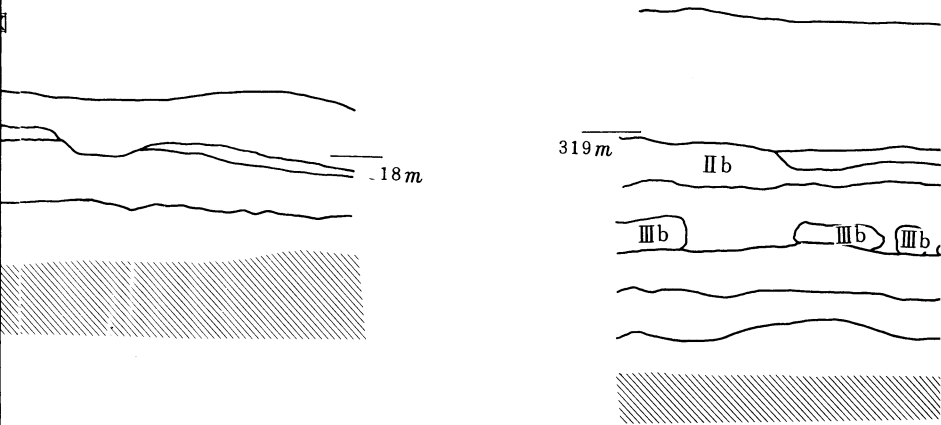


第4図 堀ノ内

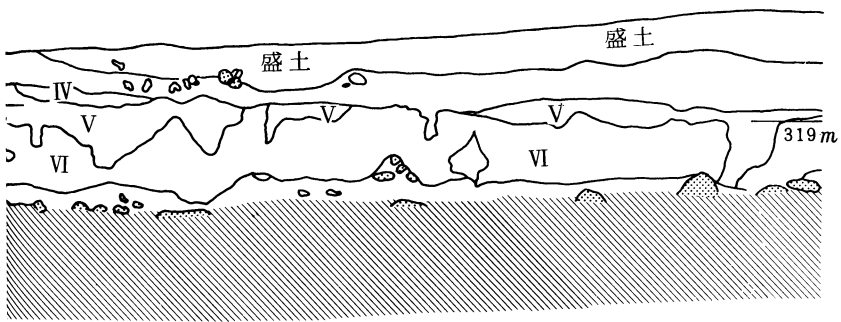
層断面図



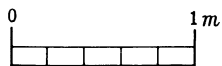
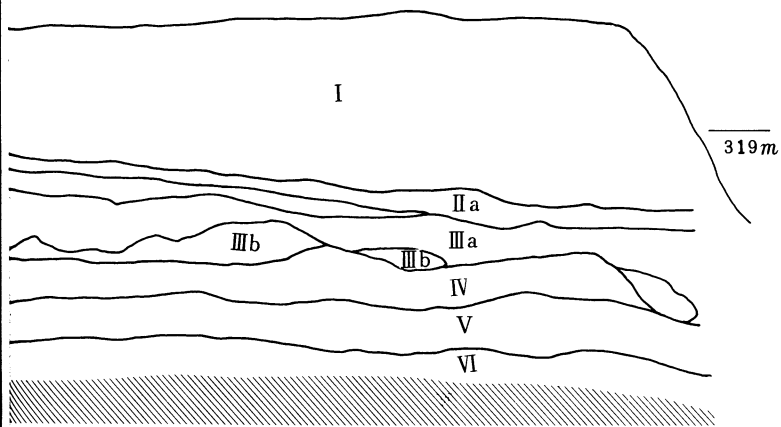
B-4 E

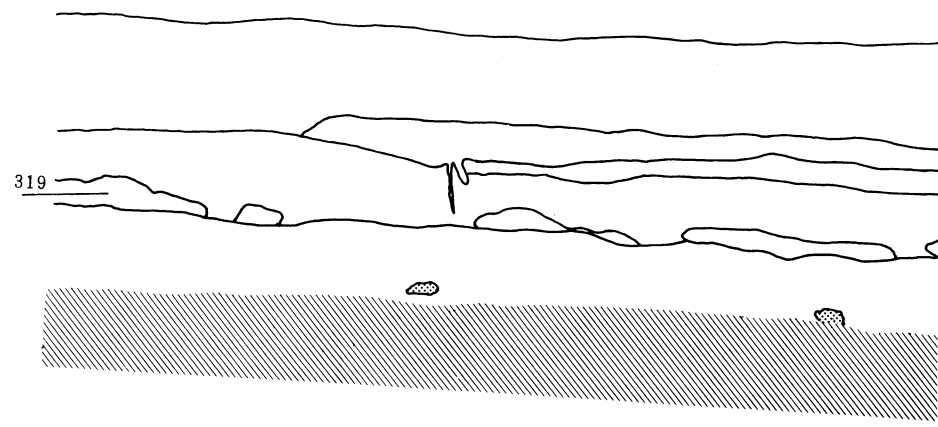
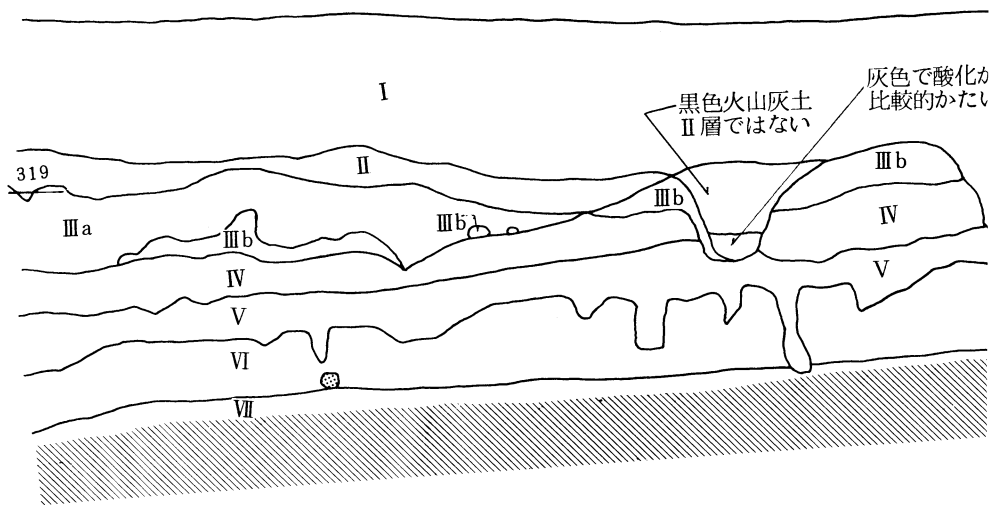


遺跡土層断面図

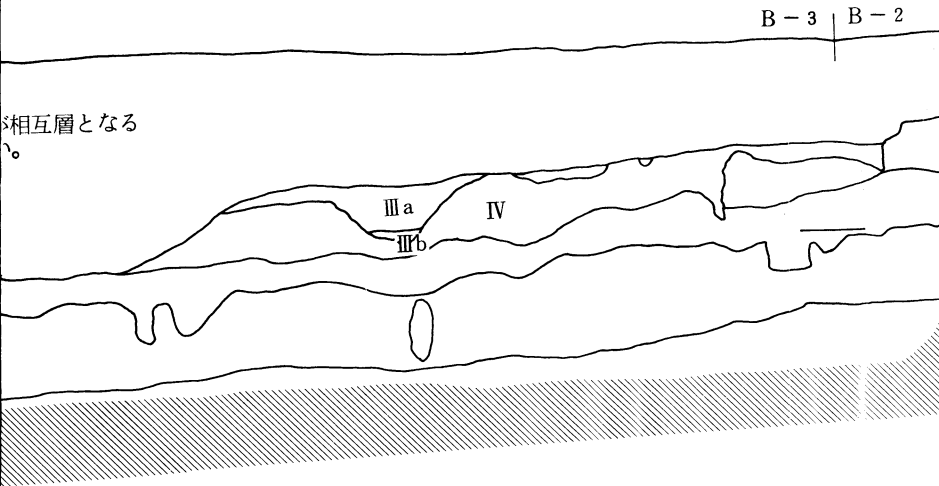


東側土層断面図

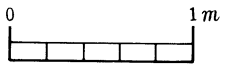
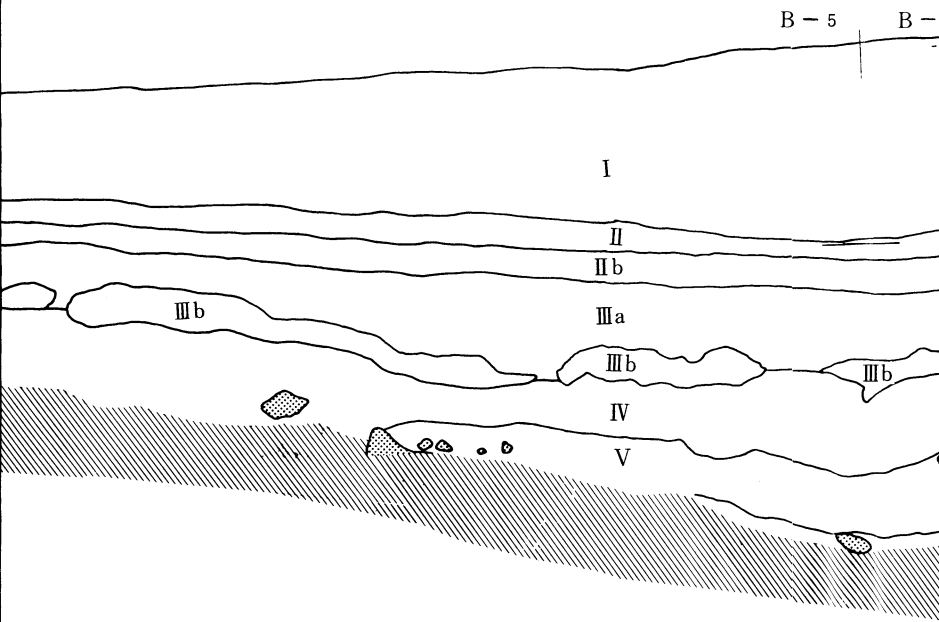




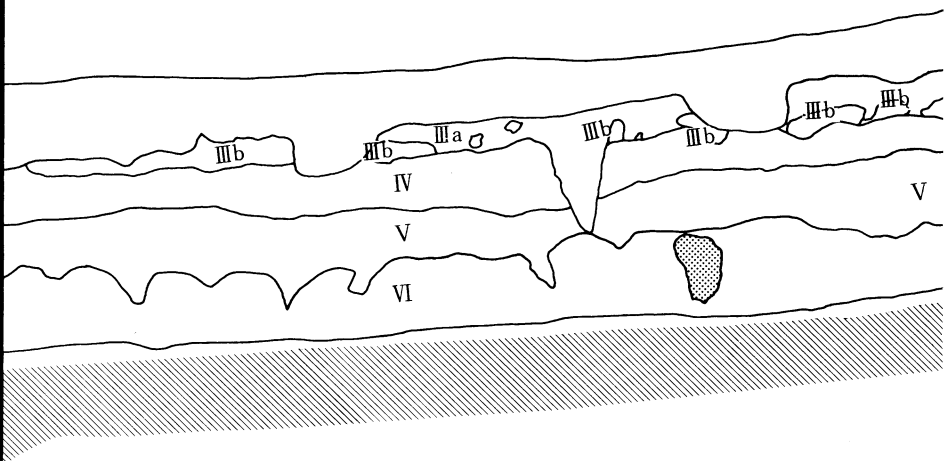
B-2, B-3区 北側土層断面図



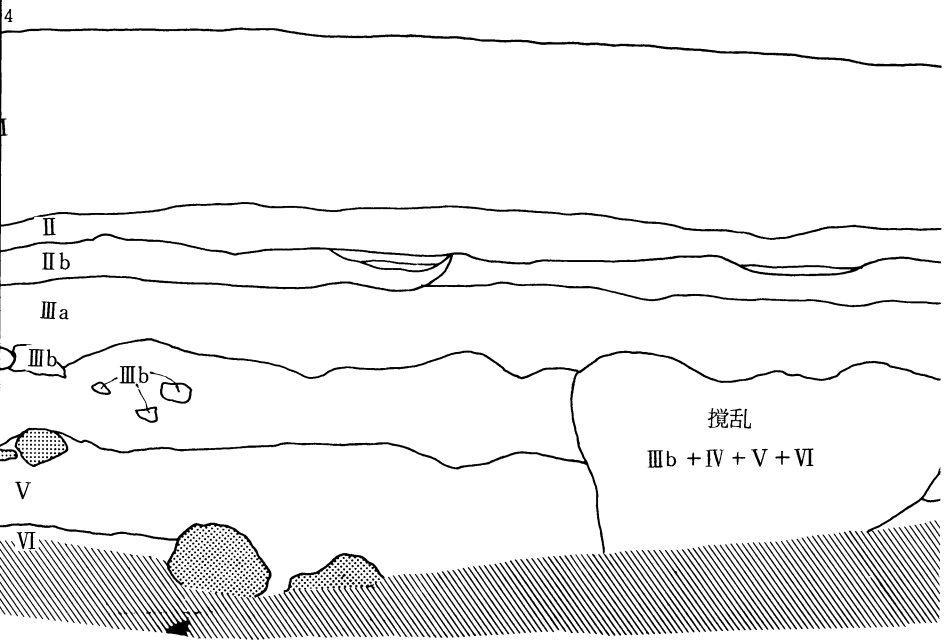
B-4, B-5区 北側土層断面図



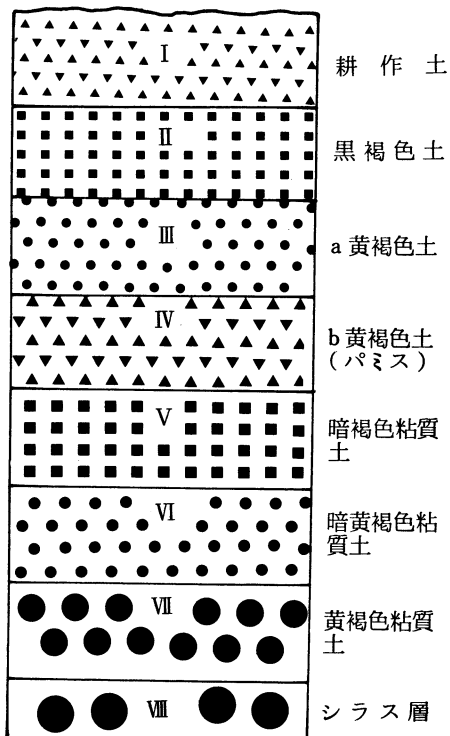
第5図



土層断面図



堀ノ内遺跡土層断面図



第6図 堀ノ内遺跡土層略図

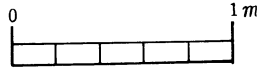
れるのみで大幅な削平が行われている。

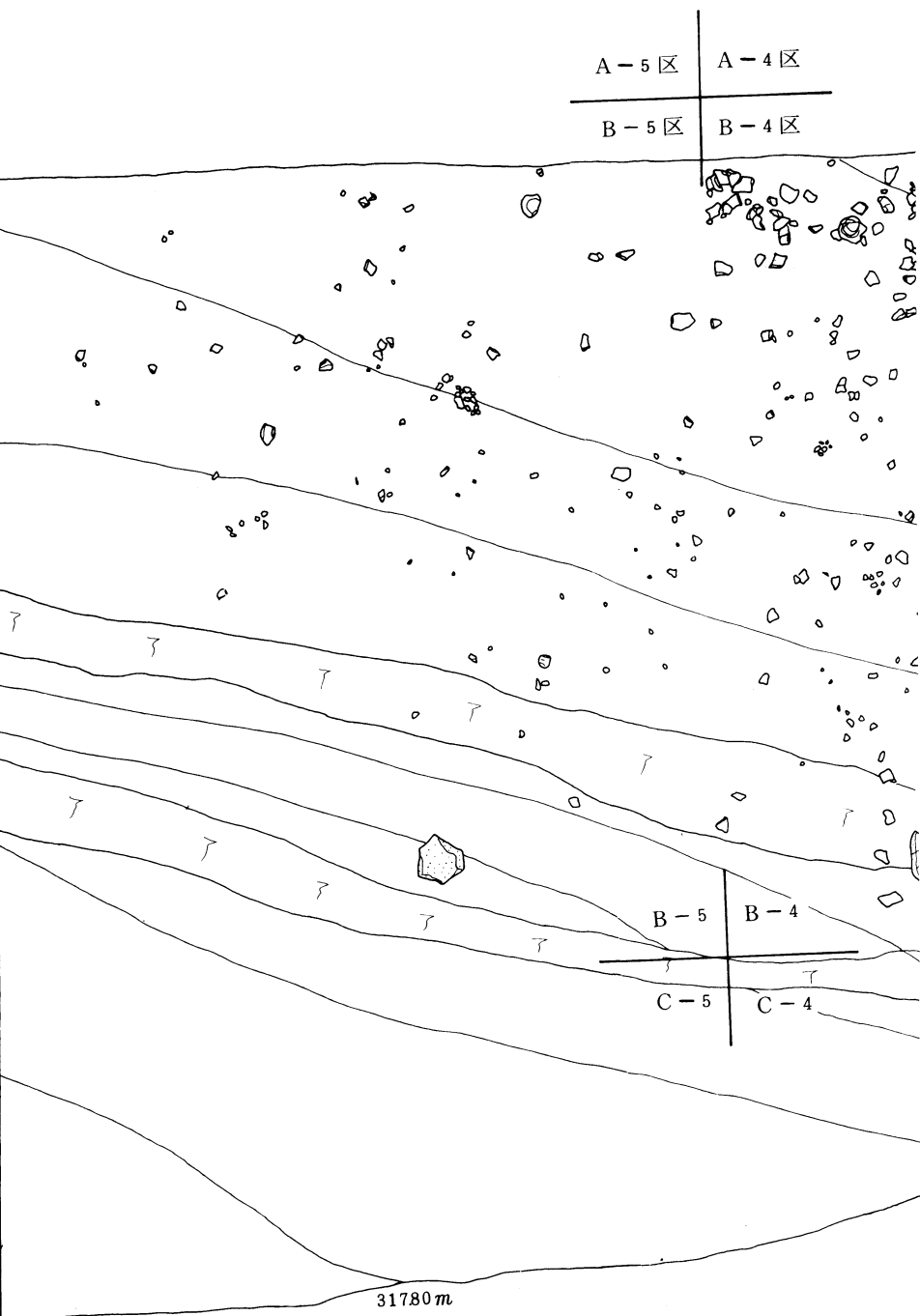
以上、本遺跡の層位は、台地縁辺部に位置している関係か、傾斜地のうえ後世の開墾により大きく削平を受けている部分が多く、不安定な堆積状況を示し、南側から北部へ傾斜が見られ、B-4・5区で中窪みになるような層位を呈している。

縄文時代前期遺物包含層に相当する。Ⅵ層は暗黄褐色粘質土層、Ⅶ層は黄褐色粘質土層で、粘度が高く安山岩の岩が随所に見られ一見、岩石層となる個所も認められる。Ⅷ層はシラス層となる。

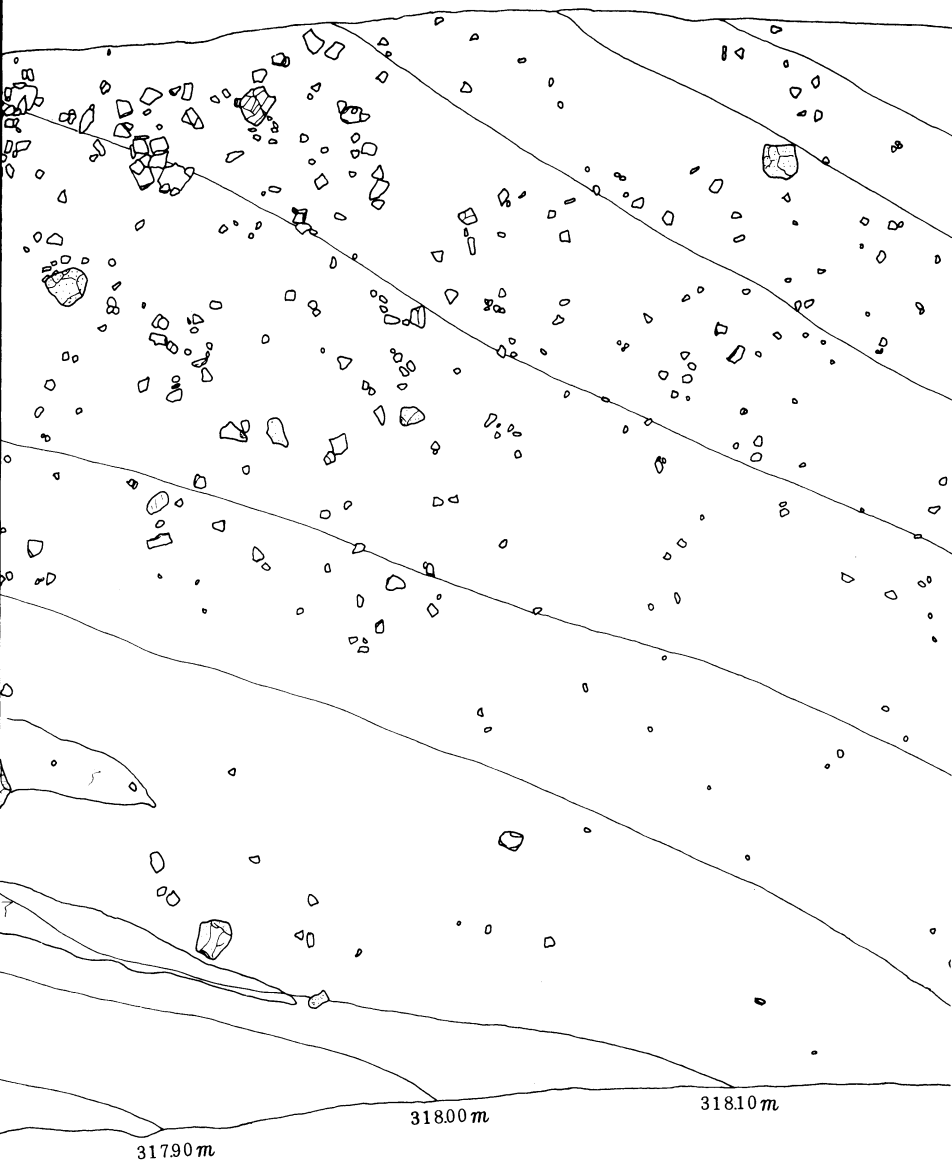
本遺跡の全体的な層位の流れはA-1区からB-6・7区にかけて層は傾斜をなし、B-4・5区で中窪みになるような層位を呈している。

B-2区はⅡ層は削平され、Ⅲ層は部分的に残存し、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の攪乱している個所もみられる。B-3区はⅣ層まで削平が行なわれている個所も見られるが一部Ⅱ層の残存しているところも認められる。B-4・5区はⅡ層遺物包含層は残存し、本遺跡の中心で奈良時代の遺物包含層で、B-4区の一部にⅢb層からⅥ層に及ぶ攪乱がみられる。B-6区はⅤ層もしくはⅥ層まで削平が見られ、随所に樹根による攪乱が多い。B-7区はⅣ層上位まで削平が見られ、Ⅴ層上面やⅥ層上面は層の乱れが随所に認められる。B-8区はⅥ層上位まで削平が認められる。A-1区においては遺跡の南端部に当り、Ⅴ層がわずかに認めら

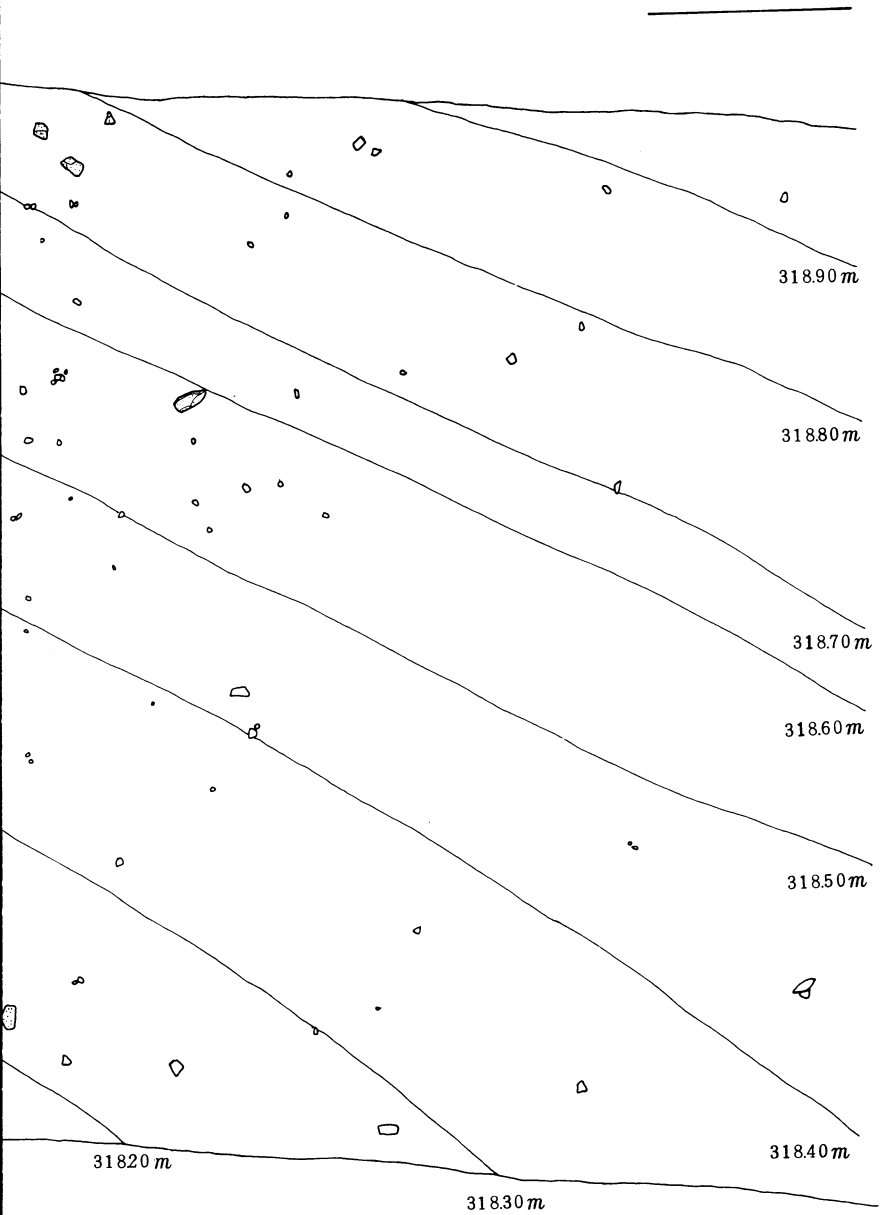




第7図 堀ノ内遺跡・B-4区



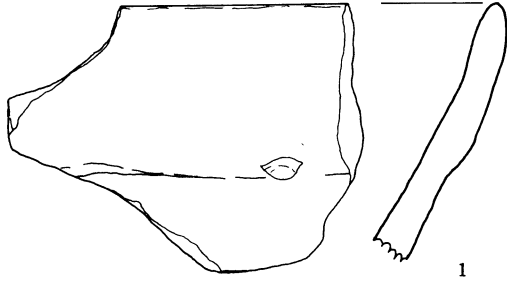
· B-5区遺物出土状況



② 遺物

土器

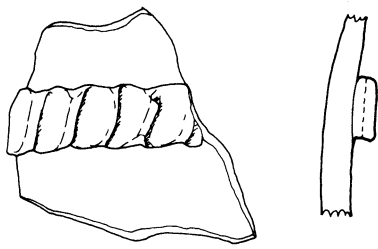
土器には、縄文式土器1片、成川式土器、土師器、須恵器などがⅡ～Ⅲ層にかけて出土した
まとまった形の土器は無く、台地の縁辺部で緩傾斜地ということもあり、ほとんど破片である。



第8図 堀ノ内遺跡縄文式土器実測図 S=1/3

1. 縄文式土器 (第8図)

1は粗製の鉢形土器の口縁部と思われる。
口縁部は、かまぼこ状に丸味を帯び若干内
弯する。内側は篋研磨を施す。胎土に石英
粒や小礫を含む。色調は赤褐色焼成は良好。
Ⅲ層出土であるが時期は不明。



第9図 堀ノ内遺跡成川式土器実測図 S=1/3

2. 古墳時代

成川式土器 (第9図)

2は頸部がしまる甕形土器片と思われる
頸部にキザミ凸帯を貼り巡らす。

全体的に磨耗が激しい。胎土に雲母や石
英を含む。色調は黄褐色、焼成は良好。

3. 奈良・平安時代

甕 (第10, 11図)

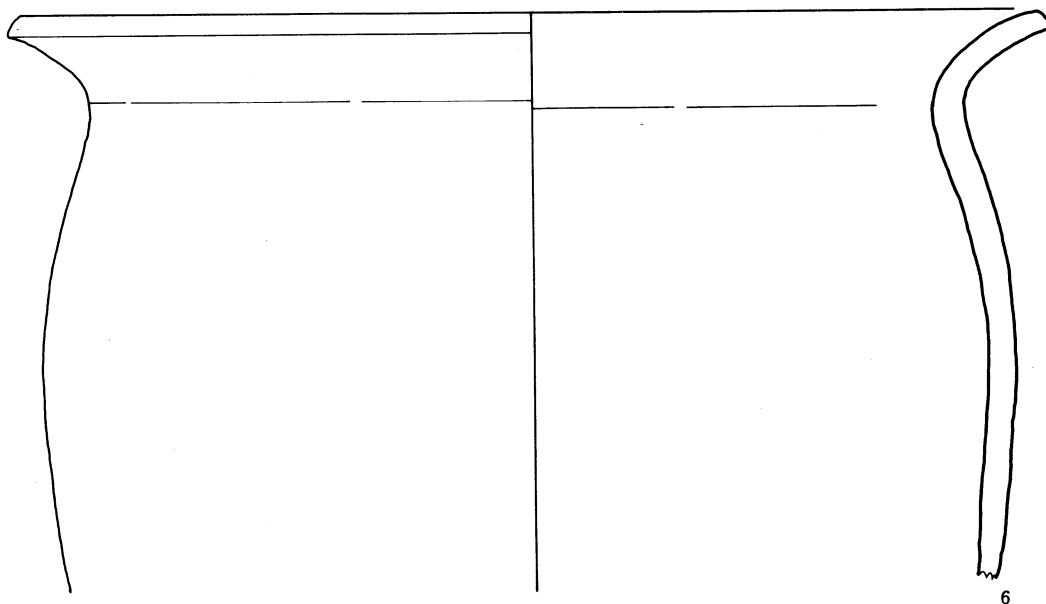
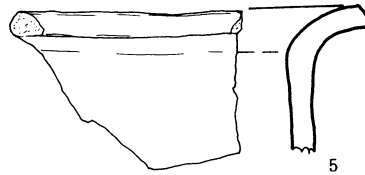
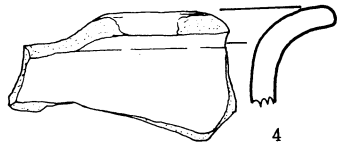
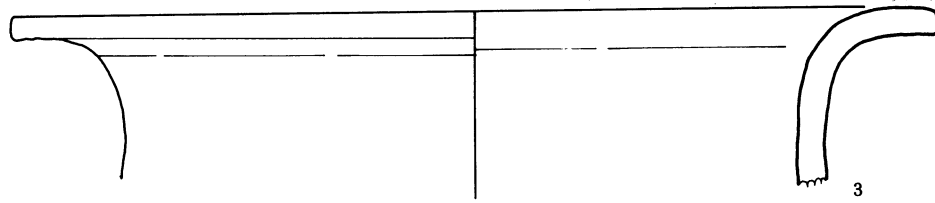
甕の口縁部片である。わずかに胴部は丸く、頸部で若干しまり、中縁部は「く」の字に折れる器形である。ほとんどのものが器面に著しい磨耗を受け、ザラザラする。胎土には、小礫、石英を多量に含み、軟質で弱々しい。色調は、赤褐色を呈す。焼成は不良である。

6は、復元径28cm。胴部は丸味を呈し、頸部が若干しまり、「く」の字に折れ、外反する口縁部となる。口唇部は平担を呈す。器面は磨耗が激しく、器面にハケ目調整の痕跡が薄く残る胎土に小礫、石英粒含む。色調は赤褐色。焼成は軟弱である。

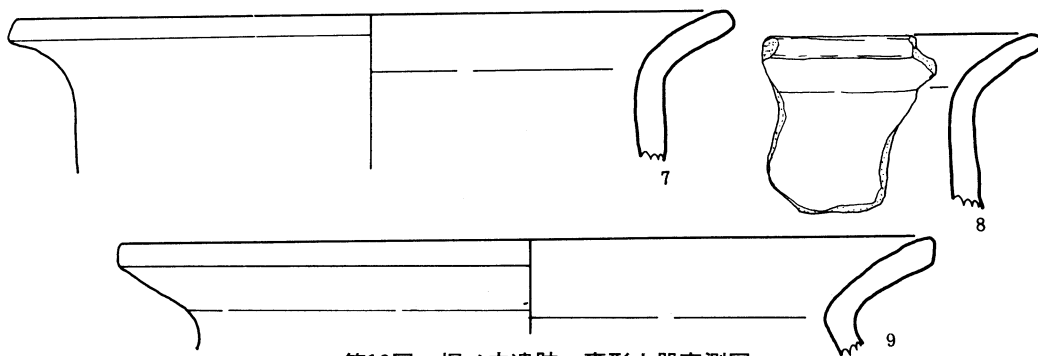
14は、甕形土器の胴部破片である。頸部に浅い凹線文を施す。器面にハケ目調整痕が、かすかに残る。胎土に小礫含む。色調は赤褐色を呈す。焼成は良好である。

坏 (第12図)

坏は、篋おこしの底部で、体部から口縁へ外開きで、わずかに外反する15と直行する16がある。16は灰色を呈し、器壁は薄く、しっかりしている。他の土器は、磨耗が激しく軟質である。20は、平底の底部である。



0 10cm



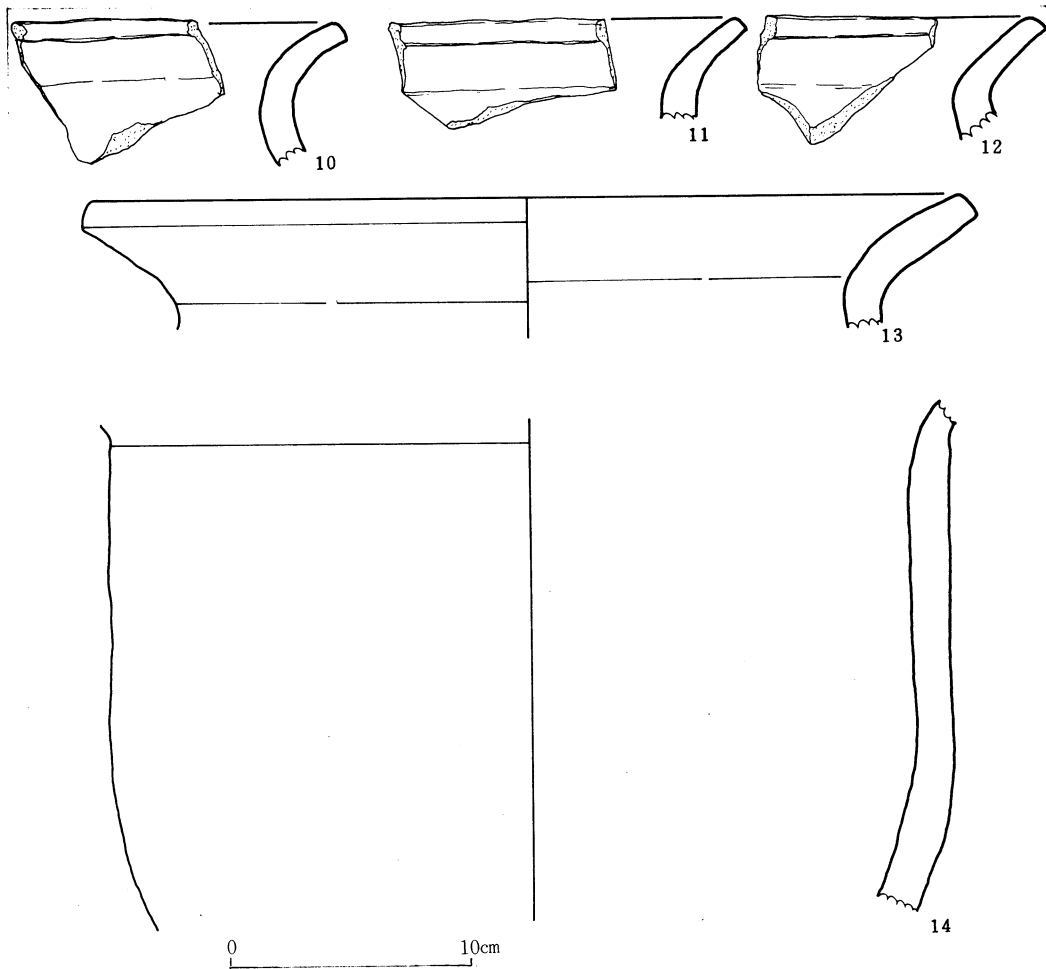
第10図 堀ノ内遺跡・甕形土器実測図

内黒土師器 (第12図)

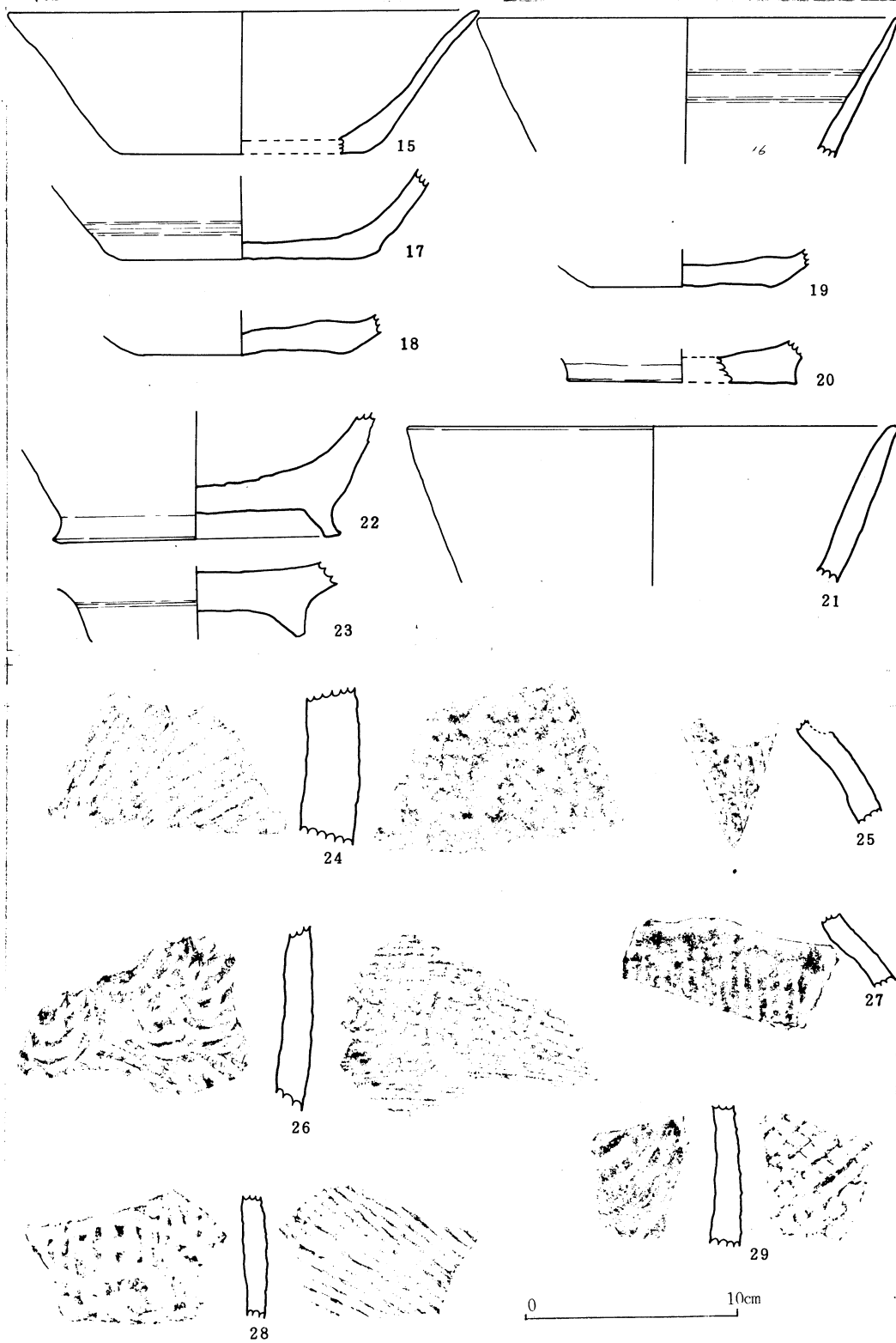
坏 (21~23) 高台付の坏である。21は外開きで畳付は平坦に仕上げる高台となる。腰部から口縁へ直線的に移行する。器面内は剝落を受けている。22は、研磨された内黒土師片である口縁部は直行する。21~23とも磨耗が著しく剝落を受けている。

須恵質土器 (第12図 24~29)

器形などは破片の為、定かではない、内外面に、格子の叩きや同心円のくずれの叩きを施している。須恵質土器で、全体が灰色を呈している。24は器面に、うっすらと褐色の自然釉を認める。



第11図 堀ノ内遺跡 甕形土器実測図



第12図 堀ノ内遺跡土師器・内黒土師器・須恵器実測図

V. む す び

本遺跡は、標高約320mの台地上の北側斜面に面する畑地の縁辺に位置し、九州縦貫自動車道建設に伴う附帯工事部分で、畑地の周縁部を通る既成農道の拡張部約500㎡が対象で発掘調査を実施した。その結果、全体的な層位の流れは、A-1区からB-6, 7区にかけて傾斜をなし、B-4, 5区で中窪みになり、遺物包蔵層であるⅡ層黒褐色火山灰土層はA-1区・B-2区・B-6区・B-7区では、耕作や開墾などにより削平されている。遺物包含層の残存が認められたB-4区・B-5区においては、土師器を中心に坏や甕形土器、内黒土師器の坏などの小破片が多量に出土した。

以上、本遺跡は台地縁辺部の畑地約500㎡の調査を消化したが、うち半分は攪乱などを受けており、残存部では奈良時代の遺物が主体で、遺構その他のものは検出されなかった。この遺跡の主体部は調査対象外へ延びることは確実であり、その意味では遺跡の保存はなされる結果となった。



調 査 風 景



層 位

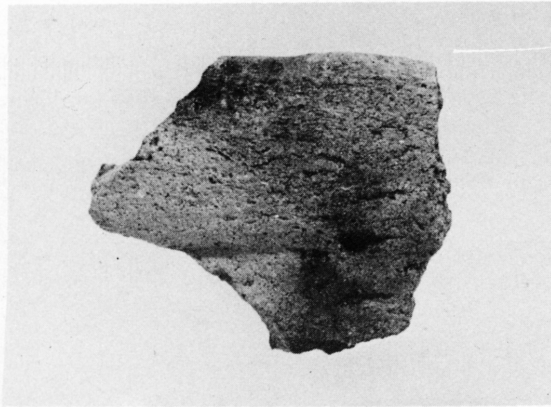


A-4区 土器出土状況

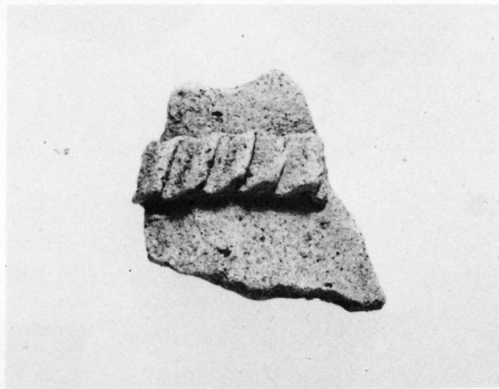


A-4区 土師器出土状況

図
版
3



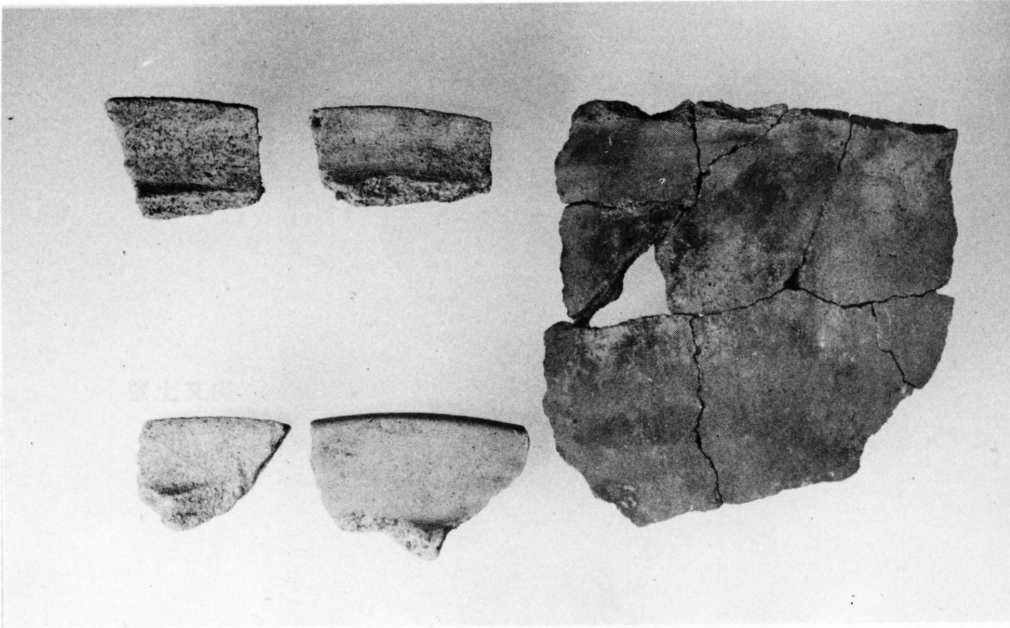
縄文土器



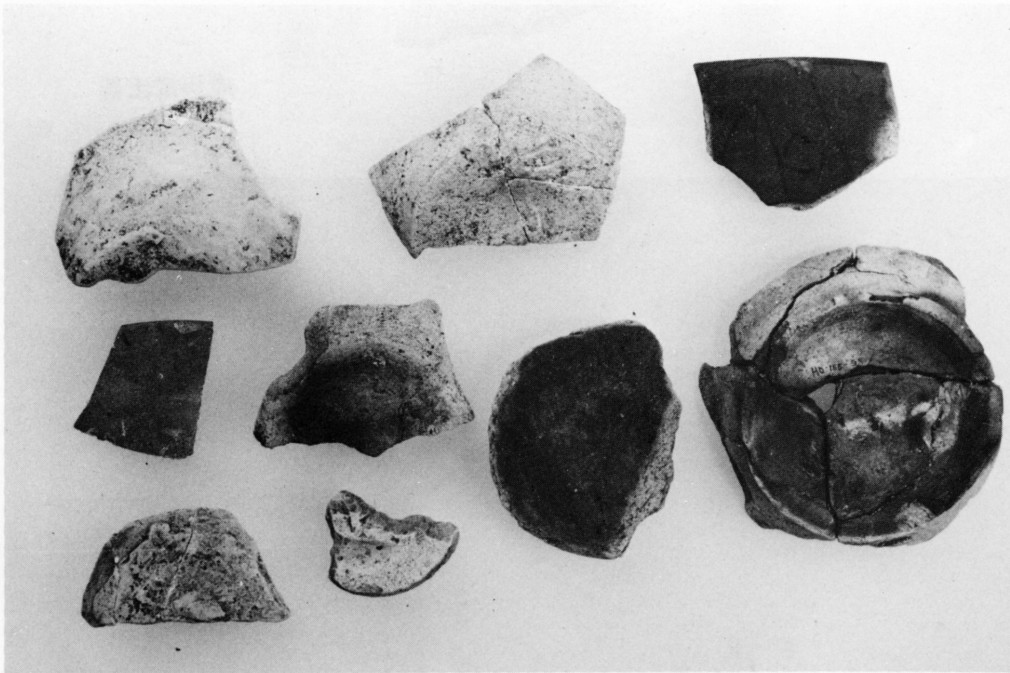
成川式土器



甕形土器

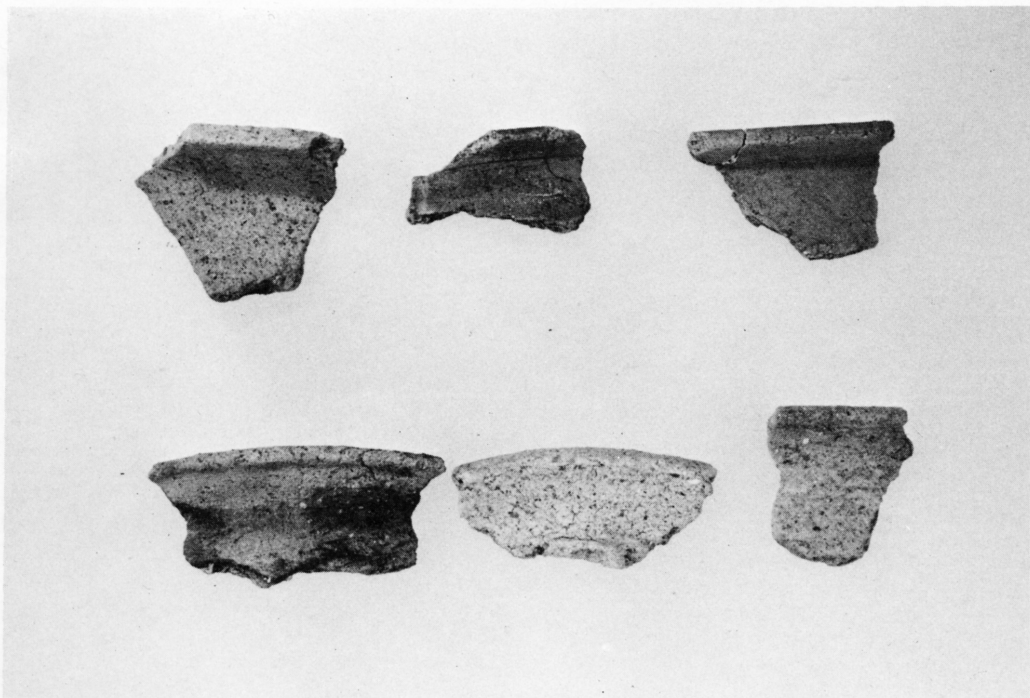


甕形土器

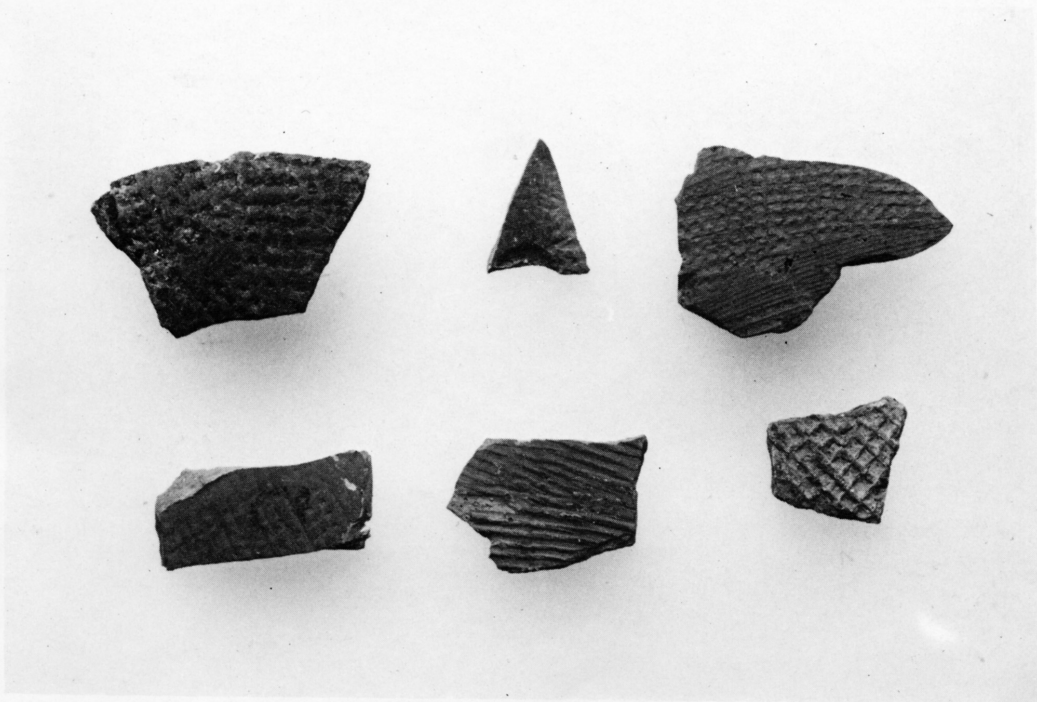


土師器

内黒土師器



甕形土器



須恵器